

神様転生自己満排球部

YADANAKA

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ハイキューには様々な作品があるのに、白福ヒロインものがないから書いた。

需要？何それ？

自己満で悪い？

読みたいから書いた。

つまり言論の自由・表現の自由の体現者。

なわけないけど。

ツンデレにハマっておきながらの見切り発車である。

※作者はハイキューの裏話とかは詳しくありません。

なので独自設定という名の捏造の部分も多々出ると思われます。
それでもよければよろしくお願いします。

皆様のおかげで初めて日刊ランキングにのれました！

ありがとうございます!!!

目次

能力値	1
展開に合わない小ネタ集	7
中学生時代	
第1話	19
第2話	41
第3話	58
高校1年生	
第4話	80
第5話	105
6話	128
第7話とある排球部員のお話	なお

排球描写はない模様	150
8話	161
9話	175
10話	193
11話	205
12話	220
13話	239
高校3年生(原作開始)	
14話	257
15話	276
16話	299

能力値

1年時

身長 175.6

指高 216

最高到達点スパイク 291

ブロック 275

2年時

身長 178.4

指高 220.9

最高到達点スパイク 304

ブロック 293

3年時

身長 180.1

指高 222.2

最高到達点スパイク 319

ブロック 309

1年時能力バロメーター

パワー 1

バネ3

スタミナ4

頭脳4

テクニック4（レシーブのみであとはザル）

スピード3

2年時能力バロメーター

パワー2

バネ3

スタミナ5

頭脳4

テクニック4

スピード3

3年時能力バロメーター

パワー3

バネ3

スタミナ5

頭脳4

テクニツク 4

スピード 4

なお2・3年時のテクニツクに関しては

前半・防衛時 +1

後半・攻撃時 —1

あくまで暫定です。

今後も当作品での活躍や読者の皆様によるコメントにに応じて変動します。

あとこの数値をハイキューのとある図にはめ込むと面白い事に……？

みんなの能本評価！

木兔↓1番の親友!!でも時々辛辣

鷲尾↓木兔と違って色々頼りになる

木葉↓イジってくるけど楽しいヤツ

猿杓↓いざれ主将・首相になりそう

小見↓ノリが良くて面白い

白福↓カッコいいし専属のシェフになってくれそう

雀田↓守りたくなる弟?あと鈍感

中学のチームメイト↓実はかなり熱いやツ？

三軍キャプテン↓アンダー上手いなあ：

チームメイト↓スーパレシーブ製造マシーン？

二軍キャプテン↓安定感があるようでないな

チームメイト↓負けらんない

一軍キャプテン↓守護神には絶対になれないだろうな

チームメイト↓サブ・スパイク・ブロック教えてやるよ

闇路建行監督・コーチ↓うんいいかんじ

夜中司コーチ・監督↓楽しみな子

他校の人達↓??? 「なんか驚かれた」

??? 「なんでバレた？」

??? 「何故ここに来ない」

??? 「研磨と同類？」

能本鷹木の名前の由来的なヤツ

能ある鷹は爪を隠すから連想させました。

普段は全力を出さず、いざと言うときに全力で戦う。

※本気で戦っているが体力温存するのが常。

ハイキュー風プロフィール（絵・図は脳内変換）

能本 鷹木

（のりもと たかき）

私立梟谷学園高校 1年4組

バレーボール部

ポジション：ミドルブロッカー

身長：175.6 cm 体重：62.1 kg

（高校1年4月現在）

誕生日：8月18日

好物：マカロニ

最近の悩み：だんだん熱血系になってそうで心配

文字数が！色々小ネタ入れたのに足りない！

誰だ「塵も積もれば山となる」言ったヤツ！

あと最低1000文字って設定したヤツ！

お前設定を長く書く難しさわかるのか!?
わかる? 分かってないからこうなってるだろうかあ!?

あ!あと10文字切った!

やっと足りた……

展開に合わない小ネタ集

研究熱心白福さん！

「お！セミみーっけ！」

「……………」

「おわつと！ムカデかぁー久々に見たな」

「……………」

「ん？なんだハエか。ゴミ捨て場が近いからか」

「……………」

「これもしかしてゴキか？潰さないようにしないと」

「……………」

「うへえっ?!?!はっはちいいい?!?!無理無理無理無理無理いいー!!!」

「……………蜂は無理っつと」

—————

美人で若くて（23）のプロポーシヨン抜群の先生がスカートではなく、ジャージで教室に来て授業を始める。

担当の授業は国語。今回はことわざとか、四字熟語の勉強がメインのようだ。

「はい。じゃあこの問題を能本君」

問題は「○の○に○○」に当てはまることわざを書くこと。

ヒントは最初の○から順にくま、くみ、くつ、と必ず入る事。そして漢字を使うこと。この時俺は思った。正解は分かるがなんか巫山戯たいな、と。

先生がスカートで魅力的な格好だったら真面目にやる。しかし、彼女はジャージで教室にきた。大会とか部活とか木兎とか色々とか木兎、あと授業とか木兎で疲れてるのに、癒しがないのは頂けない。

というわけで俺は彼女を指さしながらこう書いた。

——— 今の君に幻滅 ———

「う、うん? どういうことかしら?」

「先生よ……なんでジャージなんだ!! 美人なんだからお洒落しろよオ!!」

「はっはあああ?!?!」

「そーだそーだ!!」

「何ジャージ着てるんだ!!」

「先生! 俺はどんな先生も好きだぞ!!」

『えー……』

「悪くはないけど……」

「それなら彼シャツのがいいよな!!」

「そうそう!先生!俺のジャージ来ませんか!!」

「い——」

「何言つてんだお前ら!ジャージこそ至宝だろうが!」

「いや!制服だろ!」

「いいかげんに——やめ!あつ!チャイムだ!」え?」

「おーい鷹木!!遊びに行くぞお!!」

「男子皆言っちゃった……ね、先生」

「え?えと、何?」

「鷹木に手え出さないでね………??」

「ヒツヒイイイ!!?!」

正解は馬の耳に念仏

—————

ミッション小見からマカロニを奪い取れ!」

「鷹木い今暇か?」

「ん?どした小見」

「なんか面白い返ししてくれよ。そしたらお前の好きなマカロニグラタン奢ってやる」
「いいよー（絶対食ってやる）」

「（殺気？）キロバイト↓メガバイト↓ギガバイト↓テラバイトって有るんだけど、このテラバイトよりも上のを面白く作って」

「よし、行くぞー！」

「（何こいつ。普段のダラダラ野郎はどこいった？）んじやあどうぞ」

「キロバイト↓メガバイト↓ギガバイト↓テラバイト↓正社員！」

「……あ！バイトの階級ってことか！わりいーわりいー。なるほどって思っちゃった」

「（メ・ん・）？」

「もっかい別のやつやろうぜ」

「……………」

—————

日夜研究能本君！

木兔の力を最大限に活かす方法を探していた、猿代と鷹木。実はこの2人がこの代の梶谷の安定剂的な役割を果たしている。

理由は簡単。

木兔↓おおい！さーいきよー！！サイキョウバケモノ

小見・木葉↓ヒヤッホー!!五十歩ヒヤッホオオオ!!

鷲尾↓ブンブンツッ!練習好き……………あと、寡黙

だから猿代と鷹木は上3人を止めなきやならない。

「少なくとも木兎を操縦する方法があればいいんだけどー、さすがの鷹木でもキツイ?」

「んー…操縦するって言うより、しよぼくれないように出来るかどうかなんだよなあ。調子の波はさすがにコントロール出来そうにないし——いや、ちよつとやってみるか」

「なあなあなあ!これなんだ鷹木!!」

「レモンの蜂蜜漬だよ。手作りしてみた。どうだ?」

「モグモグ……………ゴクン——上手い!!ハムハム……………うめえー!!もつと食っていいか!?な?!いいよな!!」

「(声のトーンが食いますって言ってるよ)いいよ。それ食えば普段より体動くんじやないのか?」

「!!おお!!なんかそんな気がするぞ!!うおっしや——!!やるぞやるぞおー!!」

「今日の木兎凄いやる気だったけど、何渡したの?」

「このレモンの蜂蜜漬け（2日）だよ。」

「かつこ2日って——もしかして3日とかあんの？」

「そそ。良いプレーをした翌日は長く良いものを。逆なら短く悪いものを、ね」

「なるほどねー。それならある程度行けそう」

「因みにこれが俺が作ったやつ。でこつちが白福の」

「おー…白福のが上手いな」

「その通り。しかも俺のは最高傑作の4日漬けたやつ。対する白福のは半日………なんなのやら」

「これも褒美に出すのね？」

「そーいうこと。これで少しはコントロールできると思う………そうだと信じたい——
——ていうか、白福に負けたのが悔しい」

「3人組とレモンの研究ってわけだ」

「そゆこと。だからこれから猿代には色々食ってもらうからな」

「……………（まずいのはない。うんダイジョーブ）」

「余りにも酷いプレーした時用のも作んなきゃな。食○のソーマ見てこよつと」

「?!?!」

「—————」

テストで一番怖いのは？

「木兎よ、お前なんであんなだけ教えたのに点数が赤点なんだ？説明してみ？怒らないで聞いてあげるから。」

「おつおう！じ、実はな！先生から問題用紙が配布されるだろ？そして名前をちゃんと書いたんだ！」

「なるほど。ちゃんと書いたのか…。偉いじゃないか」

「だろ!?それから問題を解いてったんだ！そして全部埋められたんだ！」

「おおー。凄いじゃないか。確かに埋まつてるもんな」

「だけどな!?裏がある事にテスト回収される時まで気付けなかったんだ!!!だって名前書くとこあったから表だと思っただもん！裏のこと忘れてたんだもん！」

「なんで不貞腐れてんだよ……だもんって…」

正解は テスト終わり 裏面に気づく あ、オワタ

「熱い時間帯に集中して遊んでたら症状に発展した」

「…うくん？もう元気そうだね？これなら授業出れるかな？戻っても大丈夫そ〜？」

そう言つて部屋から出ようとすする白福。うん心配してわざわざ来てくれたのにふざけてたら怒るわな。すんませんでした。

「いやマジでかなり体怠いんでノート後で見せてください」

「んんん？別に今能本の書き写してあげてもいいよん？」

「マジで!?助かるよ。俺のノートは……どこに置いたか忘れたけど、多分勉強机の近くにある……はず、多分。見つけてくれると嬉しいナス」

「………やっぱりん能本ってどこか抜けてるとこあるよね。何も考えずに体動かして今動けなくなったり、逆にプレーしてる時に考えすぎて動けなくなったり………中学の時みたいに」

「そんなにデイスらんでもろても？オケ？」

「……じゃあ、バレンタインでチョコを貰ったことある？それか告白されたくとか」

「………むかーしむかーしに一回だけ……なんでその話？」

「バレンタインチョコがカレールーだったり、マシユマロだったとか？」

「いや何その地獄。せめて美味しくないとかじゃないのかよ。失敗作とか」

「失敗作はないと思うよ？男子って馬鹿だから失敗作でも頑張って作った、って言えばそれで喜ぶし」

「(何も反論出来ぬ)」

「で、それ本当？どんな子にされたの？」

「それは……まあ………個人情報なので」

「黙秘権ってこと〜?」

「そうそう、言えないことなんだよ」

なんとかでつち上げようにも今いい案が出るわけないな。頭怠いもん。

「沈黙って大体肯定だよね〜。それに、男子ってゼロの時にゼロじゃないって否定するけど〜…能本は本当に貰えたの〜?」

「……………」

もうやめて俺のライフはもうゼロだよ!

「私があげたの忘れたんだ」

「あつ、いや、そういうわけでは…義理だったろ?だからノーカンっていうか」

「私ノーカンって言った覚えはないけど」

「え?」

「じゃあね〜」

「?!?!」

「え?まじでどういうこと?」

「寝る所を手込めにされかけたの〜」

「ほうほう」(ニヤニヤ) 黒尾

「やるな」(真顔) 牛若

「いや、してないから」

「あれ〜? 私に抱きついてたよね〜?」

「ほー?」(ニヤニヤ)

「やるな」(真顔)

「最終的には激しくしたかもな」(ノリ)

「さっ!? さっ最後まで優しくしてほしいです……」(ガチ)

「ほうほう」(ニヤニヤ)

「ヤルな」(真顔)

「ってちっがーっう!!」

「息びったりだな」

「まるで長年ペアを組んで来た選手のようだな」

「バレーだと何だろうか?」

「難しいな……」

—————

「よう! 鷹木今から! 大喜利やろうぜー!」

「? 大喜利? 木葉出来んの?」

「舐めんなよ？話題くらいなら出せる!!」

「……………で、何すんの？」

「今から俺が言うやつにリズム合わせて言葉を埋めるんだ。OK？」

「リョーカイ。早くやろうぜ（眠い）」↑深夜電話越し

「進んでするのが、人の上。真似してするのが、人の中。言われてするのが人の下。このリズムに合わせて最後まで一個作るってヤツ。イケるか？」

「少しは考えさせろよ。——おし、良いよ」

「よっしゃ行くぞお？あ、どうせなら俺が最初だけ言うから、お前は人の上中下言ってくれよ」

「なんでもいいから早くやろうぜ」

「おし、進んでするのが？」

「人の上」

「真似してするのが？」

「人の中」

「言われてするのが？」

「人の下。…そしてお前が人の屑！お休み」

「はア!?誰が屑だ!?!——って切りやがった……寝るか」

ミツシヨン小見からマカロニを奪い取れ！2

「じゃあ次のお題な作品のタイトルの数字から数字の3を引いて面白くしてくれ」

「アナと雨の女王」

「……………？いや、数字だぞ？」

「雪から下の3を取った」

「……………あ！——ごめんもっかい」

「（・言・）」

「ラストなラスト！お題は……………それじゃあこんなホラー映画は嫌だ！つてやつで」

「怖い事が起こる10秒前になると画面にカウントダウンが表示されるヤツ」

「合格！」

「あ？」

中学生時代

第1話

最初は良くある、ちよつとした好奇心だった。

幼い時に信号機を見て「あれなに？」と親に聞くのと同じ好奇心だ。

ただ信号機と違うのは……

「ライトライト!!」

「ストレート締めろ!!」

「ブロック3枚付け!!」

「ふんぎッ!!」

「上がった上がった!!」

「ぼくとさん!!」

「っしやあぁー!!」

スポーツだということ。

——

「俺とお前と皆んなで全国のトップに立つぞ！」

中学生の時にそう言われてから何年たっただろうか。

気付いたら小学生になっていたあの日、前世の記憶を思い出したその時に、おそらくはその日からストーリーはスタートしていたのだろう。

そして中学生の時に、あの言葉を言われた時に、完全に俺は戻れなくなったのだろう。

これは梟谷にとある転生者が存在するお話。前世の記憶を持つて。

――

俺の名前は「能本鷹木」（のりもとたかき）中学3年生だ。

今は夏休み前の期末テストの真っ最中で、クラス内がシーンとしている。

周りを見渡せば、寝ているもの、泣きながら解いているもの、まじめに解いているもの、カンニングしてるもの、そもそも休んで欠席しているもの、鉛筆を転がすもの、そして他の事を考えたり、絵を描いているものがある。

ちなみに俺はもう終わって暇なので、物思いに耽っている。

なんですか？

それは「俺は天才だから」だ。

……とか言えたらカッコ良いが、俺はそんなではない。

何を隠そう、この俺は転生者だ。

それも神様に会ったことのある、ね。

しかしながらチートではない。

ないっつらない。

特典は貰えたが、そんなすごいものではない。

一つ目が服装が似合いやすい顔。（服選びが楽になるし）

二つ目がすごい精神力。（辛いこともなんとかできそう）

三つ目が高い身体能力。（怪我とか病気とかはやだし、勉強も楽しみたい）

まあ、十分すぎるものなのは認める。

折角貰えるとの事だったし、欲張ったのは事実だ。

俺は昔から勉強するのは好きではないが、嫌いでもなかった。

だから頭の能力や運動神経を上げられるだけ上げてもらったんだ。

そうすれば手を抜いても種々のテスト（関門）をクリアできる。
今世はこの能力を使って、だらだらと暮らそうと思っていた。

しかしこの世界はそうは問屋が卸さない、と言うことに記憶を取り戻すと同時に気付かされた。

だつて思い出した時、目の前に「みみずく」がいたんだもん。
なんなら思わず尖った部分をツンツン触って現実逃避しちやつたし。
記憶を辿って仲良かった事を知った時は絶望したよ。はっはっは……

それはともかくとして、前世ではこれでも大学1年生として1年間順風満帆な人生を送っていた。

因みに死因は溺死だったそうさ。

まあ、風呂でのんびりしてから記憶が無いからそう言う事なんだろう。

どうやって転生したかつて？

神様が適当にルーレットで決めてくれましたよ。

神様って忙しいんだってさ。

そんなでもってルーレットで決まった場所は漫画の世界。

テンプレ的展開で好きな漫画の世界に入れた以上、存分に満喫したいと思うのはファンとして当然。

その為にも俺はこまめに予習復習をしている。

勉強の補修で部活ができないとかは考えたくないからな。

主人公のようにはならん。それだけは絶対に。全ての面から俺のスロウライフを守る！

そして勿論、ファンとして試合や練習の結果をあまり変えたくもない。

だから【補欠部員】の立ち位置となる事も必須だ。

結末をはっきりと覚えてるわけではないが、ここにいる面子を見ると中々に重要な場所だと理解させられる。

それ故に、俺はそつと補欠部員へとフェードアウトする事を望む。

だが、神様に物申したい事が一つだけある。

それは…

キンコーンカンコーン♪

「よっしゃあ！終わった!!」

「遊びに行くぞー!!」

「おい鷹木い！バレーしようぜ！」

「いや待てよ木兔!!休み時間はサッカーする約束だろ!!」

.....。

今のでお分かりだろうか？

「えー！いいじゃんか！バレー楽しいじゃん!!」

「そうかもだけど、準備に時間かかるだろ？」

「ここはサッカーにしとこうぜ！な、木兔!!鷹木!!」

そう、ここは漫画の世界（ハイキューの中）であって漫画の世界（原作の場所）ではないのだ。

「おい、みんな！急がないと場所取られちゃうぞ!!」

「なにい!?急げえー!!」

「お前らついてこい！近道だ!!」

「おう……つて！そっち（窓）から行けん（飛び降りれる）のはお前だけだ!!」
そう言つてクラスの男子全員が走り出す。

ここは2階だから誰でも飛び降りる事は出来なくは無いはず……多分。
そして先頭の子が廊下に出た瞬間、壁（先生）にぶつかった。

『あ……』

「お前ら……テスト当日じやろうがああ!!!」

『ギヤアアアア!!!』

「テスト当日くらい!!勉強せえええい!!」

『に、逃げろーーー!!』

「逃がすかアア!!」

言いたいことは、そう、

「なんでここに転生させるんだよー!!」

と言ふことだ。

今まで何度そう思つた事か……

現世では俺の親はもうどちらもない。

が、親が既に他界してる事に関しては問題ない。

前世の親に恩返しが出来なかった事は残念だったが、大学生活を1年間経験したこと
もあって一人暮らしでの生活に問題はない。

問題は俺が細かい設定までは知らないと言うことだ。

それはつまり木兔がどう言う経緯で原作のようになったのかを知らないと言う事だ。
これではどうキャラクターに接触すればいいか分かったもんじやない。

だが、それはまだなんとかなる。

細かい事は分からなくても、木兔をバレー部に入れて梟谷にも入れればそれで大筋の
問題は無いはず。

あつたその時からこいつはずっと「へいへいへいへい」言ってるし。

馬鹿だからそんなむずい話じやないはずだ。

しかしそれよりも大きな問題がある。

それは「スローライフが出来ない」と言う事だ。

木兔がいるからといって別にスローライフができなくなるわけじやないって？

お前舐めてるんじゃないのか？木兔の事を。

あいつがいるとクラスが180度変わるんだよ！

うちのクラスはな、最初はな？ 本当に、ほんつとうに、落ち着きある良いクラスだった…。

しかし今となつてはクラス全員が運動大好き・熱血漢と化してしまっている。木兎恐るべし。

だが俺はめげなかった。

それくらいは眠そうな顔とか態度をとれば、問題ないと思つていた。

健気に対抗していたんだ。

だがしかし俺のそんな甘い考えなどどこ吹く風。

毎日のように「あつそぼーぜー!!」と声をかけられて、拉致られる。

そしてそれと同時に毎回先生や女子達から同情の視線を頂戴する。

どうせなら黄色い視線が良いと、何度思つて何度諦めた事か。

飽きる事なく毎日のようにテストがない時は最低でも1日3回はそうなる。

だから俺としてはテストの類はウエルカムなのだ。

お陰で嫌いな勉強が好きになりました。ありがとうございます。

そんな事を考えていると、先生に首根っこ掴まれたみみずくがやってきた。目をキラキラさせて：

捕まつて説教をされたら普通、目がキラキラするはずがない。相変わらず謎すぎる思考回路だ。

だが幸いなことに俺は、この学校のやつは、みんなこいつの考えが手にとるようになる。

「なあ鷹木!!放課後バレーしに行こうぜ!!体育館今日空いてるつてよ!!」

もう何度聞いたか分からないこの言葉。

こう聞くと俺は毎度こう返す。

「俺はのんびりしたいんじゃない!!」

そして今日も後で拉致られるんだろう。

いつまで続くのやら…。

そんな事を考えていると本日5回目の先生と木鬼のやり取りが目の前で始まる。

「木鬼!お前今日が何の日か理解しとるのか!」

「もちろん!昼から遊べる日だろ?」

「違うわ!! お前らは今日! テストじゃろうがい!!」

「もう受けたから良いじゃんかあ〜!」

「まだ2科目しか受けてないじゃろうが!」

「えー! でも校庭で遊んでる人達めっちゃいるぞ!!」

「それは2年生じゃろうがあ! 今日球技大会なんだって昨日言ったじゃろうがい!! お前らも去年の今頃やったじゃろうが!!……ゼエゼエ……」

『ブーブー!』

「ちよつとぐらい良いじゃんかよお! 先生!」

『そーだそーだ!!』

「叫びすぎると声枯れますよー!」

「じゃかわしい!!……つたく! ほら! お前らも席につかんか! 3時間目のテストを始め
るぞー!」

『えー!?!』

男子は俺以外全員が揃って不満だと口に出し始める。

そしてこれを取めるのは大抵、

「はーい、みんな〜席について〜」

間延びした可愛らしい声だ。

この声を聞いた時に男子がする事、それは一つ。

『はい!』

『木兔!!着席しろ!』

「な!?!うっ裏切ったな!?!お前ら!」

「お前も座らんかい!!」

「グエ!?!」

ここまでがテストがある日のルーティンみたいなもんだ。

流石に飽きるし、疲れるんだが…。

いつそのこと別の高校に進学するか?

森然とか生川に行っても原作を生で見れるわけだし…

なんなら音駒にするのもいいな。

音駒なら俺もかなり埋もれるはず…。

その上より原作を体験できるだろうし。

そんな事を考えながらも問題を片っ端から片付けていく。

気付けば残り時間は10分ほど。

意外にも時間がかかってしまったようだ。

まあ、ながらでこんだけ早く終わったらいい方か。

因みに木兎は……？

案の定モノつすごく悩んでいた。

そんなに難しいのあるか？

興味が出てしまった俺は、思わず目を凝らして何処を解いているのかを見てしまった。

カンニングになるが、答えを見るわけじゃないからセーフだろう。

そおーっと答案を見てみると、全ての欄が空欄になっていた。

………うそやろ？

自慢じゃないが俺は木兎は勉強をよく教えている。

時には同じクラスの白福と一緒にあって、部員全員に教えることが多々あった。

特に白福が教えるとなると男子が真面目に受けるし、俺も楽になるから大歓迎。

ただ依頼料なのかなんなのか、めっちゃ俺ん家で食べて帰るんだよね。

木兔達にも見せたいくらいに。

多分軽く引くだろうし、そうなる俺の負担がデカくなるから教えないけど。

とはいえ、流石に昨日今日と木兔にしては真面目に勉強した（させた）のに、0点は
いただけない。

もしこれが普通のテストとかなら問題ない。

だが今回のは期末テストだ。ここで赤点だと補修を最低でも1週間は受けなくては
ならない。

その後テストを受けて80点を取って、1発クリア出来ればまだいい。

しかし、もし出来なければさらに2週間補修を受けて最低でも90点は取らなければ
ならない。

木兔がそんな高得点を取れるはずがない。

今までの最高得点が40点のアイツが。

アイツはうちのエースだ。俺とは違い、チームの主力も主力。これから大会が始まる以上、ストーリーの為にも、木兔には活躍して推薦をとって貰う必要がある。

ちなみに今の俺の部活での立ち位置は木兔の騎手係兼チームの冷却係兼アンダー得意なリベロ君だ。

前の2つは仕方ないとしても、最後のやつは不本意だ。

木兔の騎手は赤葦にいずれ任せられるから良い。

冷却係も木兔効果で全員が熱血漢になってしまったから仕方がない。

結果的にチームが強くなったからなんも言えんし。

赤葦が来たらそこもやってもらおう。

丸投げとでもなんとも言え、俺はスローライフを望む。

ただ、最後のやつは不本意にも程がある。

だって誰もアンダーやらねーんだもん。

オーバーは痛くないし、攻撃にすぐ参加できるらしいからみんなやるけど。

ていうか、アンダーもオーバーも攻撃にすぐ参加出来ると思うんだが……

それでもって俺はジャンプは疲れるからあまりしない。ブロックもスパイクもしない。そのかわりアンダーはする。

だつてアンダーなら痛いだけで誰でも基本はできる、多分。

あとなんかバレーやってそうって思われそうだから、手を抜いてもバレーなさそうだし。

だから目立たずに行けると思った。

その結果がチーム唯一のリベロという重要ポジションをよこしたのだ。

とりあえず過去の自分を殴りたいと思うね、うん。

そう言うわけで俺は音駒に行けばいいのでは？と思ったんだ。

あそこには俺なんかより何倍も上手いアンダーがわんさかいるし。

それは置いといてアイツはさっき言った通りエースだ。

だから何がなんでもあいつにはこの壁を越えて貰う必要がある。

といつても、今何かできるわけではない。

もうすでに賽は投げられた。

あとはもう神に祈る以外ない。

唯一の可能性があるとすれば、うちのテストは特殊だと言うこと。

なんと一問で30点、つまり赤点回避をさせるための問題が存在するのだ。

そして五科目のうち一つでも正解できれば全教科赤点回避となる。

流石は漫画の世界であり、スポーツが強い学校って所だろうか。

これは知識や教養を養うモノだったり、閃きを必要とするものだったりする。

これに関しては対策のしようがないのだが、日頃から注意して先生の授業を聞いてい
ればわかる。

どの先生も必ずテスト前のどこかでさり気なく言うのだ。

もともとそれに気付いているのはクラスで俺だけのようだが。

だってうちのクラス白福とか女子除くとみんな脳筋だもん。

気づけるわけがない。

なら伝えてやれば良いって？

そこは暗黙の了解ってやつだよ。

現に仕組みがわかった他クラスの奴らも誰にも言っていない。

分からない奴らもそれは聞かない。

なんでそうなったのかは分からないが、清水潔子（サンクチュアリ）みたいなもんだ。それになんかしら書けば15点は貰えるし。

そこだけでも解けてる事を祈って、俺は再びどこの高校に行くかを考え出した。

あれからテストが終わって家に帰ろうとしたら案の定、木兔や他の部員達に捕まってバレーをしたり、復習をしたり、色んな高校の練習を見に行ったり、生活必需品とかを買いに行ったり、部活をこなしたり、YouTuberとして活動したりしていると、あつという間にテストの返却期間がやってきた。

驚いたことに木兔のやつはクリアしていた。

「うそやろ?」

祈つといてアレだが、なんでだ?

答案を見ながら男子を見る。

めっちゃ喜んでるが、なんで正解できたんだ?

今回の引っ掛け問題。

正解は「　　」つまり空欄だ。

これは主に社会の時間に先生が言っていた奴で、かつて偉人が出した問題だ。なんならテレビでも取り上げられたりする良問だ。

問題文はこれ

「もし書くものが無くなったら、どうなる?」

と言うものだ。

答えは空欄。

理由は「書くものが無くなったら何も書けない」からだ。

……さてよ、だから木兎がクリア出来たのか。

運良すぎるだろ…

俺が主要キャラの凄さを痛感していると白福が話しかけてきた。

「どしたの〜鷹木?なんか疲れてる〜?」

「白福…いや、運も実力のうちってやつを実感してるんだよ」

「んんん…それは違うと思うよ？ほら、あれ」

「ん？」

白福が指さした方には何やらニコニコした教師達が、こちらに手を振っていた。

「…なるほど、先生の掌の上だったのか」

「みたいだね。でもお陰で助かったし、良かったよ」

「そーいや白福はどうだったんだ？」

「んん？悪くはなかったよ。全部80ぐらいは取れたし」

「そいつは何より…んじゃあ部活行くか。木兔達は俺が連れてくから、鍵頼むよ」

相変わらず白福は声が間延びしてるなあと思いつつ、俺はいまだにお祭り騒ぎをしてる奴らに声をかける。

「部活しねーの？」

俺の声はまさしく鶴の声。

ではないが、こいつらにはこれで十分だ。

だつて脳筋なんだから。

俺がそういうや否や10秒後には1人目が走り出して行き、1分後には全員が体育館に向かつて走つて行つた。

こう言うことができるから、チームの冷却係とか言われんだろうなあと思いつつ、俺も体育館へと向かう。

そしてこうすると毎度あるイベントが発生する。

「あと5秒くらいか？」

のんびりと俺は歩きながら数える。

すると予想通りに怒声が校舎に響いた。

「廊下を走るなあああ!!!またお前らかああ!バレー部!!!!!!」

ところがこの声は俺の予想した声ではなかった。

普段ならここで怒鳴るのはうちの担任だ。

ちなみに彼はうちの担任になつたお陰で声がよく通るようになったそうさ。

まあ毎日のように喉を枯らしたらさうなるよな。さつきも枯れてたし。

彼は大体次のように怒鳴る。

「踊れらアアア!!廊下は歩かんかい!!!」

しかし今回は違うようだ。

そしてこの声は恐らく…

「まったく、なんでバレー部は毎回こうなんだ？」

裏で正岡子規またはズラペリー（カツラがペリー似）って言われている教頭先生だ。「テストが終わったから嬉しいと言うのはわかる。だが君達はいつでも元気だよな。なぜかな？元気なのは良いことだよ？間違いなくな？だがな、君達は最上級生なのだよ。そして我が校の中でも特に強い部活なんだよ。だからといって、好き放題していいわけではないことくらい理解できるよな？そもそも部活とは（クドクド）」

一方で校長先生よりも長く話す人としても有名な人だ。

具体的な時間で言うとも最低30分ほどだ。

対して校長先生は10分ほど。

うちの校長先生が短いのかは分からないが、明らかに教頭先生のは長い。

これは部活の時間が半減するなと思いつつ、俺は別の道から体育館へと向かった。

第2話

あの後練習が始まった時間は結局普段とあまり変わらなかつた。

実際教頭先生はありがたいことに長々と話してくれているようだ。

その証拠に俺以外誰も3年の男子がきてないし。

俺はそいつらが来るまで何もしないつもりだったが、それでは普段通り来た後輩達や顧問の先生に顔を向けられない。

だからとりあえず白福ら3年マネチャンズとのんびりしながら準備して、来た後輩達とパス練してました。

個人的にはずーつとこれでも良かったんだけどもそうはいかない。

だってそれは顧問の先生に悪いし、何より後輩達に申し訳ない。(2度目)
夏の大会がすぐにまで迫ってるし仕方がない。

そんなわけである程度やったら普段の練習メニューをこなすことにした。

しかし1人しか3年がいらないから、めっちゃ声出すことになってかなり疲れしました。

おかげさまで声が鍛えられました。ありがとうございます。

これで俺も担任のように声を通る事を祈るよ（現実逃避）

他のクラスに3年は居ないのかって？

確かにいる。

だけどそいつらも木兔効果を3年間たつぷりくらったから、あとは…まあご想像に任せるよ。

俺がそんな事を考えながら練習の指示や声出しをしていると顧問の先生が話しかけてきた。

「能本、ちよつといいか？」

「え、あ、はい。どうしました？木兔とか他の3年の件ですか？」

「ああ、それは想像つくから大丈夫だ。そうじゃなくてな、お前今高校迷ってるって聞いたから、それに関しての話だ」

「ああ…まあ音駒にしようかなと思ってます」

「お！決めたのか！…って、音駒？なんでまたそこに？あそこのバレエ部は強くないぞ

「？」

「知ってるんだな……てかこの人生徒一人一人に優しいし良い人だよなあ。サボっても許してくれるし）ええ、でもそれがいいんです。正直言うとバレーを本気で続けるつもりではないので」

「なるほどなあ……ま、お前が決めたことに俺はなんも言わないよ。楽しければそれで良いしな。で、その事はもう担任に言ったのか？」

「いえ、明日にでも言おうかなと。明日は祝日で叫び疲れたりしてなさそうですし」

「アツハツハツハ、あの人は毎日怒鳴ってるからな。分かった、俺は応援してるぞ！」

「どもつす」

本心で言ったただけあったのか、顧問の先生は納得したようだ。

うちのバレー部は全国常連校で、去年は4位入賞すらしている。

そのチームのレギュラーである以上、俺も色々声をかけられたが、そこに行く気はない。

行くなら原作の舞台だけだ。

それに部活に入る気はあっても、ガチるつもりはない。

顧問の先生はそんな俺の本心を元々知ってたんだろうな。

多分今聞きに来てくれたのも、木兔がいると面倒な事になるって分かってたからだろ

うし。

ほんとにいい人だよこの人。

この人じゃなかったら、俺マネージャーやってたし。

意地でも。

それからしばらくして最後の練習メニューである練習試合が始まろうとした時。

体育館の扉が大きな音を立てて開けられた。

時間は5時を過ぎた所、とうとうやってきた。

「へいへいへいへーい！バレーーやるぞー!!!」

『おおー!!』

木兔達俺以外の3年生だ。

「お！練習試合か!?!よっしゃー!やるぞー!!」

開口一番バレーをしようとした木兔達だが、それを止めるのが彼女。

「はいはい。ストップ。まずはストレッツチしてきてね」

『はい!』

「えー!いいじゃんかよー白福!!」

「ダメです。1週間後は大会なんだよ。バレーでスパイク決めたかったら従って

ね〜」

「グウ!!」

これもまた遅れてきた時のいつもの流れだ。

試合の中では俺が騎手だが、外だと白福がそれを自然と担っている。

正直言つてめっちゃ助かるし、なんなら全部やつてもらおうと思つて頼んだりもした。

もちろん、笑顔で断られたけど。

ちなみにうちの練習開始時間は16:00で終わりは18:00だ。

本来は上の通り2時間で終了となっている。

そう、「本来」は

俺らバレー部は他とは異なり、18:30まで特別に使わせてもらってる。

俺らの代が入学する前は18:00だったんだ。

なのに変えたやつがいる。

言うまでもないだろうが木兔だ。

アイツは「練習もつとやりたーい!!」って言つて人の話を聞いてくれない。

8時までやるって言つてその一点張りだったんだよ。

アイツ1人なら聴き流せるが、その1人が木兔だ。そう、木兔光太郎その人だ。気づいた時には俺とマネチャンズを除いた全員が8時までやるって言ひ始めた。そんなでもつて終いには体育館を占拠しやがった。

おのれ木兔シリーズめ（作品違い）

だから俺は先生と交渉してある事を取り決めて、木兔を抑える事にした。

一つ目が部活の終了時間を18:30にする事

二つ目が俺の家で19:30まで練習する事

三つ目が二つ目をする上で必要な設備費の用意

以上この三つを取り決めて、木兔と楽しいお話をして認めさせました。

単細胞つていいよね。

簡単にしよぼくとなるし。

思わず写真に収めてしまった。

んでもつて、一つ目はそのまんまだ。特に苦勞はしなかつた。

言った瞬間「すくねー!!」とか「断固拒否だー!!」だとかギャーギャー言ってきたけど。

二つ目と三つ目はかなり大変だった。

まず俺の家は神様のお陰で結構広い。

50mプール1つとテニスコート2面あるし。

ただ部員全員で練習するだけの道具はなかった。

それらを揃える為に必要になるのが資金集め。

それがこの前言ったYouTubeとしての活動というわけだ。

投稿内容は主にゲーム実況と日常風景と歌ってみたってやつ。

この世界は不思議なことに前世と同じようにゲームやアニメ等はめっちゃある。

そのことに関しては神様にめっちゃ感謝したい。

だからゲーム実況に困る事はない。

そして日常風景ってのは学校での撮影が主だ。

先生が主体となってカメラを回し、定期的に面白い動画を投稿する。

要するに学校の宣伝だ。

因みに最も人気があったのは何故か卒業式だ。不思議なものである。

歌ってみたの方も音楽の先生や歌が得意な先生に色々教えてもらった。

お陰でカラオケで満点取れる曲が複数出来ました。やったね。

当初はうまく行かないと思っていたが、いい意味で裏切られたよ。

半年でチャンネル登録者が100万越えして、どの動画も120万回再生されてるし。

世の中甘すぎないか？

編集はかなり頑張ったとはいえ、ありふれた内容だと思う。

楽できていいけど。

一応言っとくと俺の生活費は神様が出してくれています。

なんと毎年1億円くれます。(拍手)

理由は日本人が億に弱いと思ってるからだそうです。

なんでや？

ありがたいけどね。

長くなったけど、とりあえず木兔のことは白福に任せて目の前のチームを倒すことに集中する。

俺のモットーは手を抜きながら戦い、相手の体力が切れたところで一気に攻めるヤツ。

要するに青城の手を抜く子と同じような感じ。

俺は攻撃しないリベロだけだ。

役割分担つてヤツだよな。相手に返すのは攻撃でもなんでも仲間に任せて、拾うのは俺がやる。

これが大事なんだよな。攻撃つてのは試合のいわば花形だ。

どのスポーツでもそうだろう。

もちろん試合でスパーレシーブをすれば大きく盛り上がることは間違いない。

だけど俺はそれをしない。

そんな事をしたら攻撃をしない意味がない。

俺の目的はあくまでチームの中堅としてモブのように存在する事。

夢はハイキューを読者として見ることだ。

ずっとそれを目的に活動してきたし。

記憶が戻つてすぐに「木兔」を見ても俺は諦めなかった。

頑張つてバレーをやめて傍観者になろうともした。

まあできなかつたけどな。

そんなわけでおれは頑張れば取れるってヤツは取らない。

拾う為に飛び込むが、間に合わないようにしてる。

慣れるまでは大変だった。

狙っていけばスパーレーシーブしちまう時があるし、手を抜いてやると自分の体を痛めたり、あらぬ方向に飛んで観客に迷惑をかけてしまう。

だから必死になって練習した。

そしてなんとか2年の歳月をかけてある程度習得できた気がする。

コツを掴んだ瞬間になんか、こう、感覚があるんよね。

習得した今となつては立派にモブリペロとして存在出来ていると思ってる。

まあリペロは俺だけだから目立つけど。

実力は高校生レベルから見れば大した事ないはずだ。

だからこのまま音駒に行けば上手い具合に埋もれることができるはずだ。

あそこの監督は猫っぽくて優しそうな顔してたはずだし。

俺はそんな事を考えながら相手のスパイクの威力を吸収して丁寧に戻す。

試合は15対17で俺らが2点リードされてるところ。

だが俺以外の奴らは大抵体力を気にする事なく、飛んで飛んで飛びまくってスパイクばかり打ってくる。

ツアアタツクとかも一切してこない。

サーブとかでも思いつきり打ってくるし、良くも悪くも全力で全部吹っ飛ばす。

だから試合の中盤まで来て仕舞えば、あとはこっちの道断場だ。

俺がアンダーで返したボールをうちのミドルブロッカーのレギュラー君がしっかりと決めてくれた。

ちなみに俺は彼の事をどっかで見た事がある気がする。

どこか木兎と似てるんだよね。主に髪型とか。なんか逆立つてるし。

ただし性格は真逆も真逆で大人しく口数が少ない。

なんか君梟谷にいなかった？

気のせいって事にしておこう。

相手チームはブロックを3枚出せたはずだが、体力が無くなってきたのかどれも低くなってきた。

うちのメンバーも体力が切れてきているがスパイクが打てそうとなると話は別だ。

スパイクさえ打てそうならうちの中学は体力の概念がなくなる。

汗で転びやすくなっている、ブーイングが飛んできていても、点数が絶望的でも、いくらでも飛ぶ。

しかし、レシーブとなるとそうではない。

だからここそこからはいつも俺がいるチームの独壇場になる。

そして顧問の声もいつも通りに相手チームに向けられる。

「お前ら足とめるなよー！止まったら負けるからなー！食らいついていけー！！」

『ウスー！』

しかし声ではそう反応していても、レシーブとなるとどうしても動きが止まる。

結果、俺のチームが25対17で快勝した。

「へいへいへいへーい！！鷹あ木！次は俺らと勝負だ！！」

「いや無理だから、体力的にもルールのにも」

「いーじゃねえかよー！まだまだ動けるだろお！！」

「んなわけあるかい、もう限界も限界」

そう言つて俺はいかにも疲れましたとジエスチャーしながらマネージャー達に記録とドリンクをもらいに行こうとした。

「いやーでも、木兔先輩と能本先輩はどっちも体力が桁違いだよな」
すぐに戻ってきたけど。

できる限り目立つ事をしたくない俺はこう言つた発言を訂正する必要がある。

こういう所で手を抜くかどうかで大きく変わるんだよ。

少しでも後々に楽できるように、ここは骨を折るとしようじゃないか。

「ちよい待て、木兔はそうだけど、なんで俺まで？俺はもうヘトヘトなんだぞ？立つてるのもやっただし」

「いやいや、今もの凄い速度でここまできたじゃないすか。ヘトヘトなら出来ないっすよ」

「だよなあ、休みは遠出して、登下校でも遠くからずっと歩きなのも体力を増やす為って知ってますし」

んんん？何を言つとるんだこいつは？

確かに遠くから通ってるけど、休みに出かけるのはこの世界について色々知る為だし。

登下校で30分以上かけて歩くのも原作キャラと遭遇する為だし。

だって原作キャラ達は皆んな部活をガチでやってるはずだから、朝早くとか夜遅い時間に会えると思ってるんですけど。

「流石は能本先輩だって皆んな言ってますよ」

まずい、こんな風に言われてしまうと正直嬉しいがこれは本当に不味い。

目立たない為にもここで修正しなくては！

「そもそも俺は大事なんだ・い・じ・な試合中に手を抜いてるんだぞ？こんな俺を尊敬なんかしちやダメだって」

「でも、能本先輩のそれは怪我とかしないためですよ？それにそれのおかげで後半になってもチームの守備力が落ちることもないですし」

「だろお！鷹木はすげーんだぞ!!」

「改めて聴くと凄いよな」

「お！辰生（たつき）もそう思うか!!」

不味い！なんか知らんところでめっちゃ評価上がってる！

なんでだ!?

このままでは俺のスローライフが崩れてしまう!

俺はストーリーを間近で眺めてただけなのに!

俺が入ったらストーリーを壊しちまう可能性がぎょうさんあるんやぞ!?

しつかりしろ能本鷹木!

何のための特典だ!

この時俺は否定することに必死である事に気づけなかった。

木兔が元気なのではなく、喜んでいた事に。

そしてここに梶谷のレギュラーがもう1人いた事に。

後になって白福に聞いて分かったが、木兔は俺の事を色々自慢していたらしい。

いやなんでやん。

確かに小学生の頃からの知り合いだけでも、同じ学校じゃなかったし、週3であったバレー教室であってただけだぞ？

ちなみに記憶を取り戻した時はなんか目の前で動き回ってるやつがいきました。

その子を最初は日向か影山かなって思ってたのに。

するとそれ見た瞬間に頭に電流が流れたような感じがしました。

そしてくらくらときたので頭を体育館の壁に打ち付けました。

動き回ってたその子は良いやつで心配して見に来てくれました。

ただよく見ると頭がとんがってました。

いやほんとなんで？って思ったよ。

それからの腐れ縁です。

もちろん別の中学に行こうと思いました。

ただバレーはしたかったのでバレーがある所にしました。

するとそこは強豪校でした。

他に通えるところはありませんでした。

結果ゲームオーバーってわけです、はい。

そんな事を考えていると部活の時間が終わり、各々が俺の家に向かっていった。俺やマネチャンズもそれに続く。

近所迷惑とか門限とかで怒られない事を祈りつつ、大会に向けて練習をした。そしてついに中学最後の夏が始まる。

が、大会会場に行く前に俺は大声で木兔に文句を言った。

結果その日の最後の試合まで木兔がずーっとしよぼくとだったが問題はない。

うちのチームは木兔シリーズがわんさかいるしね。

市・都大会で問題なく優勝できたので2週間後には関東大会、そして全国大会が始まる。

今年こそは原作キャラを見つけるべく、俺は普段以上に視線を動かすのだった。

第3話

今日は関東大会の当日。

俺らはシード権を与えられているので、相手の調子を見極めていた。

「おーい！鷹木い！こんなの見つけたぞー！」

「俺はこれを買ってみた！」

「俺はトイレに行ってきた！」

「俺は先輩と会ってきた！」

もつとも見極めていたのは俺とマネチャンスだけだが。

ちなみに顧問の先生は今役員としてお仕事をしている。

が、こいつらはいつもこんな感じで大声を出しているからどうしても目立つ。

俺としては一緒にいると俺が目立たなくなるから大歓迎だが、同じジャージを着ている以上1人だとしても俺にも視線が集まる。

別にその事に関しては問題ない。

騒ぐお陰で冷たいと言うか、そんな感じの視線を良く頂戴するがそこまでのものではないし。

厄介なのはこいつらが大会開場で毎対戦相手等の試合を見ようとしないう事だ。

木兎は春高とかで赤葦と日向達を見てたのを覚えているが、どうやら中学時代は見なかったんだろうな。

流石は日向・主人公つてところか。

高校に行つてから見るようになるという事だとしたら、見させるようにした奴を褒め称えたい。

そして早く役目を擦りつけたい。主に騎手の方を。

てか、最後のやつなんて言つた？

「先輩」つて言つたよな？

普通先輩とか目上の方に会うときは全員で挨拶に行くべきじゃねえのか？

いやまあ先輩方も木兎効果で熱血系だから気にしないとは思うが。

こういうのは一応した方がいいだろう。

幸いにもこいつが会ってきたのなら、場所探して時間もかからないだろう。

仕方ないとりあえずそつちが最優先だ。

初戦は上石高校附属中学か南泉中学校。

全ての選手がオールラウンダーで特筆した選手はいない上石が勝つか、明るさが取り柄の南泉が勝つか。

今のところ1セット目の10対11で拮抗しているし、長引くだろうから全員で挨拶に行くか。

荷物の見張りをマネチャンズに頼んで、俺は全員を連れて先輩に挨拶をしに行った。

それで挨拶後、俺は部員全員をマネチャンズの元に行かせて、試合を見るように促した。

俺はと言うと今のうちにトイレに行こうと思い、トイレに向かった。

原作キャラと会うまでは。

「なんで(汗)に……」

俺が会ったのは原作の春高の準々決勝で木兔と赤葦ら梟谷の前に立ちはだかる全国三大エースの1人・「悪球打ちの桐生」だ。

桐生は中学時代の何処かで牛若に負けた事以外知らないが高校は猪坂のはず。猪坂

は大分県の高校だからここに在るわけがない。

どうなつてゐるんだ？

もしかして中学時代は東京で、牛若に負けて逃げて大分にまで行つたのか？

なわけないよな。

あつても観光とか偵察の可能性は十分にあるよな。

俺らと同年代のはずだから進路を決める為に見聞を広めにきたのかもしれん。

いやでもなんでここにいんのか、めつちや謎だな。

まあいつか。

俺がそんな風に唸つてゐると不審に思つたのか話しかけてきた。

「なんや？お前？会つたことあつたか？」

「いや、そうじゃねえけど」

「ほならなんでや？」

うん、なんか怖いなこの顔。

そんなでもつて俺が返答に困つてると桐生の隣に在る奴が助け舟を出してくれた。

「あ！もしかしてこの前の試合見とつたんやないか？ほら、うちが牛島のチームにボツ
コボコにされたやつ！」

聞いたらわかる、ええやつやん。

お名前前知らんけどええやつやんか。

原作キャラかは知らないけどええやつやな。

てかポッコポコにされた事をなんでそんなに元気よく言えるんだ？
言っちゃアレだけどボロ負けした事を明るく言えんのかって凄いな。

そんなこともあったがとりあえずトイレに行つてきました。

話してて忘れたせいでギリギリだったよ。

あと少いで試合に間に合わないところだった。フウ……

で、最初の相手は上石の方だった。

ここは特段何もなく乗り越えていきました。

スコアは1セット目 25対15

2セット目 25対11

最初いきなりしよぼくとなったのは驚いたけど、概ね問題なく勝てた。なんでしよぼくになってたのかは分かんないけど、だからって負けるわけじゃないし。

その後も順調に勝っていよいよ次は決勝戦。
相手はサーブが怠い駒勿（こまな）中学校。

特徴はスパイクサーブとかアンダーとか変なのばつか打つてくるところ。
それぐらいかな。

策士がいるわけでもなければ、怪物がいるわけでもない。
いるのは変人サーバー達。

「しゃあああー！攻め勝ー！ー！ー！つ！！」

「はいはい、勝とうな〜」

「鷹木い!?!のってきて!?!?!」

大した事なくこれもまた撃破できると思っていた。

俺はこの時完全に油断していた。

前世で何不自由なく暮らし、何かで苦戦する事もそうそうなかった。

そして神様に特典をもらい、まるで主人公のようだとどこか無意識に勝手に思っていた。

今世でも練習とかは大変ではあったが無意識のうちに「皆んなで頑張る」事を楽しく感じていた。

馬鹿だよな。

本当に。

馬鹿で阿呆で頓珍漢でどうしようもないやつなんだな。

俺は。

赤点回避の問題を周りに教えないのも、愉悦に浸りたかったただけだ。

何が鶴の一声だ。何がだらだらするだ。

アンダーをやるようになったのも、目立てるからだだろうが。

骨折って訂正しようとしたのも謙虚な俺かつこよ！とか褒められたかったただけだろ。

笑っちゃまうよ。

もうわけがわからない。

駒勿side

「…上手く混乱させられたようだな」

「ええ、正直こんなんでも上手いくとは…」

「彼のプレーは基本的に思考してから始まる。何の意味もない数字の羅列や数式で勝手に沼にはまっていく。これで厄介なりペロがいなくなった。後は…」

「はい、ブロックを木兔に集中してそつちも押さえ込みます」

1 セット目 19 対 25

セットポイント 駒勿

「ダイジョーブか？ 鷹木？」

木兔が副主将が白福が不思議そうに覗き込んでくる。

チームメイトもマネチャンズも応援団も俺に注目している。

普段なら黄色い視線かと喜んだかもしれない。

だけど違う。

これはそんなのではない。

理由は簡単。

俺はさっきのセットで何も出来なかつたんだから。

相手を変なサーブを打ったからじゃない。

俺は相手の変な数字の掛け合いに混乱させられていたんだ。

相手のサーブの時に向こうのセッターが突然数式を口に出した。

当然こちらはそれの意味を考える。

正確には俺が。

俺だけがその意味を考えた。

木兎達にはわからないだろうと、勝手に思い込んで。

だけど何の意味か全くわからなかった。

最初は数式の答えが選手を表していると思った。

けど違った。

言葉遊びとか謎々かとも思った。

それなら普段からテストで解いてる。

でもわからなかった。

相手がサーブの時に毎度数式を言う。

それがヒントになると思って必死に相手の言葉を聞く。

けどわからない。

その繰り返しだ。

気付いた時にはもう俺は、俺だけが思考の渦に飲み込まれていた。

俺は試合中に試合の事を一切考えられなくなつて動けなくなつたんだ。

結局チームは勝つた。

木兔がエースとしての自覚を持つて背中で皆んなを鼓舞したんだ。

「へいへいへいへーい！俺！サアアイキョオオオー！！」

『へいへいへいへーい！』

「いよー！エース！」

「もういっぼーん！！」

この時は気づけなかつたし、知らなかつたけど赤葦がこの木兔に憧れたらしい。

鷺尾がジャンサーで無双して俺の代わりにアンダーもしつかりやった。

相変わらず無口ではあつたが。

連携も完璧だった。

数式の意味なんか考える事なく、来たボールを上げて相手に叩き返す。

俺がいなくても問題なかった。

俺はこの時初めて気づいた。

木兔は馬鹿で単細胞だ。

暗号なんて解けるやつじゃない。

だけど主将のなんたるかを肌で感性で本能で理解していると言う事を。

実力で地力で相手の作戦を打ち砕く。

まさしくエースだ。

そして鷲尾が原作キャラだと言うことに。

アイツはあんなにオールマイティに強かったか？

いや、俺が目を背けてただけだ。

自分よりも上手いかもしれないって言うのを知りたくなかったから。認めたくな
かったから。

俺って何なんだろうな。

結局俺は何をすることもなく全国大会も終わった。

結果は4位入賞。

俺がいなくてもアイツらは問題なく同じだけの結果を出して見せた。

よくわかった。

俺の力は何の役にも立たない。バレーが好きだからって意味がない。

「……………本当にいいのか？音駒で」

「ええ、この前の大会でよく分かりました」

俺は今担任の先生と進路相談をしている。

今日は豪雨。

朝の予報が見事に的中したようだ。

ちなみに進路相談は6回目だ。

心配してくれてるんだろう。何せ俺の顔は酷いことになってるし。

学校に向かう途中のでっかい水溜りで確認したから間違いない。

それに今の俺の至る所から生気を感じられないだろう。

俺は絞り出すように声を出した。

「俺は……アイツらみたいに輝けません」

「……………そうか。まあお前の学力なら問題ないだろう。どこにでも挑戦できるだろうしな。だが、どうせなら進学校に行ってみることも視野に入れておいて欲しい。」

「進学校……………ですか？」

「そうだ。学者としての道もお前なら切り拓ける。明後日になったらまた聞くから、考えておいてくれ」

「……………わかりました」

力なくそう答えて俺は静かに教室を後にした。

帰り道の途中で雨がさらに強くなった気がした。

そのまま何も考えることなく家に帰ると傘を持ったある人物がいた。

「……………なんでここにいるんだ？白福」

「ん？言わなくても、わかるんじゃない？」

我が校トップクラスの美少女でバレー部のマドンナの存在の白福だ。

青の傘を持って可愛らしくターンをしてこちらを見る。

フワツとスカートが浮いたが、中は見えませんでした。

白福と2人つきりで外で話す。

別段なんだかんだで珍しい事ではない。

なんなら一緒に俺の家でご飯を食べる事も多々あった。

しかしその仕草を見て思った。

何だかドキドキしてしまうではないか。

って、何考えてんだ？俺は

「……学校に行つてないことだろ？別に行かなくても受験期間だから問題ない」

「それ本気で言ってる？」

「……何怒ってるんだ？」

「べつにつく……ただ、出来れば鷹木の真剣な顔……もう少し見たかったなあって思ってるだけだよ」

その瞬間、俺達を強風が襲う。

俺は思わず片目を瞑り傘を落としてしまった。

だが白福はその風を一切気にせずこちらを両目でしっかりと見てくる。

傘を片手で持ちながら。あら、お強い。

スカートを履いてるからかもしれないが…

「……………関係ないだろ」

「……………今はそれでいいよ。けどミミズクヘッドがそろそろ暴発するよ？ 能本がないとアイツずーつとしよぼくことになるって、気づいてないの？」

は？

そんなの知るわけないだろ。

俺がいない時に落ち込まれても分かるわけない。

「それに能本が木兎と違う学校に行こうとしてる事、アイツ気づいてるよ？」
は？

なんでだよ…

木兎がどうやってその事を…？

「木兎の野生の本能って馬鹿に出来ないよ？ とにかく、ちやくんと話、してきなよ？」
普段と異なる白福の語尾。

白福が本気で話してること、が抑揚で口調で声色で分かる。てかなんか圧凄いですけど。

おつとりはどこに…

俺は気圧されながらも必死に言葉を言った。

「けど俺は、俺の実力じゃ、アイツを、皆んなを助ける事は出来ない。皆んなすげえ強くなったからな。だから俺がアイツと話しても俺がバレー部に一緒に入ることはないよ」

俺がそんな事を言うと、白福のやつは急に機嫌が悪くなったのか俺に近づいてきた。「あ・の・さ・く？能本はバレーしたくないの？したいの？どつちなの？」

至近距離で話すのは初めてだなとか、場違いな事を思いつつ俺は本心を口にした。

「…わからないんだよ。この前の関東大会の決勝の時、相手チームの作戦に見事にハマって俺は何も出来なかった。悔しかったし、辛かったよ。……けど木兎達は俺がいなくても問題なく勝った。それどころか俺がいた時よりもあつさりベスト4入りした。その時に見えたんだよ未来が。そこに俺はいなかった。……あそこに俺の居場所は無いってわかった。だから」

バシんツ!!

何か強力な痛みを感じた。

重い重いその一撃で俺はバランスを崩して水溜りに尻餅をついた。

「助けたいって何様？皆んな鷹木におんぶに抱っこだって思ってたの？それで皆んなが、木兔が、鷹木よりも強くなったから後は知らないって？私が聞いているのはバレーをしたいか、したくないか！上手い下手じやなくてバレーを続けたいかを聞いているの！居場所なんか立場なんか関係ないでしょ！」

「白福……………」

白福が泣いている。泣きながら叫んでいる。

ああ、俺は馬鹿だ阿呆だ頓珍漢だ。

笑えてくるよ。

女子にここまでさせといて、男子の俺がこんなじやあダメだよな。

女の涙の落ちる音がした。

だから俺は戦う。

なんて言ってられないか。

「…ありがとな白福。俺やつと分かったよ」

「…ハア〜……………まあいいよ。また今度おいしいご飯作ってよね〜？」

俺は笑顔で返事をして走り出した。

荷物を白福に任せて木兎に会いに行く。

幸いにも木兎にはすぐに会えた。

ボールの音がしたら大体そこにいる。

ボールあるところに木兎ありっつか。

そう考えてると木兎と鷺尾が公園でパス練をしていた。

「……………いた……………なあ、ぼく……………」

あれ？俺なんでふざけた考えをして、あろうことかシリアスな時に白福に言ったんだ

?なんで考えてるんだ?

んんん?

ていうか雨も小雨になってる…?

太陽も見えるし…

水溜りの俺は生気があるような気がする。

か。ハハハ…。
おいおい、もし俺の気分で天気が変わったんだとしたらまた勘違いしちゃうじゃねえか。ハハハ…。

それでもいいな……。

「鷹木!今までどこ行ってたんだ!俺は心配したんだぞー!!」

「木兎うるさい。あと俺梟谷行くから、よろしく」

「ファツ……?!?!?」

「んじゃ、また明日な。俺は受験クリアする必要があるから…またな!」

「チヨ、チヨチヨチヨツとまて」をにさん?」違う!!」

なんだ違うのか懐かしいなあって思つてのつたんだけど。

せつかくのつてあげたのになあー!

「一緒に来てくれるのか!」

「結果次第だけど、落ちるつもr「いよっしやー!!!」って、うっせえー!」

木兎はそれからずーっと喜んで飛び跳ねて転んで走つてまた転んで側転して。

「俺とお前と皆んなで全国のトップに立つぞ!」

「はいはい」

めちやくちや騒がしい。

けど、これがいいな。

「待ってるぞ」

「!・おう!待つとけよ辰生!!」

それから俺は顧問や担任の先生に梟谷を受ける事を伝えて勉強をひたすらした。

裏設定なのかなんなのか梶谷の偏差値は68。
私立なだけある。

正直言つてめんどくさいけど、勉強もテストも誰かさんのおかげで嫌いじゃない。

白福も家に来てご飯作ってくれてる。

受験が終わったら半年ぐらいたかられそうだ。

でもそれがいい。

こうして俺は梶谷を受ける事になった。

高校1年生

第4話

今日は入学式。

俺はバレー部のみんなと来ている。

「おおおおおー!!すげえー!!なんだここのー!!!」

「はいはい。落ち着こうね〜木兔。鷹木に怒られるよ?」

「東京でこれだけの敷地とは……」

「流石は私立って感じだな…あと木兔うるさい。推薦組は来たことあるだろうが」

春は桜が咲き、散る季節。

別れと新たな出会いの季節。

真新しい制服に身を包んで俺達は門をくぐる。

梟谷の制服はブレザーで、アニメと同じグレーの上着に黒のパンツ、ネクタイは青色。制服って結構高いんだよね。

間違ってもこれでバレエをしないように見張らなくては。

推薦組は俺以外の3人だ。

木兎と鷺尾は梶谷から直接話しが来てたそうです。

白福は自己推薦って奴だ。

大学受験でしかないと思ってたけど、高校受験でもあるというね。元世にあつたのかはもう覚えてない！

突然だが1週間ほど前にクラスでの送別会を俺の家でやりました。

手料理振る舞いすぎて利き腕の右が腱鞘炎になりました。

おのれバキューム白福！

1クラス分大体40人分作ったのに、気付いたら無くなってたんだよ。

恐怖だよ、ほんとに。

ちなみに昨日は部活の送別会をやりました。

部活のみんなを集めて行ったやつで、またまた俺の家でずーつとどんちゃん騒ぎしてました。

あと木兎にジャンプとかで原作知識披露しました。

そしたらバレーが始まりました。

毎日バレーしててもなんか言われることなかったし、2回騒いでやつても問題無いだろうしな。

ああ、そうそう。

その夜の俺の家での練習とかYouTubeはこれからも続けるそうだ。

ただ、無料で家の施設貸すつもりは無いので、YouTubeでの収益の2割はもらうことにしました。

これくらいはいいでしょ。

そしてこの送別会で左手も腱鞘炎になりました。はっはっは……

許さぬぞブラックホールめ……!

この恨みはいつか必ず……! (涙)

ていうかあのスレンダーな体のどこに消えたんだ?

着痩せするタイプってことは中学のマネチャンネルズから聞いてたけど。

下手したらギャル○根超えてんじゃねえのか?

ついでに言うとう学校全体のはもつと前に体育館でやりました。

あれは本当に最初はさ・い・しよ・は平和だった。

うちは他校というか元世と違い、送別会でボタンを渡すんだとか。

カツコよかろうが、そうでなからうが「バレエ部」だと襲われます。

全国大会出場ってそんだけ凄いのね。

家に着いた頃には上着が消えていたよ……

おかしいなあ……(グスン)

みんなも気をつけてね。

そして本日の予定はこちらです。

1 入学式

2 部活紹介

3 部活体験教室

4 クラス発表

5 校歌斉唱

一つ目入学式

「……………えく…であるからして、この度皆さんが我が校に来てくれた事を大変嬉しく思います。我が校の特色は主に大学にて行われている「アクティブラーニング」を使用し、その教育と成績優秀者並びに部活動等で著しい成果を上げた者に対する学費全額免除制度です。この制度は…」

長つたらしいことこの上ない。

ここまでするのにもう30分は経ってる。この人の話だけで。

予定だともう入学式は終わっているはずなんだがね。

てかこんだけ長いのに寝てるやつが「グオー…:……………」…………木兎以外いないのは流石だな。

普通は寝てたら注意されるだろうが、「私立」しかも義務教育じゃないから良いのだからか？

そんなこんなで入学式はほほほ木兎がいつ怒られるか、とか誰が同じクラスかな、とか腱鞘炎早く治らないかな、とか原作キャラ探してたら終わりました。

二つ目部活紹介

ここはまあバレエ以外に興味はなかったから、バレエ以外は知らん。

あ、でもなんかバク転したのは驚いた。

ブレイクダンス部ってのがあるんだって。

生で見たのは初めてだけど頭が将来寒くなりそうだって事はよく分かった。

てかこのバレエ部、春高4年連続で出場って普通に考えて凄いよな。

初戦敗退とかもあるっぽいけど、安定して全国に出続けているのってなかなかできるところじゃないよなあ。

三つ目部活体験教室

で、その後それぞれ興味がある部活がある人はそこに行つて軽く体験する。

ここでやつと原作キャラ達に会えるのな。

さーてどこだ？

確か残りの3年メンバーは

後輩思いのチャラ男木葉秋紀、常に笑顔・猿顔の猿杓大和、静かな的確突っ込み小見春樹、はつきり発言雀田かおり

だったはず。

今から始まるレシーブ練は一人ずつやるやつだし、その間に見つけられるだろう。

と思つて探しているとどこからか目の前にボールが迫つてきた！

俺は咄嗟にバックステップをしてアンダーであげる。

もちろん手首に当たらないように慎重に腕に当てました。

うまく上がったなと満足していたが、ボールは誰もいないところに。

「あ、やべ」

いつもの癖で意図せずセッターの位置に送つてしまった。

俺が後悔してるとそのボールをトスした人がいた。

さつきなんか紹介の時に話してた先輩だ。

練習変わったのかな？

先輩がトスするつて事はそういうことじゃあ……

「あ、間違えた」

癖というのは怖い物だと理解させられました。

体を張った指導ありがとうございます。

別に恐くはないけど。

俺が習慣の凄さを再認識していると、右側から何か走り出した。

スパイクが打てそうなボールを見ると突っ込むやつは母校にわんさかいた。

だがこの場で走り出すやつは1人しかない。

「ドラアアア!!!」

ドズンツ!!

木兎だ。

めっちゃ目がキラキラしてるなあ……

そんなもって良い音。

叩きつけられたボールは高あく上がって2回の観客席に落ちました。

へえーここって観客席まであるんだ。

凄いなあー。

てか打つなよ。

…まあ無理もないか。

俺みたいにダラダラする奴とは違って、バレーが1分1秒でもやりたいのがアイツだし。

最近できてなかったら我慢しきれなかったんだろう。

「なあなあなあ！鷹木どうだった!?!この前の部活の送別会で鷹木が言ってたやつ初めてだけどなんとなくてやってみたんだ!!今のどう!?!ジャンプの仕方と腕の振り方!!!」

え？

いまそれ？

ちよつとTPOについてお話ししようか。

慈悲？こいつにそんなのいる？

お灸を据える時は出来事が起こった時以外にあるまい。

「木兎ちよつとここに来なさい…」

「おう！なんだなんだ？凄いか!?!グワツてきたか!?!」

「ハウス」

「凄かっただろー？足の親指に体重かけて、体全体を鞭のようにしな「ハウス」…ハウ
スってなんだ？」

「……そこに……」

「どっくに？」

コンニャロ…

本気で不思議がつてるからよりタチが悪い……!!

「…後でお話ししようか」

「あっはい……」

とりあえず肩を掴んで無理やり正座させました。

あー…早く死刑宣告（赤葦）来ないかなあ……（失礼）

四つ目クラス発表

この学校はなんでもクラス替えがないそうで、1年のクラスのまま卒業するんだそ

う。

理由は知らない。

お偉方の考えは分からない事って良くあるよね。

1組 木兎 雀田

2組 猿杓 小見

3組 木葉

4組 能本 白福

5組 鷺尾

で、これが決められたクラスだ。

最初木兎と鷺尾が俺らと違うクラスだと知ってめっちゃテンション下がってたけど。

木兎なんか捨てられた子犬みたいになつたし。

これだから憎めないんだよね……

あ、ちなみに俺としては心配要素がなくてホッとしてる。

だって雀田の姉御がいらっしやるんやぞ？

あのはつきりした発言が有れば木兔の制御もなんとかしてくるはずだ。そう考えていると目の前を雀田が通って行った。

さつき少し話したんだけどいやあゝ…めっちゃかっこ可愛いかったです。

しっかし雀田さんも結構な別嬪さんやなあ…

おっとり系の体現者のような白福もかなりの美少女な事は間違いない。

だが活発系で頼り甲斐のある姉さん女房も良くない？

少なくとも俺はかなり良いと思う。

と俺が邪な考えをしていたら白福に襟を引つ張られました。

結構苦しかったです。

でも見かけによらずなかなかのマシユマロが当たったのでチャラどころかぶつちぎりでプラスです、はい。

あとなんかフローラルな良い匂いもしました（変態）

そんな事を考えているとこの時間も終わっていた。

あれ？早くない？

入学式が長引いたから巻いてるのかな？

まあいつか。

五つ目校歌斉唱

どうでも良いんだけどさ私立学校の校歌って独特な歌詞のイメージない？

俺はある。

案の定梟谷の校歌もなかなかインパクトがあります。

これなら忘れそうにないな。楽させてくれてありがとうございます。

校歌覚えるのに時間をかけさせないためですよね。分かります。

いや良い歌詞だと思いますよ？

ただちよつとだけ、本当にちよつとだけ「負けない」って言うフレーズ多くないですかね？

1番だけで5個あるんですが……

あと梟谷っていう名前なわけだから、なんか梟を連想させる歌詞とかあるのかと思っ
て期待してたのに。

よくこれで採用したと思う。

俺なら何がなんでも採用しない。

もし歌うことになったとしても、出来る限り歌わないようにしよう。

俺はそう心に強く誓った。

が、木兎はめちやくちや気に入っていた。

帰り道でもう覚えたのか俺の隣で口ずさんでいる。

ちなみにこの場に鷺尾もいる。

当然静かだが。

なんなら校歌はなんか気に入らなかつたらしい。

俺がそれを聞いた瞬間抱きついたのは言うまでもない。

白福は雀田と一緒に帰ると言っていた。

1日で仲良くなるって流石だな。

それから1週間後。

俺の腱鞘炎も治ったこの日が一年にとって初めての部活。

木兎と鷲尾、白福は当然、俺も既に紙を出して入部している。

3人は入る前提で入学したが俺はこの前のアンダーの一件で勧誘されたからだ。

そんなわけで今日は練習だ。

ただし午前のみ。

一軍は一日中で2軍は午後。

で俺らは「今は」3軍ってわけだ。

どこの中学バスケット部のやら。

すぐ上がってやるけどな。

ダラダラしたいが置いてかれるわけにはいかん。少しでも原作を体験せねば！

でもメリハリをつけて家で思いつきりダラけるつもりだ。

本気Ⅱ全力じゃないしな。

そう考えながら歩いていると耳に間延びした声と大人しそうな声が届いてきた。

ん？

なんで2人の声が？

アイツらって仲良かったっけ？

まあいいか。

付き合ってたんなら応援するだけ…だしな…

そんなこんなで目の前にはデッカい体育館が。

さあ着いた。

今日から高校スタートだ！

現在ランニング等々も終わってミーティング中。

「よし、じゃあ練習始めよつか。……つて言いたい所なんだけど、先に自己紹介してもらおつか。まずは俺たちからやるからその後一年な。その後すぐ試合やるからそのつもりで。皆んな試合やりたそうだし。」

『うーっす！』

3軍キャプテンの先輩から説明を受けて各々自己紹介を始める。

先輩方の紹介が終わったから次は俺たちの番。
てか原作キャラ達って全員推薦組だったのな。

「俺は木兎光太郎だ！エースやってみました！」

「鷲尾辰生、ミドルブロッカーです」

「俺は能本鷹木、一応リベロでした。よろしくお願いします」

「木葉秋紀、ウイングスパイカーでした。お願いシマス」

「猿杵大和、ウイングスパイカーやりました。今日からお願いします」

「小見春樹、リベロです。お願いしあつす」

「ご苦労さん。んじゃチーム分けだけど……リベロ2人いるし、どうすつか……？交

代で入ってもらってセッターは2年からにするか？」

あ、原作と違って俺がいるからか。

でもまあセッターも出来なくはないはず。

オーバーは別に苦手じゃないし、なんなら木兔のスパイク練とかブロック練でもやった。

あくまで親睦を深めるためのやつだし問題ないだろ。

そこまで考えて俺が答えようとした時に遮る奴がいた。

当然、木兔だ。

「なあなあなあ！鷹木ならセッターもいけるよな!？」

「…いや、まあ出来なくはー」

「先輩！鷹木がリベロからセッターにチェンジします!」

「いや勝手に進めんな」

俺はそう言つて木兎にチョップする。

「木兎はそう言つてるけど、いけるか？」

これでまだ腱鞘炎だったら断つただけだなあ。

いや治つたばかりだから断れなくはないか。

てかすぐ治つたんだよな。特典のお陰か？なんか医者も「興味深い」とか言つてたし。

それは置いとくとして、まあ断らないけど。

「やるだけやってみます」

あの後サインの確認を軽くしたらすぐ始まった。

スターティングオーダー

木兎 W S 能本 S 猿杓 W S

木葉 W S 小見 L I 鷺尾 M B

サブ権は譲つてくれたからジャンサーが出来る鷺尾から。

木兎も出来るけど聞いたらスパイク打ちたいってうるさかった。

ピーツ！

さあてどう戦うか。

「鷲尾ナイツサー！」

「ナイツサー！」

「シツ!!」

鷲尾が打ったサーブがまさかジャンサーだと思ってなかったのかノータッチエースである。

「ナイスキー!!」

「スゲー！」

「かっこいいねー」

「すごい！」

続けて打ったボールはネットインで見事相手を崩しチャンスボールで帰ってきた。

「チャンスボール！」

「俺によこせえー！」

「いや俺だアーー！」

「俺にちよーだい!」

セッターってこんな感じなのな、とか思いつつ俺はとりあえずボールを…

「ツー?!?!」

「よし」

「えー、打ちたかったのにー…」

「クソう…目があったから来ると思ったのに…!」

「ヒュー…めっちゃ強気なのな」

「いやくすまん。ツーってやると気持ちいいって聞いてたから」

「確かにそうだな」

「うんうん」

「で、どうだった?」

俺はボールを拾うために自分より目線が低くなった先輩方を思い出す。

「控えめに言って…最高!」

その後は俺はとにかくいろいろな奴にボールをあげたり、木兔がしよぼくtoになったり

色々あつたけど楽しかった。

ただ気になることがある。

部活は終わったから帰ろうってことになった。

新一年同士で仲良くなったから、全員で遊ぼうってことになった。

ここまではいい。

皆んないい奴で仏のような顔をする奴もいないし。

だが何故、何故…

「おーい！鷹木い！ご飯まだかあー！？」

「楽しみなあー♪」

「何が出てくると思う？俺は肉」

「いや肉は出ないわけないダロ？」

「どんな料理なのか楽しみなだね」

「期待してていいよ〜」

なんで俺ん家なんだよ!!!

遊ぶのはいいよ!?!午前練しかなかったし!

でもね!?

なんで俺ん家なの!?

後なんで白福と雀田もいる!?

雀田はいい。居てくれてありがとうとすら思う。

だってもうすでに木兔の操作役やってくれてるし。

だがしかし白福!!

何故お前までいる!?!また俺を腱鞘炎にしたいのか!?

あと鷺尾!!食器を丁寧かつ完璧に準備すな!!!

俺がヤケクソ気味にご飯を作っていると、白福がエプロンをしてキッチンにやってきた。

え？

「なんでこっちに？」

「ん？だって2度も腱鞘炎になってるし、今日は慣れないセッターをやったわけだし。これぐらいはね。」

なんつだと!?

2度あることは3度あるって思ってたのに…

白福…お前…実はいいやつだったんだな（失礼）

そんなこんなで本日もワイワイやりました。

ちなみに俺達は3日後の練習試合次第で2軍に上がれるんだとか。

それどころか1軍にも入れるんだとか。

ちよつと待つて俺リベロなんすけど。

セツターじゃないんですけど。

赤葦きたらそつこーで負ける自信しかない。

これはまずいなあ。

いやほんとどうしよ。

第5話

今日は初めての対外試合だ。

なので朝から学校に集合してそこからかいバスで向かう。

なんて言うんだっけ？ シャトルバスってヤツ？ だと思っう。

今回の相手は「戸美学園」

言わずと知れた東京の強豪校の一つ。

たしか原作だと東京都ベスト4だったはず。

プレススタイルは覚えてなかったが、実際に中学の頃練習を見た感じだと「堅実」

なんか「審判にだけ良い子ちゃん」とか言われてたかもしれないが、それを抜きにしても安定した強さを持つてる。

音駒ほどではないにしろ、粘り勝つのが基本っぽい。

ちなみに今回の練習試合はどちらも一年が中心のチームになってる。

他の三軍の先輩方は残って練習だそうだ。

あと白福も向こうに残ってる。

若干寂しくもあるが俺の手首の安全は保証された！

しかしなんか顔暗かったな、アイツ。

間延びした声が普段よりも短くて暗めだった。

でも誰も気づかなかつたらしい。お前らどんな耳してんの？

あと原作キャラ以外の1年もいるにはいる。

嬉しいことにセッターも数名いらつしやつたのだ！

今日はセッターをやる必要ないと言うわけだ。

いやー良かった良かった。

俺はリベロですから（大事）

俺が自分のポジションの保護に成功？して頷いていると三軍のキャプテンが話しかけてきた。

「能本！今日はミドルブロッカーとして頼んだぞ！」

.....

.....え？

なんておっしやいました？

「お！鷹木は今日ミドルブロッカーか！てことは小見と出れるからダブルリベロだな
！」

「いいねー♪頼もしい」

「相手ブロックを気にせず打てるってワケだ」

「拾うもの同士頑張ろうな！」

ちよつとまてお前ら。

俺はまだ納得してない。

勝手に話を進めないOK？

この前の気付いたら俺の家でレッツパーレーしてたことの反省から俺は疑問を強めに発言する。

「いや、待つてください！俺ブロックはそんなに出来ませんよ？」

「ん？なーに言ってるんだ。この前の試合でセッターとしてブロックもしてたら？だいじょーぶ大丈夫！これはあくまで練習だからな」

えー…

まじで言ってるらっしやる…

「大丈夫だって鷹木なら！」

「木兔……お前の明るい声は頼りになる…けど今はいらぬ。むしろ邪魔。うるさい」
「下げるなら上げないで!？」

木兔がなんかしよげてるけど今はそれどころではない。

どうせすぐ復活するし。

なんで俺は毎度毎度ポジションが変わるんだ？

正直言つて俺に攻撃を求めないで欲しい。

だつて俺そんなにタツパないしパワーもないんやぞ？

この前の練習試合でも俺のブロックは吹っ飛ばされましたやん。

だからリベロやつてたのに…

俺がわけわからないと思つている事が分かったのかキャプテンが苦笑いしながら説明してくれた。

「いいか？能本の1番の武器はなんだ？」

原作知識という名のカンニングです。

とは言えないので、

「…アンダーレシーブですかね」

「そう、それに関してはもう一軍でも通用するレベルなんだよ」

「マジすか？」

「うん、間違いないよ。ついでに言うのと鷲尾のサーブ、木兔のスパイクとかもね。それ以外の推薦組の1年生も総合力なら1.5軍。今年はかなり豊作なんだよ」

「はあ……」

たしかに梶谷は原作で春高準優勝してた気がするしそうなのかもしれない。

「で、君の身長、指高、最高到達点は？」

「ええと、身長は175.6で指高216、最高到達点がスパイクなら291で、ブロックだと275です」

「それぐらいあれば十分ブロックできるでしょ？」

「……どうなんでしょうか……（え？出来るの？）」

「監督達は現時点で君と小見で後ろを守り、攻撃時には小見と……例えば木兔を交代させる。って言うのを考えているらしいよ？まあ木兔は見たところ調子にムラがあるから挙げただけだよ」

ええ……なにそれ。

つまりどういふことだつてばよ。

「あと君達が3年になった時に優秀なセッターが来ない限りは君がセッターになる可能性もあるよ？専門外を鍛える選手はその分数段上にいけるんだ。だから頑張つて！」

いやそんな簡単に…

主要キャラならともかく、一般人の俺には厳しいと思うんですが。

とは言っても選択権はなさそうだしなあ。

やるしかないか。

「一つだけ聞いてもいいですか？」

「おう、なんでもいくつでも」

「俺は基本下で戦つて体力を温存しつつ、ゲームの後半からヌルツと攻撃つて感じですか？（スパイク打つつの何年振りだろ…打てる気がしない）」

「こそ！まあ今日は失敗を好きにだけしていいから!!どんだん交代させるしね。ただブロツクは飛ぶだけ飛んでくれよ？指示は出すから」

それならまあいつか？

いい…のか？

とりあえず頑張るか。

『しあーーーーーす!!』

戸美学園スターティングオーダー

沼井WS 高千穂WS

広尾MB 先島S

先輩MB

大将WS

鷺尾MB 先輩S

木葉WS 能本MB

木兔WS

猿杓WS（小見LI）

梟谷スターティングオーダー

サーブ権はこちらから。

木兔がなんかジャンケンでもぎとつてた。

とつてくれたことはありがとう。

でも勝手に決めるのはやめようか？

ね？

俺が一通り木兔に注意していると猿杓が話しかけてきた。

「俺今ジャンサー練習してんだけどさやってみていい？」

「まじ!?!すげえじゃん。なあ鷲尾！」

「ああ」

「でもまだ安定感ないんだよねー。それでもいい？」

「じゃあ狙い気にせず思いつきり吹っ飛ばす感じで頼むわ。ミスったら俺らでチャラにする」

《鷹木カツケエエエー!!》

なんか羨望の眼差しを感じる。

嬉しいんだけどもこれ多分パクリなんだよなあ。

ごめんなさい。

てかブロックどーしよ。

とりあえず幅は肩幅くらいにして皿を意識しよう。

横っ飛びとかは極力しないように。

ピーツ!!

たっぷり時間かけて猿杓が開始の号砲を打ち鳴らす。

「ほんじゃまあーいくか……フンツ!!」

猿杓のジャンサーは上手くいったが、運悪くりベロのところにいつてしまった。

「ほいさー！」

「ナイスレシーブ！」

綺麗にレシーブされたボールは寸分変わらずセッターへ。

「レフトオオー！」

「よこせええー！」

セッターはレフトにトスを上げる。

レフトにいるのは音駒との戦いでいきなりフェイントを使ってきた「大将 優」

ならワンチャン来るな。

「猿杓フォロローの準備！」

「？オツケー」

「ブロック2枚！」

「クロス閉じろ！」

「(いきなり来るとは思ってたないっしょ) …よつと」

「なっ!?!」

「いきなり!?!」

そして予想通り大将はフェイントをかましてきた。
まさか本当に来るとは。

そんじや野菜王子のセリフを聞かせてもらおうか。

「フンッ！」

「な!？」

「鷹あ木ナイスレシーブウ!!」

言葉とは裏腹に木兔はなんか悔しそう。

いやなんでだよ。

フェイントにつられたからか？

それはともかく俺はなんとかフェイントの処理をしたがボールは右斜め後ろへ。

あれ？　そういうやあいつ「クソウ」って言わないのか？

つまらん。

「猿杓！」

「あいよ！」

「ラストラスト！」

「木葉！」

「ツシヤアアア!!」

ズドンツ!!

『ナアアイスキイイイ!!!』

「すげえすげえ!!お前から3人すげえ!!!」

「木兎うるさい。次行くよ」

「ん?鷹木耳赤くね?」

「うっさい!」

その後はとったり取られたりで膠着して20対20。

だがここからは離させてもらう。

皿ブロックの仕方もわかってきたし。

なんとかなるだろ。

とか考えてたら交代させられました。

そんなもつてあろうことかそのまま1セット目終わりました。

27対25で俺らが取ったからいいけど。

そして2セット目。

最初の得点はまたもや木葉。

拾うのも安定している。

どうでもいいがなんでこいつチャライんだろ。

チャラくなかったらもう少しモテるんじゃないか？

ただ見てるのは暇だから一緒に中を見てる小見といじることにする。

スパイクが出来て、アンダーも出来る！打つも拾うも器用貧乏な木葉！

「誰が器用貧乏だ!!あと雑過ぎんだろ!!!」

「小見。木葉の言う通りどうせならもつと長くナレーション入れてやろうぜ」

「そうすつか！じゃあもう一度…」

「やめろ!!!」

強面にして寡黙！無言のブロックで黙らせる！プレッシャーを与える事なら誰にも負けない！最近の悩みはふれあい動物園で一匹も触れ合えなかった事！鷲尾辰生!!

「……………」(ズーン)

「ごめん鷲尾悪かった!!」

「つい調子に乗っちゃまったんだ!!!」

「……猿杓……いつも笑顔にするコツ……教えてくれ」

「教えてやるから泣くなって」

俺達がこんな感じでやってるのには理由がある。

それは向こうさんが最初っから予想よりは少ないけど煽ってきてるからだ。

まあ俺らはさつきから上みたいにやって無視しまくってるけど。

存外これが楽しい。

「…ツチー…おい広尾」

すると相手はジャンフロを打ってきました。

そして木兎は拾えませんでした。

「ごつめーん!!ミスった!!」

「どんまいどんまいあれはしやーないよー」

途端に「うがぁー!」と頭を抱える木兎。

ただ俺は頭の角?というかあの尖ったやつ形の形が気になってしまう。

今までなんだかんだで聞いてなかったけどあれって寝癖なのか?

まあいつか。

これでしょぼくれモードになんなきやいいんだけど。

そうそう、1年組はもちろん、部員全員が「しよぼくと」について知っている。だからもしなっても対処は可能だ。

流石に今のでならないだろうけど、どこでなるか分からんし。

さてさて俺がまた入りました。

今の得点は17対21でリードされてます。

現在のポジションは前衛に推薦組以外の中でデカいのが揃ってて、後ろは左から小見、鷲尾んで俺。

せっかくデカいのが揃ってるわけだけどだからこそ、ここはディグやるか。

ディグってのはスパイクをレシーブすること。

ブロックとかなんもせずにとだ打たせたのをレシーブするってやつだ。

メンバーにそのことを伝えて早速実行に移る。

《捨てた!?!》

案の定スパイクを打ってきたヤツの目にはそう映ったのか甘いのがきた。

「鷹木！」

「オーライ！」

俺が丁寧なセッターに返して、後は前衛がすっかり決めて最終的には25対22で逆転勝ち。

俺はドシャツは出来なかったが皿ブロックでワンタッチをとにかくしまくった。が、サーブとスパイクは一本も入りませんでした。

その事を木兔と木葉に笑われたので校舎裏に連行してきました。

俺がスッキリして後片付けを手伝っていると今日帯同していた雀田とキャプテンが話しかけにきました。

「よし、じゃあこれから能本はミドルブロッカーな！」

うんなんかもう予想できてたわ。

でも一応理由を聞かせてもらおう。

「理由を聞いても？」

「もちろん、まず今日のお前のアンダーの成功割合が8割強。ミスったのは厳しいコースのだけ。流星は〃元〃リペロだな」

あははー…もー〃元〃ってついてやがる。

「で、オーバーはノーミス。セッターが牽制された時だけしかやってないしな。精度はまずまずの及第点だ」

そこは及第点ではなく届かなかった事に来るのでは？

「次にブロックだがあれば皿ブロックだな？咄嗟に言われたにも関わらず見事な対応力だ」

まあ今まで色んな事に遭遇してきましたから。

いやほんとに。

具体的には…：…思い出さんとこ。

「最後にサーブとスパイクだが……まあこれはおいおいパワーをつけて入るようになってくればいい。お前は後半から攻撃に参加してもらおう。だから前半はとにかくボールを落とさない事を意識して欲しい」

パワーに関しては上がる気がしないんですけど。

ちつさい頃から筋トレしてきたけど上がったのは体幹だけ。

少なくとも3年以上鍛えてこれだから泣きたくなるね。

そんなもってキャプテンの説明はまだ続いている。

「具体的には前半はブロックでワンチしたりアンダーでしぶとく。後半はドシャットしたりスパイクを打つ感じで」

えーつとつまり、俺は前半は防衛のみでとにかく繋いで、後半は攻撃中心で攻め込むってことかな？

「それとお前にはもつと持久力をつけてもらいたい。具体的には全国トップクラスのもの」

そうなりますよね……。

俺が心底嫌そうな顔をしてたのが伝わったのか、雀田の姉御が肩を叩いてくる。「自信持ててっ！鷹木ならやれるさ!!」

あ、姉御お……!!

クソウ…姉御に言われたらやるしかねえじゃねえか!

因みに合計で7回も練習試合をしました。

結果は7戦5勝2敗。

どれも一度はデュースになった事もあつてかなり疲れた。

いくら人数がいるからつてやり過ぎだと思えます。

帰りのバスに乗ったら皆んな爆睡してたらしいし。

かく言う俺も記憶がないからそう言う事だと思ふ。

ただ翌日俺と推薦組全員が2軍昇格になったのは驚いた。

キャプテンが言つてたのはマジだったのな。

とはいえインハイ予選が始まるのは6月。

まだ4月とはいえそんなに時間はない。

1年目から果たしてインハイレギュラーに成れるのかどうか…。

まあ厳しいだろうけど狙ってやるしかないな。

皆んなそのつもりだし。

ちなみに2軍は2軍で5月中頃にあの「井闔山学院」の2軍と練習試合をするそうだし。たしかそこには「全国三本指のエース」と「高校N.O. 1リベロ」が来年とかに来るはず。

ただ「飯綱掌」が同学年だった気がする。

それ以外は覚えてないけど2、3年連続で全国大会でベスト4以上だ。

正直2軍とは言っても戦いたくない。

絶対疲労度が桁違いなはずだ。

だがその前に祭りが迫ってきている。

そう、本来なら学園ものの中で必ず何かが起こる「体育祭」だ。

俺はもちろん皆んな強制参加なわけだが怠すぎることこの上ない。

なんでこの時期にやるんだよ！

バレーに集中させてくれよ！

とか言いたいなとか思ってたら木兔のクラスから木兔の声が聞こえてきました。

もしかしたら「体育祭よりもバレーだ！」とか言ってくれたのかと期待して、その日の部活でその事を聞いたらアイツはなんて答えたと思う？

「鷹木・バレー部のいるクラスでどこがトップになれるか勝負だ!!」

とか言いやがったんだぞ
!?!?

期待した俺が馬鹿だった！

何してんだよ、姉御お！

そうじゃないだろおお
!?!?

とか思いながら体育祭の練習してたら学級委員長に怒られました。
理不尽なり。

6話

ドンツ！

ドンツ！

晴天に見舞われた本日。

梟谷学園は凄まじいまでの熱気に支配されていた。

少なくとも俺にとっては。

バレーじゃないのに体動かすのは怠いんです。

いやなんです。

とりあえず話は聞いとこ。

「えー…：只今より第100回私立梟谷学園体育祭を始めさせていただきます」
学園長だか校長だかどっちかわからない人が宣言する。

今日は体育祭。

すなわち喜劇と悲劇を生む一日。

何処そのラブコメ漫画ならばキュンキュンする場面があつたり色々なイベントが起こるのだろうかここはそんな世界ではない。

そしてそれを証明するかのような暑苦しい宣言が行われる。

『選手宣誓!!』

「俺達は!」

「私達は!」

「正々堂々と!」

「戦う事を!」

『誓います!』

まあ彼らはそこまで熱血系じゃないようだ。

いやほんと助かった。

だつてもしこれが木兎だと思ふと嫌な予感しかない。

俺の気も知らず当人はクラスの間となんか騒いでるけど。

「へいへいへいへーい!やるぞお前らあ!!!」

『おおー!!!』

平常運転で何よりだ。

そんなわけで始まったんだけどもあつという間に進みました。

お陰で俺は放送席で椅子に座って扇風機の風を浴びて寛げています。

抜かりなく保冷剤等の冷気を送らせてます。

猫がいれば完璧なのに：

それは置いという何故俺がここにいいのか。

理由は簡単。

学級委員長に怒られた後で「何ならやる？」と言われたんですよ。

怠い事はしたくなかったので座ってられるやつがやりたいって言いました。

そしたらここに座ってなさいと言われました。

Q E D。

いや違くね？

競技の話じゃ無いの？

「競技は強制参加って言いましたよね？」

アッハイ

俺が回想していたら突如後ろから学級委員長が現れた。

いや、後ろから急にくるなよ。

あと心の声読むな。

お前は何処のサイキックだ。

「そんなことよりもこれは何です?」

「俺の私物」

「……扇風機ですよね?」

「いいじゃん、ほらー!」

そう言つて俺は風を向ける。

これで共犯だ。クツクツクツ…

因みに俺ら1年の競技はもう全部終わった。

あつという間だったな。

だつて木兎らのクラスがドチャクソ強いんだもん。

綱引きも徒競走も大玉転がしもクラス対抗リレーもやる気が違い過ぎる。

十中八九木兎効果だろうな。

うん、間違い無いわ。

雀田の姉御が上手く誘導したって事がよく分かる。

ご苦労様です。そして余計なお世話です。

原作だとそんな描写ないんだけど、もしかしたらなつてたのかもしれない。だつて中学の頃もそうだったし。

あつても俺は最後の部活対抗リレーはガチるつもりだ。

堂々とライバルを蹴落とせるからね。

サツカー部と野球部には絶対に負けん。

何故に奴らばかり声援を受ける？

不公平にも程があるだろう。

サツカーも野球もするのも見るのも大好きですよ？

でもねバレー部だつてかつこいいんだぞ？

なんせ人間離れたヤツにも会えるんだからな。

最高………ではないかもしれないが。

とにかくバレエ部に入れば良いことがあります。

上から人を見れるし、思いつきものを叩いていいし、大声も出せる。
こんなに楽しい事はない(断言)

そして普段ダラけてる俺がやる気を出す唯一無二のスポーツやぞ？

どんなに無気力な子でも明るくなれます。

バレエ部はそんな素晴らしい部活なのです。

だから頑張る。

バレエ部をもっと広めるために！

可愛いマネチャンズを増やすために！

黄色い声援を貰うために！

プライドをかけて！いざ勝負！

まあまだ始まらんけど。

そんな風にテキストに仕事をしていると次の競技がまた始まる。

プログラム No. 13

「Flower Garden」女子による花畑」

何これ？

初めて聞くなこのタイトル。

なんか話してたのかもしいないけど俺基本寝てたし知らんのも当然か。

内容は…え〜つと…「全学年の女子によるダンス。可愛らしくも元気ハツラツな女子のダンスをお楽しみください」

ほえ〜…白福達こんなんやるんや。

全然知らんかったな。

パンチラでも期待してお仕事しますか。

プログラム No. 13はこの音楽か
ポチツとな

しーん……

おろ？

もいちど、ポチツとな！

「ありゃ？流れない」

仕方がないこうなったらマイクで…

「あ、あー…マイクテストマイクテスト…場内の皆様にお知らせします。何処かにパソ
コンのお医者様はいらっしゃいますでしょうか？」

別に治せると思うけどね。

叩いたりすればどうにかなりそうだし。

だがしかし暑い中働きたくないんです。

早く終わらんかなあ……

そしてついに最後の種目。

「位置ついて〜〜……」

パン!!

その瞬間部活対抗リレーが始まった。

2年の部では野球部が一位を取った。

バレー部は3位でサッカー部が二位。

これは負けられない。

俺の順番はアンカーの前。

アンカーは運動において安心安全の木兔だ。

俺の前に走る木葉がサッカー部を睨みつけて前に出ると…

「……………」(じー)

「な、なんだい？」

睨みつけながら前を走り続けた。

いや、それ田中の…

てか木葉…お前のそういうところがモテない理由なんじゃないのか？

しかし気持ちちはよく分かる。

お前の思いを俺が受け継いでやる！

「野球部とサッカー部には死んでも負けん」

俺がふと呟いた言葉に反応したのは白福。

いや君なんでここに？

いつ来たので？

あとなんか距離近くないすか？

「なんで〜？負けても楽しければいいと思うよ〜？体育祭〃なんだし」

「(どっから出てきた？) ……男には色々あるのさ……」

「ふ〜ん？」

結果を言うとバレー部は一位だった。

3年生が。

まさか木兔がゴールの場所とコースを間違えるとは……

アイツってあんな馬鹿だっけ？

能力バロメーターには頭脳3つて書いてあつたよな!?
なんでそうなの!?

そんなこんなで体育祭の幕が降りた。

間話

「……………涼しいわね…………これ」

「だろお?」

「むう……………」

「ハア……………」

間話終了

「いいか能本。リベロとはなんだ?」

ところ変わって翌日の部室の会議室。

会議室あるのつて不思議だけあるんだからそういうもんなんだろう。

「え……………守護神でチームの屋台骨的存在ですかね?」

「その通りだ。リベロが安定しているかどうかでチームの戦い方は大きく変わる。本題は、何故お前がリベロではないかだが……………」

一軍キャプテン・部長に突然呼び出されたから何かと思えば俺のポジションについてのお話だった。

「さっき言った通りリベロはチームの守備の要。故にどつしりと構えている必要がある。いるだけでチームに安心感を与える存在。お前はそれに成れると俺含め誰も首をたてにふれない」

「それは何故に？」

「それは自分で考えろ」

ええ……

「この記録を見れば少しは分かるだろう。分かれば2軍戦に行く事を許可するが分からなければそれまでだ」

マジですかい……

なして俺だけこんな目に？

なくんか俺にだけ当たりが強いんだよなああの人。

声をかけられたり怒られるのはそれだけ期待されてるって事なんだろうけど。

あの人に限ってそんな気がしない。

それから1週間が経ったが俺は今だに部長に言われた事が分からないまま部活をこなしていた。

「レシーブ練いくぞー！」

『ウイッス!!』

梶谷のレシーブ練ははつきり言っただけでかなりきつい。

原作の鳥野の練習がどれほど厳しいのかは見た事しかないから分かんがそれに匹敵しているのは間違いない。

レシーブしたらその後はそのままボールが落ちるまでひたすら2対2を行う。

1人目がアンダーでレシーブする

2人目がトスをする

1人目がスパイクを打つ

反対のコート側の人レシーブする

もう1人がトスをする

最初にレシーブをした人がスパイクを打つ

これをボールが落ちるまで永遠と行う。

ん？よく分からない？

とにかく辛い練習って事だよ（放棄）

俺はその練習の最中に小見や他のリベロを見ていた。

何が違うんだ？

俺はさっきの練習の時にレシーブでミスる事はなかった。
見事にスーパーレシーブ（飛びつくの）も決めたのだ。

我ながら調子がいいと思う。

スパイクは相変わらずだったけどな。

俺が悩んでいると後ろから間延びした可愛いらしい声が。

「お〜い、聞いてる〜？」

「……………」

「能本〜？」

「……………」

「の・り・も・と〜?」

「……………」

呼ばれた方に目を向けるとそこには白福がいた。

しっかし白福って改めて美人だよなあ。

覗き込んでくる姿なんか男を殺しにきてますよ、これ。

「ノリモト…………?」(脅し)

「ヒエ……」

ただ可愛いなって思ってた見つめてたら怒られたんですが。

酷くない?

「練習の順番回ってきたよ〜?」

「え?わ、わるい」

どうやらもう一周したらしい。

とりあえず切り替えて練習をこなすでしょう。

あれからだいぶ経って今は最後の練習の時間。

今日は対外の練習試合が迫ってきてくることもあり3人1組の総当たり戦が繰り広げられている。

俺のチームは俺と木兎と先輩リベロ。

この先輩は今は2軍にいるが元々1軍だ。今は怪我が直ったばかりでここにいる。この期にしっかりプレーを見させてもらおう。

そんな事を考えながら戦ってきて次で5戦目。

現在の勝敗は5勝0敗。

しかし今ややってる相手とはなかなか差がつかない。

「なあなあ、なんで全然ラリーが終わらないんだ？」

「俺もそう思ってたよ。あんなに木兎のスパイクを取るなんて初めてじゃないか？」

「ですね。小見が上手いことはわかってましたけどまさかここまでとは……………」

いやほんと驚いてる。

俺らの相手は先輩×2と小見のチーム。

先輩達はタツパがめちやくちやある人ではないし、木兔の調子も良いからそう何度も取れるはずないのだが…

俺と先輩が考えていると木兔が何やら燃え出した。

「なんか打つ時に打つ場所がないって感じがするんだよな〜！負けらんねえぞおー！」

ん？【打つ場所がない】ってなんだ？

別にないとは思えないけど。

「木兔、打つ場所がないってどういう事だ？」

「うん？えーつとだな…なんか、こう…クロスもストレートもどっち打つても小見に取られるっていうかそんな気がするんだよ」

ほえ？

分かん。

俺がわけわからんって顔をしていると先輩リベロが何か分かったかのような顔をしていた。

「先輩分かったんですか？」

「ああ、ブロックをうまく利用してることだろう。ストレートを締めてクロス側に構えたりその逆も然りってわけだ。相手選手を良く観察してるんだろうな。そうしなきや先を呼んでコースを絞らせて取るだなんて出来るわけがない」

それにと行って先輩リベロは小見を見てさらに続けた。

「小見の柔らかかくどつしり構えてやるレシーブの仕方は仲間にとつて安心感を与えるものだ。能本のレシーブは飛びつきが多いだろ？だから能本の方が上手く見えてたけど、アイツは静かに確実に上げてるってわけだ」

なるほど。

そりや確かにスツキリ打てる場所がない上に安定してレシーブをし続けられるんだな。

ん？

これか！

部長はこの事を俺に理解させたかったのか!!

まずリベロは安定安心で飛び込まずに柔らかくどつしりととる。そうするとみんな安心出来るからな。

勿論出来たら飛び込んで取れたほうがいいんだ。

成功したらスパーレシーブになるし。

だけど俺はちよつとしたのも飛び込んでレシーブする事が多々ある。

中学時代に手を抜いていたあの癖だな。

その結果があのスコアってわけだ。

俺のレシーブ成功率は8割強。

対する小見は10割だ。

俺のレシーブはそもそも厳しいコースのは取れないし上げても精度が悪い。

対して小見はスパーレシーブにならないように、なつたとしてもそこに先回りできるようにして確実に上げる。

そりや俺にはリベロが向いてないわけだ。

別に今から変える事は出来なくはない。

けど癖つてのはなかなか抜けるもんじゃない。

ならこのままこれを極めて小見が隠れて俺が目立てば、今の俺たちみたいにさせられ

るかもしれん。

やってやろうじゃん。

疲れたから今日はもう練習せずにまっすぐ帰るけど明日からはやろうじゃん、多分。

そう思ってたよ。

思っていたんですよ。

「よっしゃー！もう一本いくぞー！」

うん、もう分かりきってた事だよね。

木兔の自主練って体力度外してるよね。

赤葦の気持ちがよく分かるよ。

嬉しくねえ……

とは言え理由も分かって部長から許可をもらえた。
これで俺も2軍戦に参加できる。

皆んな喜んでくれたことも嬉しかったけど、何よりマネチャンズに褒められたのがメ
チャクチャ照れ臭かったです。

いや、可愛い女子に褒められたら……ねえ？

まあそれは置いといてブロック&スパイク練だ。

これはただひたすらブロックしたりスパイク打ったりの繰り返し。

中学時代あんまりジャンプしなかったことも影響してるのか、俺はあまり最高到達点
が高くないんだよな。

それは仕方ないにしても新しい技を身につけたい。

サーブだとジャンフロだな。

俺には強烈なサーブを打つだけのパワーはない。

今後は付けられるかもしれないがそれは歳を重ねる中で少しずつ付けばそれでいい。
急につくわけないしな。

二つ目は母子級で飛ぶやつだ。

正直言つて出来る気がしないけど、木兔はなんかそれっぽいのをすぐ習得した。

軽く「こんなことできたらねえ〜」つて言ったのをすぐに実行してほぼほぼ成功して
そうに見えるのはおかしい。

後は体を柔らかく使うぐらいかな？

柔らかく使えればその分遠心力とかで威力が上がるはず。

困った時の遠心力だな。
だつて誰でもわかるし。

レシーブとかスタミナ、スピードも鍛えたいがそれらはやってる内に意識すればその
分上がると思う。

意識が変わるとだいぶ変わるもんなんだよ。

そうして月日がすこし経った。

いよいよ2軍戦だ。

第7話とある排球部員のお話　なお排球描写はない模様

朝練がてら体育館にて仲間達と軽く汗を流していると外から騒音が聞こえた。どうせ木兔が騒いでんだろうなあ。

てか「今日も朝練したい！さーせーろ！さーせーろ！」ってうるさかったから俺が部長とか顧問の先生方に頼み込んだってのにアイツはまだ外にいるのかよ。

これは由々しき事態ですなあ？この俺や二軍のメンバーにはさせといて？自分は外で遊ぶ？……ふざけるなよ？

俺は寝坊しかけてめっちゃ急いで来たんだぞ！普段なら深夜のアニメとか、危なそうな夜会とか個人と大勢の壁とか夜更かし見てたのに！

え？朝から見過ぎだつて？親はいないよ？そして俺の家だよな？つまり俺が家長、すなわちルール。

だからいいのだ！……って話がずれた。

とにかく俺はまだ眠いのにはジャンプしたり腕を振ったりして。なのに言い出しつぺのヤツがやらないのは納得いかん。

だから俺の代わりに木兔に今から練習させる。

「キャプテン（二軍の）！外のうるさいのを捕らえてきます!!」

「おー…頼んだ。———けど、逃げるんじやあ？ないよなあ？」

わ、わかってますよ。わかってます。

俺って信用ない……………？

「ごらあー！！木兔おー！！何しとんねん?!?!」

「お！鷹木!!見ろよあれ!でっけえよなー!!」

木兔が目を輝かせながら見る方向には巨大なバスが一台。所謂シャトルバスみたいなのがいた。

中学の頃のやつとかこの前のバスよりもデカイ。…そういや先輩がこれだつて言ってたっけ。そんなに時間かからないけど高速使うから何とかかかんとか。

男として気持ちは分かる。こういうのには何故か惹きつけられるんだよな。うん、分かるぞ。じゃなくて

「それよりも、少しぐらいはやれよ？今やつとけばアップになるし」

「分かった！席どこにする!?俺は一番後ろが良い！なんか偉そうだ!!」

わー…：いつも通り話聞いてねえ…

こういう時は適当に合わせるのが大事だ。

「はいはい、そーですねー。バレー少してもやりたくないのか？」

「!!やるぞー！今日もクロスをバンバン決めてやるからなあ!!」

そう言つて腕を振り回しながら体育館に入つてつた木兔。

転生して結構経つたけど木兔の扱いばかり上手くなつてる気がする。どうせなら可愛い女子とイチチャイチャやる為の話し方とか身につけたかった…

そんなこんなでバスに乗り込む時間となりました。

しかしいざバスに乗ろうとすると待ったがかげられた。

バスに乗る時は必ず行われると言つても過言ではない【座席争奪戦】が突如始まつたからである。

俺としては早く寝たいから早く終わらせてほしい。

ぼーっとしてたら俺の周りに集まってきたのは3学年のほぼ全員のマネチャンズ。
何故ここに？一緒に行くのは同学年の子達だけじゃなかったっけ？

「ねーねー能本。能本って好きな女子いないの？」

「あ！それ気になる！」

「いるのいないの？いるよね？」

わーお…恋愛脳なんだなあ…好きな子ねえ…可愛いと思う子はいてもいないかな。
だって今はバレーが最優先ですから。

嘘です。最優先はダラダラすることです。家で何も考えずにぼーっとしてたいです。
将来の夢はフリーライダーで、特に料理はしたくないです（トラウマ）

俺が沈黙を貫いているとマネチャンズの1人が食い下がる。いや本当にいないんです
けど

「いないかあー。まあそうそう口を割らないとは思ってたけど」

割るも何もいないんですが。

「じゃあ今から色んな名前出してくからYESかハイで答えてね」

よくあるやつー……俺に選択権が無いのにどう判断するのやら。

「じゃあまずはアタシ！」

名前じゃないのね、まあとりあえず黙っておこう。ただでさえ眠いから変なこと言わないように注意しなくては

「私かな？」

「ヒント頂戴よ。ヒントー！」

「それなら……年上年下だっちが良い？」

しつこい。

てか木兎達長くん「ッ！うおーっし！！……勝ったー！！！」

「クソオ……まさかグーだったとは……ッ！！」

「揺さぶったはずなのに……！！！」

「心理戦で木兎が1抜けなど……！信じられん！！」

ああはい、お疲れ様。終わったのなら早く行こーぜ。さつきから顧問の先生から圧を感じるし。

「あ、私わかった！雪絵ちゃんですよ！」

「あー！たしかに！」

「よく一緒にいるしねー！」

あーはいはい、そうですねー。……………白福とは腐れ縁みたいなもんだよなあ。雀田の姉御の方が頼りになるから嫁さんなら姉御がいいな。仕事しなくてよさそうじゃん。

くくく

「ただいま!!家事やつといてくれた？」

「おう。なんてつたつて専業主夫ですからな」

「ふふ、鷹木が家にいると本当に助かるな」

「そう言つて貰えると嬉しいねえ」

くくく

うん。雀田の姉御なら凄いい良さそうだ。家でダラける俺としっかり者の姉御。理想のカップルじゃねえか。

少し想像してたら顔に出てたのか、軽く引かれました。解せぬ

そんなこんなで俺らはバスに乗り込む。俺は問答無用で一番前の先生の隣に座った。本当は俺だつて友達と座りたいよ、うん。

だけでも静かに寝るには先生の隣以外に存在するだろうか？

答えは否。

にしても後ろがうるさい。ここは先生に頼まなくては。

「……いい加減に……静かにしような?」

俺が言うまでもなく先生により木兎達は沈められた。心なしか角もしんなりしてる。良きかな良きかな。さーて寝ますか。

—————

トウン トウン トウン トウン

「おーい! 赤葦いー! ここだぞー!」

「! お久しぶりです。鷹木さん、白福さん」

「赤葦またおつきくなつた?」

「かもしれないです。それとお出迎えありがとうございます。……ところで、鷹木さんバレーを辞めたつて本当ですか?」

「あー……まあ、な。俺も身を固めたし安定した収入の方が魅力的だからな」

「身を固めたつて……え? まさか——」

「そーだよー。婚約したんだー! ついこの前にね〜!!」

「!! おめでとうございます。結婚式はまだなんですか?」

「その通り、結婚式はまだ日程合わせてるから赤葦も日程教えてくれ、知り合い全員が居

「た方が嬉しいし」

「—————」
セダン車の中にて

「にしても驚きました。まさか鷹木さんがバレーをやらないなんて」

「そんなに驚くことか？」

「ええ、お二人が付き合っているどころか婚約もしている事以上にですよ」

「でも高校の頃から付き合ってたのは知ってるよね？」

「それはもちろん、ただでさえ2人は側から見たら付き合ってるようにしか見えませんでした。…付き合ってからにはモザイク案件でしたから」

「それは違うと思うが？特に高1の頃はそんな気配無かったはずだが…」

「それは多分鷹木さんだけです。付き合いだしたらどうなるのやら、と皆当時から思っていましたから。案の定空気がメチャクチャ甘かったですし」

「失礼だな、おい」

「ねえ…そんな事ないと思うよ？」

「いや付き合ってから外出るたびに…今現在も恋人繋ぎってなかなかだと思えますが………事故はしないでくださいね」

鷹木と白福は目を見合わせて同時に手を見て……

「普通じゃない？」

至極当然とばかりに返した。

「……まあいいです。それにしても何故鷹木さんは今の仕事に？」

「ん〜？そりや……まあ……好奇心だよ。あつなんか面白そうな仕事だなんて思ったからさ。何事も始めるのに必要なのは少しの好奇心なんだよ。……俺がバレーをやったのも最初は単なる好奇心だったからな」

「……そうですか。個人的にはかなり惜しいんですが……ていうか白福さんは反対しなかつたんですか？」

「反対〜？……多分最初はしてたんじゃ無いかなく？けど私は鷹木がしたい事をして欲しいし、応援したかつたから……あの鷹木をもう見れないのは残念だけどね〜」

—————

「……………い！お……………い！！」

誰かが俺の体を揺すつてる。だが不思議と嫌な感じはしない。草原にポツンとハンモックを置いて風に身を任せる。まるでそんな感じの心地よい揺れ。

「お——き——て——」

「……んあ？……ふわあ……………」

なんか目の前で揺れているものが2つ

水色の物も時折見えている。

これは……………新手の催眠術か!?

なわけないよな。でも眼福です。

「おはー……………着いたあー…?」

「もうとつくに着いてるしくなんならもう試合始まつてるかもよ?」

おーそーかー……なんか夢を見てた気がするんだが……試合ならもう行かなきゃなあ――

え!? 試合!?!
!?!?

「不味くね!」

微睡んだり堪能したり余韻に浸ってる場合じゃねえ!?

ていうか寝たら体リセットされるよな!?! たしか!

てことは……また最初っからアップするのか? 俺は……………1人で?

「私も手伝ってあげるから、早く行くよ?」

し、し、白福様あー!! もう一生ついて行きます!!!

ご希望ならどんな料理でもお作りしましょう!!

「ほんと? じゃあ宜しくね?」

おう！……ん？声に出ってた、のか？

いや今はそれどころじゃないな。俺は頭を切り替えてバスを飛び降りて2人で走って向かうのだった。

バスの人本当にすみませんでした。

8 話

イタチとの練習試合を終えてそれから少し。俺達梟谷はインターハイの時期に入った。

6月1日から3週間かけて行われるこの大会。夏休み前最後の大会が今始まろうとしている。

「(っ)おっかぁー!!!」

バスから飛び降りて早速大声を出す木兔。願わくばその大声でこの蒸し暑い季節を吹っ飛ばして貰いたい。

いや、逆効果だな。暑苦しいことこの上ない。武○壮とか、松○修造に匹敵しそうで甚だ嫌である。

最近木兔の暑苦しさが増してきたと思ったので、近所迷惑(周りの視線)だからやめなさいと言おうと思ったが、俺の口は姉御に塞がれた。

「いいから、いいから!木兔はみんなに任せなつて。雪から聞いたぞ?昨日の夜ランニング中にコースを外れた木兔を追っかけて、捕まえて戻ってきた上に、今日の朝少しでも練習したいって懇願した木兔と練習して、学校に行く途中でナンパをした木葉を連

れ戻し、コンビニでカロリーと睨めっこしてる白福を引っ捕まえる……いくらなんでも頑張りすぎだぞ？肩貸すから休んどけって」

そう言いながら俺の肩を支えてくれる雀田の姉御。

ああ〜☒？いい匂いだあ〜…（変態）

変態とでも、なんとも言う方がいい！されど人間の本心は正直なのだ！皆んな美人さんに世話されたいだろお？イケメンにヨシヨシされたいだろお？

つまり俺は普通。決して変態ではない（必至）

そんな邪な考えをしていると、俺の荷物を持つてくれてる白福に二の腕をつねられた。

「痛いよー白福ー」

「……………（ニコツ）」（2割増）

「あの、痛いんすけど……………」

「……………（ニコニコ）」（5割増）

「痛い痛いいい!!ちよつと待ってごめんさい!!」

「ここらー!やめなよ雪ちゃん。鷹木は雪ちゃんの為に頑張つてこうなつたんだから（大丈夫。狙つてないから）」

「は〜い。ありがとね〜能本。（信じてるつてば〜。ただデレデレしてんのが嫌だつ

ただけだよ〜」

そう言つてつねられて跡になつてる部分を優しく撫でてくれる白福。そんなことで俺の恨みは晴らされんぞ!!……最高なんでもつとしてください。

暫く撫でコリ（頭もしてくれる）を堪能してると、周りからの殺気を感じたが俺は気にしなかつた。

もつともキャプテンに睨まれて自重はしたけど（やめるとは言つてない）

そんなこんなで俺達も会場入りをしたわけだが、全国常連の梶谷ということもあつて視線がすごい。

気迫というか圧というか、そんな感じのをひしひしと感じる。あとなんか嫉妬らしきものも感じる。

「フツ……（羨ましいだろう?）」

「あの野郎……!!」

「調子に乗りやがって……!!」

俺が軽く鼻で笑うとカチーンときたのか、ざわめき出す野次馬ども。すまないが、これくらいは良いだろう?

こちらら普段から滅茶苦茶大変なんだからな!!代わつてくれるなら、喜んで代わつてやらア!

「いい加減にしろ…!!」

「ハイ!!」

なんか部長に怒られたんすけど…。ただでさえ顔が怖いんだからそういうのやめて
いただきたいつてのに。

—————

観客席にいるOBや応援団の人達がとつてくれた場所に荷物を預けて、必要な物を持
つて試合前練習をしにみんなで向かう。

普段おちやらけてる奴も、物静かな奴も、やる気のない奴も、声のうるさい奴も、の
ほほんとしてる奴も、特徴の薄い奴も、会場に踏み込むと同時に雰囲気が変わる。

「ふくろうだにー!!…行くぞお!!」

『おおー!!』

そんな彼らの姿を上から見るモノ達があった。原作で【ゴミ捨て場の決戦】と言われて
いた片割れである。

「なあなあ黒尾!あれみろよ!あれ!」

「ん?なーに?どしたの夜久クン?自分よりも小さい子でもいた?」

「息をするみたいに煽んな!!……つたく、あれだよな!俺達が参加してるグループのや

っ!!」

「???……あー、梶谷のことか。皆んな強そうだねえ。——それに比べて夜久クンときたら……相変わらず小さいねえ……（ん? あいつどつかで……?）」

「哀れなものつて感じで見んな!!俺の身長はまだまだこれからだろうが!!」

「……いやいや（笑）望み薄でしょ……」

「何を根拠に言ってるんだア? ああ!」

話しかけられると息を吹くように煽る彼とそれに応戦する者。

トサカのような髪型をしている方、「黒尾」と呼ばれた者の視線は梶谷のメンバーのあゝる一人に定まる。昔どこかで会ったような、そうでないような。

普段は無表情のようだが、時に怪しげな薄い笑みを浮かべる彼。掴みどころがなく、原作では「食えない奴」と評される存在。

ここまで言えば、誰でも気付くことだろう。

彼こそ、後の音駒高校排球部主将【黒尾鉄朗】である。

音駒は原作当時は序盤から終盤にかけて主人公らの強力なライバルだが、今の段階ではそうでは無い。

今回の大会でどこまで行けるのか、それは誰にも分からない。

「おーいお前ら。俺らもそろそろ試合行くぞ」

そんな彼らに寄ってきたのは一見すると仏のような顔をしていて、長距離移動で新幹線に乗れるのかが気になっていた者である。

「おっけー……つてごめくん。小さすぎて視界に映んなかった（笑）」

「……………」

向かおうとした黒尾がさつきから煽っていた夜久とぶつかってまた煽る。これが引き金となり夜久が物理による仕返しを始めた。

「いつ!? イデアデアエエエエエエエエ!? ギブギブ!!」

流れるようにクロの後ろを取った夜久が全力のヘッドロックをかます。「身長差があっても関係ない」とばかりに無理やり腕を伸ばしてやっつるため、重量もかかり見事に締まる。

「ングエ……………!! ……!!」

あつという間に息が出来なくなる黒尾とブチ切れている夜久。そんな2人をみて海は早々に離脱することにした。

「あく……夜久、ここだと目立つし、邪魔になって色々と迷惑になるから、それやるなら階段の踊り場とか人気がないところでやっつて」

「（海?!） たすけ……………!!」

彼らが鷹木と会うのはまだ少し時間がかかりそうである。

—————

ネット越しにそれぞれ試合に出るメンバーがコートに並び、審判の指示に従って試合が始まる。

初戦（2回戦）の相手は第3瑞（ずい）高校。特徴としては足技が上手いくらいだと思ふ。

イタチとか戸美とかの原作キャラと話してて、少ししか試合は見れなかったから詳しくは分からないんだけどな。

ちなみにうちの（梟谷の）一軍つてのは10人。ガチの精鋭だけが入れる。二軍が俺ら含んで20人。基本ベンチメンバーで、ベンチに入れるかどうかはその時次第。三軍はそれ以外で上で応援するだけ。

で、今回の試合のスターティングメンバーは俺や木兎といった原作キャラが全員入ってる。

やれる所まで行って、ヤバくなったら交代するんだとか。…つてことは危なげなく勝てば、ずっと出来るわけか？

………疲れるのは嫌だからある程度したら自主交代しよつと。

バレーは好きだぞ？ ずっとしたいとも思う。けど、実際はそんなの嫌に決まってる。

俺の好きなことは楽しく楽をすることだ。休む時は休む！その時間を減らす訳にはいかんのだ！

俺は基本体力を温存して戦うのだが、ここは最初っから飛ばそうじゃないの。そうすりゃ早くのんびりできるし、監督にアピールもできるだろう？

よってこれ以上の行動はないということだ。

そこまで考えて俺は口を開く。

「よっしやお前ら！初めっから飛ばしてくぞ！最後まで俺らで勝ち切るぐらいにな！」

「おお、珍しく鷹木が気合い入ってんねー」

「明日は槍でも降るんじゃないか？」

「……泊まり込みなのか？」

「それならずつとバレー出来るな!!」

「ソイツは却下だ!!」

なんでそうなるのやら。そこは普通に「おー！」とかじゃないんかい。

そんなわけで高校初の公式戦試合の開始だ！願わくば早く終わることを所望する。

—————ネット—————

鷹木 S

猿代 M B

鷺尾 W S

木兔 W S

小見 L I

木葉 M B

うんまあ、セッターがいらないから仕方なくね。小見はもちろん交代する時が有るけれども、出来る限り俺らだけで挑む為には仕方ない。

サーブは相手チームからだ。お見合いとか無駄な事で点を落とさないように、しっかりとセッターとして働くから頑張つて拾つてくれ。

相手が打ったサーブはフローターサーブ。それを小見が拾い俺に綺麗に返ってくる。周りを見ると鷺尾と木兔がそれぞれ飛ぶ準備をしていて、木葉が拾う構えを、猿代がフォロローの構えをしてる。

一方の相手は鷺尾の前に立ちブロックの構え。後は木兔の対面にデイグの構えをしてる。

っていうか前後3人体制で移動してる気がする。気のせいなのかも知れんけど。

まあここは木兔でいいか。しっかりと警戒させてこいよ？

「木兔!!」

「つーしゃあ!!——ぬん!!」

木兔の打ったスパイクは飛びついてきた相手のブロックを素通りし、ストレートに上

手く決まった。

「うっしやああ!!へいへいへいへーい!」

『いぞいぞ木兎!押せ押せ木兎!』

『ナアイスキー!!』

「よし!ナイス木兎!お前ら次行くぞ!」

『おう!』

その後も試合は終始俺たちのペースで進み、俺もサーブとスパイクを3本ずつだが決めて勝利。

(サーブ成功率:スパイク成功率=35%:40%) ↑高いよな?

試合の後は水分補給とかしながらミーティング。

俺としては嬉しいことにこの後の試合から少しずつ先輩が入るんだとか。これで休み楽しく楽にバレーが出来るってわけだ。

「……能本がやる気いっぱいあるっぽいし長く試合出れるようにしてやりませんか?」

「どうやってかな?」

「ずっと試合に出してたら早く交代して休めるとか思っただけですし、ちよくちよく交

代させて最後まで働いて貰うのはどうですか？」

「それはいいな。よしーそうしよう」

ちよつと待つて、俺顔に出てた？

結局その後さらに俺2試合に半分ずつ出場して次戦は完全に休み。

というわけで俺は音駒のメンツを探しに行くことにした。トーナメント表には書かれてるけど、未だに見たことが無いからな。早いうちに会っておけば主人公らの事も色々聞けるだろうし探さねばなるまい。

ちなみに先輩方には梟谷グループに会つてみたいって言ってきた。嘘は言つてない。

ただ驚いたことに森然と生川は東京の高校では無いらしい。てつきりここで会えると思つてたんだがな。

そんな俺が音駒を探していると目に入ったのは、今どき珍しいモヒカン頭の男。

見た瞬間俺は思った。そうだ回れ右をしよう、と。

「むい！なにか視線を感じたぞ！きては女子マネージャーか?!?!」

何も聞こえなかった俺はすぐさまそこから離れて再び音駒の搜索に出た。すると遠くの客席でゲーム？らしき物（PSPみたいな？）奴で遊んでいる奴を見つけた。

その辺を見ると会場で試合をしているチームを応援しているようだ。というか、あれって間違いなく【孤爪研磨】だよな。

てことは応援（ゲーム）しているチームは音駒以外有り得ないな。んじゃあ俺も見さして貰いますか。

確か原作キャラが3人はいるはずだ。試合に出てるかどうかは分からないけど――

「俺だ!」

「イヤ俺んだ!」

相手のスパイクをブロッカーがブロックしてそれを上げようと飛び込む2人。

コートのだ真ん中に落ちそうになっているからか、他の人はお見合いが怖くて突っ込めない中2人は突っ込んで行く。

「い!」

ゴツチーン! つといい音を奏でてボールは落ちたけど、ね。

「あれはリベロの俺のボールだろうが!」

「いや! 場所的に俺のだね!」

「んだとお!」

「小さいんだから無理しちゃダメだよー?」

「お前こそ手長いってんならしっかり拾えよ!」

「そりやおr」そこまでにしよう、な? (威圧)「

ヒートアップしていく2人を宥めた？のは仏みたいなやつ。坊主頭で音駒ってことはあれが【海信行】か。

怒鳴りあつてる奴らのうち、トサカの有る方が【黒尾鉄朗】で、ちっこいのが【夜久衛輔】か。

あの二人つてあんな仲悪かったつけ？そんな話聞いたこと無かったけどなあ。

まあ主要キャラを見れたし個人的には大満足だ。俺は踵を返して仲間の元に帰った。そして次から次へと試合が行われていき、気づいた頃には決勝に臨んでいた。

「次の試合の相手は言うまでもないが井闔山学院だ。今まであそこに勝った事は練習試合以外ない。だからといって向こうが油断してくれるわけもない。かなり厳しい戦いになるだろうが、楽しんでいこう。決して下を向かないようにな」

『アス!!!』

「それと木兎と能本」

「!はい!」

「お前らは試合の途中で必ず出てもらうから何時でも出れるように用意しとけ」

「アス!!」

俺と木兎はそう応えて相手のチームのある1人をみる。

1年生でありながら、チームのガチの主力。試合では散々に翻弄してくれた奴。性格

は真面目も真面目。努力家で、品行方正。この前の練習試合で彼もまたレギュラーを勝ち取ったそうだ。

彼こそが井闔山学院の不動のセッター。【飯綱掌】 後の JOC ベストセッター賞受賞者だ。

向こうも俺たちのことを見てニヤリと不敵な笑みを浮かべる。あの時仲良くなった彼と、今の彼はまるで違う。

一体どこまで互いが成長しているのか、いつどのタイミングでそれぞれが試合に出るのか。

それぞれのスターティングメンバーがコートに並ぶ。ベンチの俺達も気をつけをする。

さあ、絶妙に残されてしまった体力を全部使ってこの戦いに臨もう。
インターハイ予選最終戦の始まりだ。

9 話

インターハイ予選最終日。3週間かけて行われていたこの予選、そのトリを務める試合が今、始まろうとしていた。

記者や関東ローカルテレビの撮影陣等、多くの報道機関の者たちもいる。

スポーツをやる者なら誰もが憧れるだろう、会場のセンターコート（中心）で行われるこの試合。

両チームの応援団や関係者のボルテージはもちろん、その会場に足を踏み込んだ者にもれなく全員が、テンションを爆上げされている。

それは観客席に居るこの者達も例外ではない。

「なあ桐生。いくら俺達の予選が早く終わったからって、ワイらなんでもうここに来たん？ワイらが東京入りするんは7月の第二週やる？それをお前、なんでまた東京の予選を見るん？」

「…いや、この2校のどちらかと当たるかも知れんし……見といて損はなそうやし……レベルが桁違いに高いとかありそうやし……あと、雰囲気飲まれそうやし……」

「相変わらず暗いやつちやなあ。ネガティブ過ぎんか？」

「なあ猛虎、なんで今日も俺たちここにいるんだ？6月の休み全部返上して見にくるつて……バレー好きなのは知ってるけどさあ——とところで来週の月曜日から中間テストだけど、お前勉強してんの？」

「——サア！シアイヲミニイクゾオ!!」

「ハア、やってないのかよ」

「アツ！アレハマネチャンデナイカ!?!?」

「ワカトシ君、まだ戦うかどうか分からない連中の試合なんか見てどうするの？それに練習しなくていいの？」

「？練習ならこの後でいくらでも出来るだろう。まだ午前中だ。あと10時間は出来る」

「あ……(バレー馬鹿だったの忘れてた)それもそうだね。そんでなんでコイツらの試合見んの？」

「……昔全国で戦った奴がいる。俺の攻撃を悉く拾い上げた奴が何故ここにいるの

か、聞いておきたい」

「そんなすごい子がどつちかのチームに？（痛かつたらうなあー…）あ、それじゃあその子に会いに来たんだ？」

「ああ、上手いやつなら同じとこに来ると思ってたが…：アイツは来なかったからな—— アイツはウチに来るべきだった」

口調からは判断できないがきつとテンションが上がっていることだろう。

—————

『『お願いっシャーっす!!!』』

今全国大会のシード権をかけた戦いの幕が上がった。東京は強豪校の数と質が他県よりも平均的に高い。それ故にどちらも全国への出場権はもう既にある。

しかしそれで満足する気などサラサラない。

「ナイッサー!!」

「っしやあ頼むぞキャプテン!!」

「ああ、後輩たちが見てるんだ。情けない姿は見せられないな」

第一セットはイタチサーブから始まる。先輩達は強烈なサーブに備えて臨戦態勢をとる。

「強烈なの警戒しとけ！」

『おう!!』

相手サーバーはたつぷり8秒使ってジャンサーを打ってきた。

「いよし!俺だ!」

サーブは先輩リベロの元に飛んでいく。手始めは挨拶がわりってことだろうか。

「ライトライト!」

「俺によこせ!!」

「!頼むぞ!」

前衛の2人がセッターに声をかけて飛ぶ姿勢に入る。先に動いたライトの先輩が手のブロックを2枚引き付けて、空いたスペースを狙ってレフトの先輩が打ち込む。

ズドンつと重い一撃が決まった。

『ナアイスキー!!!』

『行け行け梟!押せ押せ梟!』

途端に湧き上がる応援と歓声。

その声で空気が揺れて俺たちベンチメンバーの体が震える。

「鷹木」

「ん?どした木兎」

「俺も早くやりたい……!」

そう言った木兎はグツと握りこぶしをして闘志を露わにする。この歓声を、応援を、視線を、注目を浴びて戦いたいと、ヒシヒシと伝わってくる。

普段はただ煩くて、面倒くさいコイツだが、今の状況だととても頼もしい。俺一人だと押し潰されそうで到底無理だ。

「ああ、俺も皆もそうさ」

早くバレーがしたい。スパイクを打ちたい。ドジャツトしたい。サーブスエースをしたい。スーパープレイをしたい。そして皆で勝ちたい。

出来る出来ないは関係なく、目の前で行われている戦いを見て、俺も確かにテンションが上がっている。

試合は取ったり取られたりを繰り返して、カウントは梟谷（26）ーイタチ（26）。互いに1歩も譲らず一進一退の攻防が続いている。

その近郊状態を破ったのは、彼だった。

イタチがメンバー交代で飯綱掌をこの局面で投入してきたのだ。正直いつてこの場面ですら【飯綱掌】と言っても投入するとは思わなかった。

少しでもどちらかが気を抜けば、それだけで1セットが取られる。そんな場面で投入する。

相手チームはこのセットを捨てた訳では無いだろう。むしろ、一種の秘密兵器として投入したはずだ。

とはいえ、この場面で交代することを相手チームのメンバーが驚かないのは、それだけ彼の実力を知っていて、信頼しているということだろう。

そう考えて俺はコートを見た訳だが、彼はボールを持っていた。それもサーブを打つための場所で。

「なあ、鷲尾。アイツのジャンサーってかなり強かったっけ？」

「……いや少なくとも、入るか微妙な木葉のジャンサーと同じくらいだ」
「おい！なにそこでナチュラルに俺をデイスってんだ!？」

そうだ。鷲尾の言う通りアイツのジャンサーはそこまで威力が有る訳では無い。

ジャンプロを習得してる訳でもない。使えるならあの時の試合で使ったはずだ。この大会でも見てないし。

まさか今日までの数ヶ月の短期間で習得出来るとは思えないが……

そんなふうに視線をアイツに向けると一瞬、ほんの少しだけ目線が重なった。そしてアイツは不敵に笑う。

「何するか分かんないだろうな。鷹木は良くも悪くも思考が硬い。俺があの時と同じなわけないだろ？あの時は武器を増やすためにジャンサーを試したんだ。俺の1番の

武器はコレさー! —— 悪いね」

トントンとボールを軽くまるで話しかけるかのように優しく触る。

丁寧に上げられたボールは綺麗な弧を描き、打ちやすいところに飛ぶ。

「——フツ!!」

放たれたボールは緩くネットギリギリを超えてこれまた白線のギリギリに落ちた。

「のっ……ノータッチエース!!」

誰かがそう叫ぶと途端に会場が沸く。その声は全て飯綱掌にだけ向けられていた。

その後も飯綱掌がジャンフロを決めて1セット目は26—28でとられた。

—————

「クツソ……あの場面で1年にやらせるとはなあ」

「ああ、だがあれは任せるだけの価値があるサーバーだ。問題は次をどうするかだ。能本は見ててどう思った?」

「そうですね……向こうは全体的に能力が高いですけど、攻撃力は俺らの方が上だと思えます。防御力に関しては同じくらいかなと、その代わりに連携を淀みなくやって………って感じだと思います。ただ、最後に使ってきた彼。セッターとしての能力は桁違いに高いです。多分ですけど今の相手の正セッターよりも………あ、タオルどうぞ」

「サンキュ。となると俺達の選択肢は2つだな。——よし! 全員集合!!」

早速スパイクをぶち込んだ木兔。そのボールは恐ろしい事にクロス、それも超インナーのアタックラインの前に着弾した。

「へいへいへいへーい!!!おおれ!さーいきよー!!!」

決まると同時に自分の体をめいっばい大きくして喜ぶ木兔。子供のように無邪気に楽しんでるようだ。もつとも、テレビカメラの超至近距離で叫ぶのは頂けないが。

説教をするのは確定として、その後はやや梟谷優勢で試合が進んで行き、カウントは梟谷(22)ーイタチ(20)の梟谷が2点リードしてるこの局面。

梟谷メンバーチェンジ先輩WS×2↓能本 and 猿代

とうとう俺の出番がやってきた。このセットも終盤に差し掛かっている。このままこのセットをとるためには、ミスを減らす方が大事。

と、監督が言っていたのでMBだが実質WSの木兔とWSキャプテン、この2人のアタッカーを残して、俺と猿代がWSの場所にMBとして入ることになった。

ーーーーーネットーーーーー

木兔MB

先輩S

先輩WS

先輩WS

先輩(キャプ)WS

先輩MB(先輩LI)

—————ネット—————

木兔 W S

先輩 S

猿代 M B

鷹木 M B

先輩 W S (キャプ)

先輩 M B (先輩 L I)

こうなったということだ。しかし、大事な場面で使われるのは嬉しいが、何故1年を使うんだろうな。

そうして俺はコートに向かっていった。

—————

鷹木はゆっくりとコートの白線の前に立つ。この先は別の空間。熱気渦巻く死闘の場所。

鷹木は自分の体が十分に温まっていることを再確認して意を決して一歩踏み込もうとした。

その瞬間鷹木を襲う凄まじい圧。周りから試されるかのような圧。この圧に鷹木は不敵な笑みを浮かべ、冷や汗をかく。

(「…………ハハッ!!中学一年以来の感覚だな。あの時も、接戦はいつも、こうだった)」

しかし鷹木はまだコートの前で足を止めていた。その姿を仲間は不思議に思うのは当然だ。

猿代は既に入つて木兎らコート内の選手と話している。

そんな様子を下に入れなかったメンバーと共に、上から見ていた白福は的確に言い当てる。

「?能本動かないけど…まさか、緊張してるのか?」

「ううん、あれは違うよ〜。あれはきつと——」

（こんな楽しいバレーが出来るつてのに、何を出し惜しみする必要がある?最終日最終戦。今日まで3週間少しずつ試合に出されたせいで、体力を完全に回復なんて事は出来なかった。だけど、この試合を走りきるのに必要な分の体力はある。なら——

「体力の使い切りがいがある」つて思ってるんだと思うな〜」

コートに入ることでも研ぎ澄まされていく感覚、体が熱くなるのに対して落ち着く思考、相手チームと観客から感じる視線。

それら全てを自分の力に変えて、鷹が木から飛び立ち本当の能力を發揮する。

「締まっていきましょう」

こういう時相手は何をしてくるか、その事を念頭に思考する。この時点で鷹木の耳には雑音が一切入らなくなっていた。

こつちのサーブを向こうが拾って、セッターの彼が俺らから見て左にセットアップする。

それに反応してブロックをしようと木兎らが立ちはだかろうとする。後衛の俺らもレシーブの為に構える。

(普通に考えたらそのまま打ってくる。けど、今の俺達は防御をより固くしてる。この状況でも撃ち抜こうとしてくるか? 向こうのスパイカーは言つちやあなんだが、誰も全国5本指とかじゃない。手探りをしてくるような場面でもない。なら、もしかしたら――)

相手のスパイカーはブロックが来たのを、まるで待っていたかのように空中姿勢を保っている。

それから思いつくことは一つだった。

—————

「クツソ：コイツらもデケエな：俺らはイタチの歴代メンバーの中でもパンチ力が無い。最弱とまで言われた事もある。そんな俺達だからこそ、色んなことを習得してきた。————それを今こそ使うべきだ」ドヤきつ!」

「!!」

フワリと放られたボールは木兔らブロックを嘲笑うかのように、ゆっくりと宙を舞ってコートに落ち――

「フンギツ！」

――なかった。そう簡単に点を渡すつもりはないとばかりに、鷹木が飛び込んで真上に上げた。

そのスーパープレイに歓声を上げようと、皆一様に声援を出そうとした。しかし、他ならぬ鷹木がそうはさせなかった。

「ン木兔オオ!!!」

鷹木が大声を出したその時、木兔は助走なしで高く跳躍した。まだまだ完璧ではないが、星海が行っていた「技」を咄嗟に使ったのだ。

いきなりのカウンターに相手側は誰も反応出来ず、木兔のスパイクの音が会場に響き渡った。

そして今度こそ歓声が湧き上がった。

『ナアイスキー!!!』

カウントは梶谷（23）ーイタチ（20）。ここに来て梶谷がやっとリードを3に広げた。

続く梶谷サーブを打つのはコントロール重視のジャンサーを放つ猿代。誰もが入る

ことを確信していたし、まさか後頭部に直撃する等思つてすらいない。

「ナイツサー頼むぞ！」

「狙う必要は無い。コートに入れることだけを考えろ。………出来ればネットインを期待している」

「いや、何言つてんすか」

だからこそ皆が細かく言わないし、キャプテンですらジョークを言う。その事に信頼されてる事を感じ取り、猿代は嬉しそうにスパイクを放った。

「俺だ！——え？」

放たれたスパイクは運良く相手チームのお見合いを成功させた。しかし彼らもまたそう簡単にボールを落とさない。

「ングウ!!」

お見合いで足が止まってしまった2人の間を縫うように、飯綱掌が飛び込んで上げた。

しかし上げたものは鷹木のは異なりジャンサー。リペロでなく、セッターで経験がまだ少ない彼では上げるのが精一杯。

ボールはコートの後ろへと飛んで行く。これは点を取れるかと、梶谷が思ったその時お見合いで足が止まった2人のうち、手足の長い方が足で蹴りあげてネット近くまで返

してきた。

その上、もう片方がそれに合わせて跳躍し、スパイクを打ってきたのだ。梶谷メンバーの誰もが反応出来ず、失点したと思った。

ボールはコートの右奥へ。苦し紛れで帰っ来るだろうから、前のめりになっていた梶谷側は誰もそこにはいなかった。

だが、予測こそ出来なかったものの、人一倍ダラケられるかどうかには敏感な男・鷹木はそうではなく飛び込んで上手く拾って見せた。

原作にそこまで出なかったとはいえ、主要キャラの1人が綺麗に上げた。それ即ち返って来る事と鷹木は考えていたからだ。

しかし鷹木はそのままベンチメンバーの元にフライングで突っ込んで行ってしまったが故に直ぐには打てない。

だが、そんな事は関係ない。何せ彼はレシーバー。後は俺達の仕事と言う感じで先輩セッターがボールの下に入る。

そして先輩セッターがキャプテンへとセットアップし、キャプテンが見事なバックアタックをして、ボールは相手コートの角にギリギリで入った。

カウントは梶谷(24)ーイタチ(20) 梶谷ゲームポイント。

「うおお!!なんだ今の!!」

「どっちもすげえ!!」

「……これプロの試合だっけ?」

眼下で行われている壮絶な1点の取り合いに応援団以外の者たちもざわめき出す。

「イヤー一流石は強豪校って感じだなあ〜」

「ああ、俺達とは違うな。けど合宿では負けねえ。その為にも一旦張り合うのはやめにしてようぜ……黒尾」

「んそーだね。ま、俺は張り合うなんて幼稚な事、した覚えは無いけどね」

「……それじゃあ、練習をしに行こうか」

『アス!!』

一方でそんな彼らを見て触発される者達もいる。彼らと会うまでのカウントダウンもまた、迫ってきていた。

だが、彼らと会うのはまだまだ先である。

「よし!このままこのセット奪うぞ!!」

『オオオ!』

サーブは再び猿代から。猿代は自分で終わらせる気満々で全力の1発を放った。

そのサーブはコートのだ真ん中に陣取っていた相手のリベロに拾われる。そして飯綱掌にボールが渡り、エーススパイカーにボールが託される。

「鷹木！お前後ろで構えろ!!」

「!? ウツウス！」

前衛全員でブロックをするが相手のボールは止められず、木兔の腕が弾かれてボールが飛んでくる。

鷹木は先輩の指示に従って下がっていた為に、確実に飛び込んで上げた。飛び込まずに取りれるほど甘いところには飛んでこなかったようだ。

そうして上げられたボールは、落ちることなく先輩セッターへと飛んで行く。ここでキャプテンに預ければ、確実に点を取れると思つてトスを上げた。

どんな場面でもミスをエースがキャプテンがしてはダメだが、終盤でこそ点を取る事を託されるのがエースであり、キャプテンだ。

キャプテンは気持ちを含めた渾身の一撃を放つ。バックアタックを得意とする事もあり、強烈な一撃が相手コートを襲った。

しかし、相手も気持ちで負けていない。その重い一撃を相手のリベロが何とか上げる。ただ、威力は殺せずボールは梶谷コートにネットインしてきた。

それにすぐさま反応した先輩リベロが、片腕を伸ばし拳で吹き飛ばす。速い速度でボールが後ろに飛んでいく。

だが、それに追いつく者がいた。

「ンギガア!!」

声にならない声を上げて顔面を床に叩きつけた男・鷹木である。

何とか追いつかんと飛び込んだのはいいものの、このまま上げようとしても精々少し上にかかるだけ。

それならば自分の顔面を見捨てて、腕をこれまた両手を合わせた拳でかつ飛ばした。

打ち上げられたボールは木兔の元へ。タイミングをとるのが難しいが、そんなもの関係ない。

「ー・打たせるなー!」

「ブロックブロック!」

打てそうなボールが近くにあるなら、打たない・飛ばない・打ち込まない等ということをする木兔では無い。

「オツラア!!!」

芯を捉えた一撃は相手のブロックを打ち崩し、ブロツカー2人諸共コートに叩きつけた。

カウント梟谷(25)ーイタチ(20)

第2セット 梟谷の勝利

10話

梶谷がセットを取り返すことに成功した第2セット。それを見て観客からは拍手が両チームに向けられておこる。選手達はその拍手を聞きながらも、特に顔を変えることなくベンチへと下がって行く。その目は互いの目を捉え離さない。「次は俺たちが取る」「次も俺たちが取る」と、今まで何度も戦ってきた2、3年を代表するように、キャプテン同士は睨むことなく心の中で言い放っていた。

実際にその場になければ決して感じることはないであろう言葉。最後に頭を叩きつけたことも相まって、今の俺は熱いような、寒いような、奇妙な感覚に包まれながら周囲を尻目で見渡しながら座る。椅子に腰をかけることで、足にかかっていた重圧が解放され、一斉に疲れが押し寄せてくる。疲労回復の効果もある、スポドリを流し込んで予想以上に体力を持ってかれた体に取り込むとしよう。

目を閉じて「五臓六腑」を実感していると、眠気のようなものを僅かながらに感じる。大会の決勝戦のように重要だからこそ「もう一度がない戦い」を実際に体験出来るわけだが、その所為で体力がごっそりもってかかてる。高校入りたての時に言われた、「体力をつけろ」ってことを今更ながら、本当の意味で理解できた気がする。

俺が思考の海に沈んでいると、周りの声が徐々に入ってきた。多分少し離れたところで3年の先輩方が会話をし始めたんだろう。しつかりとは聞こえないが、互いに意見を出し合っているのはなんとなくわかる。ところがキャプテンの声が聞こえない。あのthe・イケメンって感じの声はどこだ？そう思っつてその声を探すと、隣でいきなりその声が聞こえた。

「木兔と猿代は、ブロック、の、時に、……ゴクゴク……早く跳びすぎたり、反応が遅い時がある、から……グエツプ……隣の奴とタイミング合わせて跳べ、それから、木葉は——」

キャプテンが矢継ぎ早に1、2年生を中心に反省点を挙げていく。俺みたいに外から見て考えるのではなく、試合中に戦いながら仲間の動作や改善点について考える……こういういったところがキャプテンのキャプテンたる所以なのだろう。中学の頃にあったこと以来、プレー中に何かを考えることには抵抗感がある俺からしてみれば、キャプテンは間違いなく常人じゃないと言える。それはもう声高に。

というか、飲むか話すかどっちかにしろよ。木兔が真似しちやったらどう責任取るんですかい？先輩がそんなことをして、アイツが飲みながら話すなんてことを習得したら、静かになる時間が完全になくなっちゃうじゃねえか!!それは周りへの衛生状大変よろしくない。考えてみればすぐわかる。

想像してみよう。隣に座った人が、電話しながら飲み始めたらどうだろうか？なかなか嫌な現象だと思ふし、俺が耐えられないし、普通引くと思う（偏見）。それがただでさえうるさいことに関して、定評の塊である木兎に起こるんだ。それはまさしく、起きてる時間ズーッと話してるといふことだ。わかりやすく言えば、年中蟬が耳について泣いてるようなものだ。

少し話がずれた気もするが、外から見て考えるか試合中の得点時とかでの小休止の時なら、今の俺でも思考することはできる。だが、まず間違いなくキャプテンみたいなのは、今の俺では不可能だ。かといって木兎のように突っ込むだけというのも俺に出来ることではない。というかなりたくない。今まで「木兎シリーズ」を止めてきた俺が、そうなったら綺麗に「ミイラ取りがミイラになる」を体現することになっちまう。

「そしてお前は、寝ててもいいから、血を止めるー！」

「イグゲエツ!？」

鼻をつねられて変な声を出した俺氏。すっかり忘れていたが顔をぶつけた結果、鼻血がダバーって感じて口元まで流れてるんだ。意識すると鼻はかなりジンジンして流ることがわかるが、つねられても感覚がない。おかげで気づきませんでした☆

その際たる原因は白福である。白福に起こしてつて言う毎回されてるんですよ。え？なんで白福に起こされてるかって？それは俺も知らん（おい）だって知らないうち

に家の合鍵持つてるんだぜ？今更だよな（危機管理）

怒られたので目を開けて周りを見ると、目の前には無駄にイケボなことがどうしてもムカついてしまうキャプテンがいた。初対面の時思わず「絵に描いたようなイケメンボイスですかこの野郎」っていったつけ。コンプレックスなのか、かなり怒られたけど忘れた時に言つては楽しませてもらつてる。

「黙つてないで、早く血を止めろ！」

「早口を止めろ？」

「はいはい。そこまでそこまで！鷹木くんこっち向いて、アンタは指示出ししなさいよ？」

目の前にキャプテンがいる状態で煽ればどうなるかは分かつてるので（経験則）、言わないように捻つて出したのだがそれでも結局煽ってしまったようだ。俺別に煽りマシじゃないんだがな・・・もしや、キャプテンと話すときは煽ってしまうのか？なんかこう、デッドロック状態になつてしまうのか？それかキャプテンがそう言う体質なんだな。

「なに考えてるかは分からないが、馬鹿にされてるのは分かつた」

キャプテンがなんか言つてるが、非常に申し訳ないけども、もう視界と耳には入つてない。だつて目の前に桃源郷があるのだから。鼻血を止めるにはどうするべきだろう

か？答えは簡単。前から鼻に栓をしてもらうことだ。そしてそれをしてくれるのは、可愛い先輩マネチャンズ、さらに彼女がきてるのはジャージ・体操服。結果、前屈みになれば見えるモノは？・・・言うまでもない。

「あ、あれ？なんか鼻血が急にいつぱい・・・？」

途端に溢れ出す真っ赤な血となった。パトス（情熱）。瞬時に原因を理解した周囲の猿。こうしてはじまる男子による戦争。せっかくの休憩だと言うのに、誰も休むことなく次セツトに挑むことになる事がどんな影響を起こすのだろうか。もつとも、そんなことは関係なしとして監督とコーチ、審判、敵チームは試合をさせるのだった。そしてこの態度に不快を覚えるものがいたとか、いなかっただとか。

第三セツト イタチサーブ

血が止まらない&体力を使いすぎた鷹木は負傷者として万屋・木葉と交代してベンチスタートとなった。昔からなんでもそつなくこなすタイプの彼。スパイクの強い木兎ほどでなければ、鷲尾ほどのサーブも打てない。さらにレシーブも平々凡々の木葉。きつと無難にこなしてくれるだろう。

「？何か木葉のやつ、変な感じしません？」

珍しく動きが固い？硬い？木葉に俺や小見が訝しむなか、試合は3セット目に入り中盤。ここから最後まで勝つことを優先しつつも、首脳陣は選手団と別のことを考えていた。

「監督、春高でより活躍してもらうためというのは、分かりますが……」

「心の底から正しいことだとは思っていない……だが、賭けてみたくなつたんだ」

なんならこの後に控えている全国は捨てることも視野に入れながら。それぐらい木兎や鷹木の新世代には期待しているのだ。もちろん今日までのトーナメント戦でも出場させたてきたし、相応の結果も出してきている。しかし、そこで出した結果や実力をそのまま全国の舞台で発揮できるか？そう聞かれて「はい！」と答えられるのは木兎ぐらいだろう。

入部してからまだ一年も経ってないどころか、大して仲がいいわけでもないのに、首脳陣は木兎について深く理解しているようだ。これは首脳陣の観察眼がすごいのか、はたまた木兎がすごいのか。間違いなく後者だと言いたいものである。

話が逸れたが、だからこそこの場面から1、2年を出す。メンタル強化ほど時間のかかるものはない。それが首脳陣の哲学地味結論である。実力があるだけで、メンタルが弱ければ「全国で戦う」だけで止まってしまう。それは彼らを率いるものとして納得できない。

現2、3年の彼らも間違いなく全国でもつと高く飛べる。「全国で勝ち抜く」それが出来る、そう信じてやまない首脳陣から与えられた「殻を破る機会」。果たして彼らはこの殻を破れるのだろうか？答えは分からない。その一環として、抜き打ちでの「ターニングポイント」でのメンタル測定が始まった。

そしてここで監督達と選手陣では、目標に相違があると言うことも明らかになった。

そうして始まった試合のカウントは(梶谷)10―12(伊塔チ)。特に流れが変わることなく、ただただカウントが刻まれていく。このままブルブルと進むのは避けたい梶谷側。そこで梶谷はピンチサーバー・鷲尾を投入するかどうかで悩んでいた。

「このままの流れではまずいな……」
「ええ、うまく噛み合っていないですし……」

静かにしてないとまず聞こえないぐらいの声でそう呟く監督たち。安静にしてるとの事でアップする事なく、マネチャンズの1人と共にその話を座って聞いていた者がいた。当然、鷹木である。

「……確かに、このまま最後まで行っちゃうと……」

「……ですね。流れを変える為にも何かしないと……俺はアップしといったほ

うがいいですよね？」

「あ、それはだめ」

鷹木が立とうとするも、華奢な見た目からは想像出来ない圧力で押さえつける先輩マネチャンズ。その目はキラリと光り、ハンターと化している。マナージャー目線から見ても、コートに出てるメンバーの流れが悪く感じる。とは言っても、イタズラに行動することは出来ないし、させない。

何が原因で試合が動くか分からない以上、下手に歯車を加えたり、外すことは躊躇うもの。選ぶ時に少しでも問題がない、と思える者を選ぶ必要も有り、監督達も鷹木は体力が回復するまで使う気はなかった。

「一つでも良くなれば御の字、だな……」

「リセットか流れるか……行かせましょう」

そうしてボールを受け取ったのはこの大会で人知れず高評価を受けている鷺尾。チームメンバーも誰一人気付いてなかったが、1年ながら放たれる豪腕サーブは、実はサービスエースをリペロからばっかり奪っている。無口なことも相まってその事に気付く者はいない。いても少したつと忘れている。

「っしやあ！頼むぜ鷺尾！」

「……………ああ」

ハイタッチをしてボールを受け取った鷺尾。たっぷり時間を掛けて、彼はスパイクと見間違え音と速度で相手コートサーブを放った。そのサーブは相手のリベロを弾き飛ばし、チームの期待通りに結果を出した。しかし、本人はまだまだ納得言つてなかった。鷺尾はメンタル面に関しての問題は無い。が、本人としてはノータッチエースを取る気しか無かった。

今回のサーブエースもリベロから奪っていた。だがそれでも納得はいかない。彼の目標は「中学の頃のように」相手に反応すらさせないサーブを打つこと。リベロからサーブで点を取れば周りは盛り上がるが、触れられれば鷺尾にとっては盛り上がりがない。

中学の頃の進路で梶谷を選択したのは運命だとか、原作のルートとかでも無い。彼がそうした理由は「2人に勝つ為」その一点だけである。中学までは負け知らずだった彼に、初めて全ての面で勝ったのがその内の一人・木兎である。実力差はかなりのもので、スパイクとかスタミナではまるで歯が立たなかった。

そんな中唯一歯が立ったのがサーブだった。中一だったがどちらも打てたスパイクサーブ。その時点では木兎の方が上だったが、これしかないと考えた鷺尾は人知れず腕を振り続けた。そうして続けること暫くして、今では全国に通用するリベロでさえも取りきれないサーブを打つようになった。

しかし、それでも先に言ったように彼は満足してない。ここで足を停めれば必ず木兎に抜かれる。途方もない差を付けられる。それは嫌だ。認められない。それどころか、

「鷹木」からまだ1度も点を取ったことがなかった。

「……ひええー…何度見ても怖いなあ」

「だね。けど鷹木は練習とかで全部拾ってなかった？」

「練習ですから、調整してたんですよ……鷲尾ナイツサー!!」

「……ああ」

木兎と交代でベンチに戻る鷲尾。結果は（梟谷）13ー13（イタチ）の同点。2本のサーブミスエースで点をもぎ取り、追いついて追い抜くも、追いつかれ交代となった。1人で追いつくだけでなく、試合がガラガラと進むことを阻止した彼。そんな彼はベンチでまだ座っている目標と、ハイタッチをしながら耳元でこう言った。

——いつかお前からも取る——

知らぬ間にライバル視されていた鷹木。なぜに？と本人が混乱してる中、鷲尾はメンバ―の元へと戻って行った。背中から溢れ出る闘志を木兎に、鷹木に浴びせながら。

鷲尾のサーブでダラダラした流れが切られ、スッパリとした空気になった試合。欲を言えば流れを持ってきたかった梟谷だったが、そうはさせじと同点にしてみせたイタチ。イタチがタイムアウトを取り、流れが完全に止まった今、勢いに乗って突き放そうと双方が円陣を組んだ。

「飯綱掌、無理してもいい。——全員で点をもぎ取るぞ」
『オス!!』

「木兔が乗ってきてるし、鷹木の血が止まってきたか・・・」

「攻め時だな・・・レシーブは極力リベロと、出られたら鷹木でいけ」

『オオ!!!』

「それと……猿代！セッターで入れ」

「ウスツ!!——あえ？」

さあここから突き放すぞ！っと思っていた時に、まさかの猿代のセッターへの抜擢。木葉は入れ替えない上に、木兔が出続けてしまいいは猿代のセッターとしての起用。

（今日はやたらと1年をコートに立たせるな・・・勝ってるどころか薄氷の上にいるよ

うな時だが・・・実力があるとはいえ、遜色ないと思うが)

キャプテンら1部の勘のいい者達が違和感を覚えるのも当然のことであり、そこから始まる奇妙な試合は、様々な問題を残しながら進んでいく。さらに、攻撃重視の意識は時に身を滅ぼすきつかけとなり得ることを誰もが忘れていた。

「ッ!!!———グア // ア // ア // ア //!?!」

「へ?」

「.....直ぐに治療だ!急げ」

11話

激しい戦いの続くフクロウVSイタチ。

自然界でこの両者が戦うことがもしあるのなら、本当にこんな白熱したものになるのだろうか。

イタチ（鼬、鼬鼠）とは、ネコ目（食肉目）イヌ亜目クマ下目イタチ科イタチ属（*Mustela*）に含まれる哺乳類の総称である。

オコジョ、イイズナ、ミンク、ニホンイタチなどがイタチ属に分類され、ペットとして人気のあるフェレットもイタチ属である。

フクロウは、夜行性であるため人目に触れる直接の機会は多くないが、その知名度は高い。

「森の物知り博士」、「森の哲学者」などとして人間に親しまれている。

木の枝で待ち伏せて音もなく飛び、獲物に飛び掛かることから「森の忍者」と称されることもある。

Wikipeedia参照

ここから見るとフクロウの方が強そうである。

まあ、勝敗は自然界に詳しい専門家に聞くとして、眼下で目下行われている戦いは一方が崩れ始めていた。

カウントが進みフクロウ14ー15イタチの大事な局面。両者ともに流れを無理矢理にでも奪わんと、ボールに齧り付いていく。

その最中の出来事だった。

イタチが打ってきたスパイクを、手が長い猿代がブロックして弾く。

前衛のブロックで弾かれたボールがフラフラとコートの中辺りのライン上に落ちかける。

しかし、そうさせないと飛び込んで先輩リベロが上げる。

ボールが上がるのを視界の端で捉えた他の選手が、全員対応するために動き始める。

何故かセッターになってしまった猿代が下に入り、

万事屋・木葉が助走距離を確保するために下がり、

イケイケどんどの木兎がボールに向かって猪突猛進していく。

それ以外の先輩方も皆一応にフォロー等に移っていた。

そうして猿代が素人目にしては上手な、プロからしたら下手っぴな、両チームメイト

からしては微妙なセットアップをする。

その時であつた。

飛び込んで拾い上げた先輩リベロが、全速力で駆け出していた木兔と思いつきり交錯してしまつた。

「ツ!!!——グア ヽア ヽア ヽア ……………!?!」

「へ?」

「……………直ぐに治療だ!急げ!」

飛び込んだが為に、コートの上に手をつけていた先輩リベロ。

アタッカー達に助走距離を取らせる為に、横に避けようとした結果、ボールだけを視界に入れた木兔が迫る。

先輩リベロがその事に気づいた時にはもう遅かつた。

木兔は先輩リベロの手を思いつきり踏んでしまい、加えて顔に膝がめり込ませてしまつた。

予期せぬ強烈な一撃に先輩リベロが叫び声を上げながらのたうち回る。痛みに跳ねながら苦しむその姿は、まるで何処かの鯉を連想させ、駆け寄る者達も含めて、

「…コイキング？」

「……何言ってるの？」

と思つてしまったそう。

と、そんな巫山戯てる場合ではなく、すぐさま治療の為にプレーを中断して運び出す。それを尻目に見ながら、鷹木は木兔をベンチに呼び出す。

「……………」

「……………」

見るからに気落ちしている木兔。原作で誰かと交錯して、怪我をさせるといふ描写は無かったが、無かったからと言って起こらないわけが無い。

一方、監督達は代わりのリベロをどうすべきか話し合い、先輩達も共に真剣な話し合いをしている。

鷺尾や木葉といった、原作登場キャラの彼らも心配そうに先輩リベロを話し、続いて木兔を見て何か出来ないか、ともどかしそうにしている。

そんな状況を見て呼び出した鷹木は思った。

(……………めんつどくせえツツ!!)

彼は真面目である。しっかり者でもある。バレエも好きだし、皆とわちやわちやするのも好きである。

だがしかし、ダラダラするのが一番好きである。

具体的には前世の死因が風呂でダラけていた事、ぐらいにである。

試合の時であれ、勉強の時であれ、どんな時でも力を抜くことが前世から好きというか、本人の知らない“癖”なのである。

ボールの起動で取れるか、取れないかの人外……超人的な判断力を身につけられたのも、それ故にである。

手を抜く為にダラケたいという、彼の見えない本質が大きく影響を与えた。故に身につけられたのである。

でなければ、例え神様に特典を貰ったからと言って、知らず知らずのうちに木兎シ

リーズの1人になってたと言って、こんな特殊能力のようなものを身につけられるはずもない。

因みに、彼の体力が少ないのはボールの起動予測に体力をこつそり持つてかれるからである。

人……超人的な技術を身に付けても、燃費が良くなることはなかったようだ。

それはそれとして、鷹木は木兔を呼ぶ。

目の前でしょんぼりしている木兔も、何かフォローをしてやるかと思ひ呼んだ、が……こういう時何を言うべきか、何も思いついてない。

知らない内に参謀ポジにいるが、参謀ポジの誰かさんのように、チームの方針を進言してきた鷹木だが、コイツはまだタダの1年坊主である。

原作通りに進める事で見られるであろう、原作展開が大好きで今でもそれを求めている、だからこそ今までそれを目指して行動している。

なんなら原作の舞台に引越そうかと、割と本気で思うぐらいには原作を愛しているし、積極的に行動している。

種々の事情で梟谷にこそいるが、何時でも部活を辞めて、赤葦に譲る気マンマンである。

バレエは好き、木兎も梟谷のメンツも色々置いといて、好き、原作を見る為に必要な事を何だかんだしてきた、彼。

今ここで木兎を励まして何とかすれば、取り敢えず良さそうだと、あくまで原作を見る為に鷹木は、呼んだのであった。

「——はい、木兎君。今何考えてる？」

「……ゴメンなさい」

実際にはなっていないはずだが、見た感じ3分の1くらいちっさくなってる気がする。

「(・・・なんか可愛い)……謝って欲しいんじゃないんだよ。大体なんで俺に言う？俺じゃなくて先輩に言うべきでしょ？」

「……はい」

「俺はこういうの苦手なの。誰かに本気で叱るとか、まず俺のタイプに合わない。——てか、そもそも俺が怒るのは違うし」

「……はい」

鼻血が止まってもなお、両鼻にティッシュを詰め、締まらない鼻血面をしている鷹木。普段なら木兎も食いつく要素だが、残念な事に下を向いてるので見えていない。

「と、言うわけで一言だけ言わせる。——バレエをしたら命取られるのか？ Yes

or No…は分からない「No!」……答えられるのか」

「……取られません?」

サラツと Yes or No という簡単な英語も出来ない、馬鹿にしようとしたが、それに反応するくらいには元気なようだ。

それが分かったため、鷹木は名言を言うのをやめる事にした。

「まあ、普通はそうだよな。で、後で「誠心誠意」先輩に謝るとして、命取られないのに、この後のプレーでビクビクして失点するとか……分かってるよね?」

「お、オオオッス!!」

落ち込んだ人に言うべきことなど、名言以外に思いつくことも無く、長年かけて調k
……教えこんできた関係を利用しての説教に終わった。

鷹木自身は対して脅してないつもりだが、普段怒らない人間ほど、怒ると怖いものである。

—————

そんなこんなで1波乱あったが、リベロが他にいなかった為に小見が投入された。

お陰で現在のコートメンバーのうち、木兎・木葉・猿代・小見が入っているという、中々なパワープレイをかましている。

もつとも最低限の實力は誰もが身につけてるので、大きな隙は中々現れないのだが、どうしても技量・連携の両面で差が出てしまっている。

「コツチだー!!」

「よこせー!!」

3球目をスパイクで返すために猿代がセットしようとして落としたり

「——クツソが!」

判断が遅れて木葉のブロックフォロワーが間に合わなかったり

「つし……え? タッチネットオ!」

焦りまくっている木兔が距離感を間違え触れてしまったり

「オツラアア!!」

「ブヘツ?!?!」

木兔がサーブを味方の後頭部に叩き込んだり

散々である。

何とか小見が拾い上げ続けるおかげで、決定的な差は出来ていないが流れが悪いのは明らかだった。

カウント梶谷19―22イタチ。

サーブをレシーブし3球目でしっかり打ち込む。

相対するブロッカーがブロックし威力を落とす。

レシーブし相手のポジショニングからトスを決める。

そうしてスパイクを放つ。

そして拾われる。

イタチはじっくりと崩すのが目的なのか、梶谷の連携を露骨に崩そうとはせず、各選手の手を把握するかにようにネットりと繋ぐ。

折角鷲尾が流れをスッパリと切ってくれた後だと言うのに、不幸な出来事が起きた為、梶谷は中々流れを呼び込めない。

ある時からイタチのスパイカーは、徹底的に木兔と小見を狙い始めた。猿代のブロッカーはさして脅威にはならない事もあって、スパイクでしっかりと狙える。

「——うん!!」

「…アア!!——ツクソ!!」

小見がスパイクを取り切れず失点。

クロスが得意な木兔に対して、クロスをタッチラインの前さえ狙えないように閉める。結果甘いストレートに精度の悪いスパイクしか打てない。

“打たされている”という初めての感覚に、初めて感じる“屈辱”とも言える所業に、木兔は今、自分が何をすべきか段々わからなくなっていた。

ビビるなど言われて、普段通りスパイクを打とうとするとブロックに捕まり、気持ちよく決められない。それどころかドシャットされる。

その状況がラリー中に暫し発生し、ついに木兔は発症してしまった。

「——おれ、普段どうやって打ってたっけ？」

『ツツ!!!』

カウント梟谷19ー25

第3セット 勝者イタチ

「……うくん。流れ悪いねえ」

「鷲尾のサーブが決まってからコッチに来ると思ってたんだが、ね」

ここまで上から試合を見ていた2人のマネージャーが、第3セットの結果を見て残念そうな顔をする。

彼女らだけでなく他の上で見ている人達もまた、空気が重くこんな時に何をすべきかまるで分からなかった。

「———そういえば、なんで雪絵は能本の事が好きなんだ？」

結果、たまたま姉御の目に入った鷹木に関する話が始まった。恋バナというキユンキユンを生み出す行為。

それを白福に出してもらうことで活力にしようと、姉御は興味本位で聞いてみることにした。

「ん〜ん？えつとね〜…」

尚、白福が鷹木を好いている事は周知の事実だったりする。

知らないのは鷹木だけであり、木兔でさえ気付いてる節があるとか。

では、何故白福は『能本鷹木』が好きなのだろうか？

それは彼が両親を亡くしたときに…つまり中学生の時に遡る。

ある昼下がりのとある日。

中学1年生の白福は普段のルーティーンである、散歩の帰り道を歩いていた。

(ふくんふくんふくん♪)

頭の中で軽やかにステップを刻みながら、ニコニコ笑顔で歩くのが彼女。

何か良いことが有ろうと無かろうと、彼女は常に笑顔なのである。

そんな彼女の目にあるひとりの人物が写った。その人物は苦しそうに胸を押さえている。

時間帯がちょうど人が少ない時という事もあり、周りには自分しかいない。

もつとも白福は周りに人がいるかどうかなぞ、まるで気にしていなかったが。

白福雪絵 彼女は困ってる人を助ける事が大好きな可愛子ちゃんである。

「大丈夫ですか？」

「…あら、ありがとうね」

白福が声をかけながら肩を貸す。苦しんでいたのは買い物帰りの主婦のようで、近くには幾つかの買い物袋が落ちていた。

「ゴメンなさいねえ。どうにも夫婦揃って身体が弱くって……」

「いえいえ。困った時はお互い様ですよ。これは私が運びますね。お家はどちらですか？」

助けられた主婦は申し訳なさそうに白福に話すが、当人は迷惑とは思っておらず、寧

ろ人助けが出来て少し嬉しそうであった。

それから2人は連れ立って歩き出した。女性二人がいたら黙っている事なぞなく、自然と色々な話をした。

曰く、主婦には一人っ子の息子がいて、遅まで部活をしているんだとか。

曰く、最近夜遅くまで勉強していて、身体が心配だとか。

曰く、洗濯やご飯など、家事をかなりやってくれるんだとか。

曰く、息子のために手に入れた家がとても大きいだとか。

曰く、今の家はオークションでプレゼンにて競り落としたとか。

曰く、新築の家の使い勝手を不動産屋に報告する代わりにタダ同然で住めているとか。

そんなふうに話すこと10数分。

話に出ていた豪邸に到着した。

「ふわあ……おつきいですね」

「外も中も広いからねえ。掃除だけでくたびれるんだよ」

家の大きさに白福は子供らしく、可愛らしい反応をしたのに対して、主婦は大ききゆえの苦勞に苦笑いする。

正面玄関から入るとキッチンへは遠いとの事で、勝手口から2人は入っていった。

扉を指紋認証で開けると、そこには大テーブルと作り置きされているご飯が。

部活を頑張っている一人息子が、夫さんのためのものだろう。

「ありがとうね。ここまで運んでくれて本当に助かったよ。——良かったらなんか食べてくかい？」

「——はっ！す、すいません。………お願いします」

美味しそうなご飯を前に、ヨダレを垂らしていた白福。

頬を赤く染めて恥ずかしがりながらも、その目はご飯を捉えて逃がさない。

2人のちよつと早い食事は、こうして始まりずつと続くことに……なるはずだった。

12話

2人のちよつと早い食事は、数ヶ月後にある事件を発生させた。

元々これは一人息子の為に用意されていたものだが、それを白福が食べたからと言って、一人息子が食べれない……などではなく。

この家は広く、勝手口と正面玄関があるように入口も複数存在している。

その上中は広くかつ、複雑な設計になっている。

とはいえ、道に迷うくらいで距離が遠すぎて、行くのが不便とかでは無い。

それでもトイレに行くのがリビングからだ、5分はかかるのだが極端に遠いという訳では無い。

主婦と白福がいつも通り食事をしていた所、ある人物が普段通り、上半身裸で大テールにやってきた。

一人息子は風呂呂上がりは上半身裸なのである。逆だったらエライことである。

特段イケメンではなく、特段優しいのでもなく、特段運動が出来る訳でもない。

しかし、それでいて誰にでも分け隔てなく接する姿と、頭の良さは知れ渡っており、木兎の被害者としてその名は轟いていた。

誰あろう……やつである。

能本鷹木なのである。

「かーさん……メツシーとスポつとドリー。あと軽く食べたくなつて……」

「——キヤー——?!?!」

「こら！鷹木！風呂上がりはちゃんと服きなさいって何度も言ったでしょ!」

大テーブルにこんもりと乗った料理を見て固まった鷹木、割と腹筋がついてることに驚きガン見する白福、またこの子は言う事を聞かないと叱る主婦・改め母。

そして、こんもりと乗った料理を見た後に、悲鳴に気づいて白福という原作キャラがいることに驚愕する鷹木。

これが鷹木と白福の馴れ初めである。

—————

最初こそ鷹木も動揺したし、白福もまさか鷹木の家だと思っていなくて、驚きはしたが、そういうえば勝手口を使ってたし、表札とか苗字を聞いた事が無かったな、と白福は思い出した。

同じ中学とはいえ、普通に仲良く飯を食べる鷹木と白福。

その2人を見て母は思った、これはワンチャンあるのでは、と。

そんなことを知ってか知らずか、2人はのんびり食事を楽しむ。

「んで、白福はいつから俺ん家に入り浸ってたん？」

「うんとく……3ヶ月ぐらい前？」

「確か、半年前ね」

そんな前から!?!……まるで気づかかんかった、と自身の鈍感具合に呆れる鷹木。

出来る限り関わらないで原作を堪能しようと考えていた彼にとつて、寝耳に水どころか寝耳に熱湯の事案。

驚いている鷹木をよそに白福は家の鍵である、指紋認証まで登録しているんだとか。なんなら権限の大半を白福が握ってるのである。もつとも料理に関する所だけだが。

しかし、鷹木はある事に気づく。そういえば白福、バレエ部のマネージャーやってないな、と。

(まずい……白福は梶谷のマネージャーで、セリフもそれなりにある。なんとかしない
と)

部活のマネージャーになるのに、特段条件は無いが、梶谷は強豪校という事もあり、未経験でマネージャーをやるのはかなりキツイはず。

(早いうちに経験をしておいた方が、良い——つてか、原作でもそうだったのでは?)
そこまで考えて鷹木は、自身の思い込みに気づく。

自分は本来ならこの世界にいないはずの人間。だが、木兔がバレエをしないだとか、

そんな事はしていない。

それどころか何も問題を起こしてないし、寧ろ原作よりも木兔が強くなってるぐらい。

だから、鷹木というイレギュラーがいるにしても、さして物語に影響は与えてないと思おうし……少なくとも悪くは。

「なあ白福。良かったらバレエ部のマネージャーやってみないか？」

「え〜？ やらないよ〜」

答えは却下。それも即答。

「バレエって授業とかでもするし、楽しいけど〜準備面倒くさくない？」

（——否定出来ねえ）

「全くもってその通りです」

そう言つて鷹木は用意されたスポドリ等の飲み物を持つて外に出ていった。

—————

白福はそれから鷹木の家に通つた。家事を手伝う事もよくあつたし、ご飯を食べる

だけ食べて帰る日もあれば、友達と一緒に来て勉強をする時もあった。

鷹木もバレーをする時間以外はそれに混じって、母子、時には父も含めて仲良く楽しく暮らした。

その後に夜遅くまで鷹木は練習をしていた。その練習は多岐にわたり、白福達も遊び半分で手伝うようになった。

ある時白福は鷹木にこう聞いた。

「なんでそんなに地味な事が出来るのか」と。

それに鷹木はこう答えた。

「木兔を全国に連れていくため」と。

また白福は鷹木に尋ねた。

「なんで部活は手を抜くのか」と。

その問いに鷹木は答えた。

「手を抜かないと木兔に拉致られる」と。

白福は思った。鷹木は意味不明だと。それか木兔が謎なんだと。

今どき思考回路がしつかり繋がってない人なんているんだなあと、普段話すことな

い木兎のイメージ像を完成させていく。

そうして帰ったら白福が家にいるという事が日常となったある日。

母が倒れた。

身体が弱いにも関わらず、最近では体の調子が良いと言って鷹木の練習に付き合っていた彼女。

ただでさえ大変な家事。

ここで家事を普段からやっている作者から一言。

家事は慣れていようが、慣れてなかるうが、滅茶苦茶大変である。

実際に経験すると、如何に大変かは分かるだらう。

話を戻す。

鷹木はおかしいとは思っていた。

病弱で身体が弱かった母が、最近は「元氣過ぎる」と。

だが言えなかつた。否、母が言わせなかつた。

親にとつて、息子の頑張っている姿ほど見たいものは無い。

折角それが見えていると言うのに、何故その妨害をさせるといふのだろうか。

しかし、悪い事は重なるもので、父もまた亡くなつてしまつた。

母が亡くなつた事もあつて、今以上に頑張ろうと仕事量を増やした彼は、疲労に体が耐えられず亡くなつた。

一度に両親の両方を失つた悲しみ、それは血の繋がっていない白福であつても辛いものだ。実の息子となれば辛さは比にならない。

葬式場にて受付をしている鷹木に白福が話しかけてきた。

ちなみに難しいことや、怪しい親戚だとか、銀行員とかも学校の先生方や友達が全部やつてくれている。

木兎には頼んでない。いるだけで暑苦しいからである。正確にはちよつと構うだけの元気がないからであるが。

「……大丈夫？」

「——何が？……まあそりや辛いもんは辛いよ。けど、いきなりいなくなったからさ、実感がわかないんだよね」

そう言うが言葉の節々に悲しさが現れている。何とかしてあげたい、白福はそう思ったが、何をすればいいか分からなかった。

故に——

「私の胸で慰めてあげよつか？」

「——何言ってるの？」

腕を広げて welcome と構える。クラスのマドンナ的存在の白福雪絵にそんな事をすれば、後日何を周りから言われるのやら。

「付き合ってからな」

「……そか。生活とかは大丈夫なの？」

「家はタダ同然で買えたらしいし、もう不動産屋への報告もしなくていいって店の人が言ってた。2人ともお金を使うのは控える人種だから、貯金も結構溜まつてる。あと、

保険とかも降りたから、白福に50年分毎日ご馳走を用意できるぐらいには…貯えがあるよ」

「……大金を持つ人って身を滅ぼすらしいよ?」

「そんなときやそんなときだな」

「ハーレムパーティーみたいに、色んな娘を囲うの?」

「ハーレムをするだけの精根がないなあ…」

「ちっさそうだもんね」

「女の子が言う言葉じゃありませんっ!」

珍しく饒舌に普段のように話す鷹木。あまり思い出さないようにしてるのか、目を閉じて台詞を棒読みしているようにも見えた。

その姿に白福の心がキュツと締め付けられる。

子供が大人になるのにかかるお金は公立の場合はおよそ3000万だったり、私立なら1億だったり、まちまち。

神様が毎月問題ないようにしてくれる(多分)と、鷹木は思っているためそれに関してはそれっぽい事を言っておく。

50年分と言われても実感のわからない白福は、問題ないという事だけを受け取って次

の話をする。

「ゴメンなさい」

「なんで俺振られてんの」

一応付き合えない旨は伝えて置かないとと、腰を90度に曲げる白福。振られた鷹木にしてみれば、なんでやねんと突っ込みたいたいところ。

白福は何とか鷹木を笑わそうと若干躍起になっていた。しかし、下の話に繋がる事だとか、さつきみたいに恋愛の話をしても効果は薄い。

「能本ぐらいの」「——なんで同情するんだ?」…え?」

あーでもない、こーでもない、慰めの言葉をかけようとする白福に、鷹木は冷えきつた言葉を投げかけた。

目をぱちくりしている白福を尻目に、鷹木は淡々と受付業務をこなす。

目線を合わさず下を向いて話す鷹木。

「白福が俺の親にお世話になったのは知ってる。でも、俺の親が白福に構ったのは別に俺に同情して欲しいからじゃない。俺の事を慰めようとしてくれるのは、ありがとう。素直に有難いよ。でも——俺には要らない」

語られたのは鷹木の本心。

「目先が真つ暗になつたつて、未来が不透明だからつて、過去に現実逃避なんかしないさ。『今』何かしなきゃダメなんだ。こう言う時だからこそ、下を向いてられないんだ」

そこにあつたのは彼なりの決意。

「俺がそう思つて足を踏み込んでるのに、邪魔はしないでくれ。白福の優しさは嬉しいけど、それが俺に思い出させるんだ。楽しかった日々を」

白福に感謝をしつつも拒絶する。

態度に表そうとしたのか、目を覆つてまで拒絶をする。

その日、この言葉以外に二人の間に会話は無かつた。

数日後、白福は鷹木の元を訪れていた。

勝手知つたる我が家のように、指紋で鍵を開けて入っていく。

そして彼の姿を外のテニスコートで視認し、息をたつぷり吸つてこう言い放つた。

「今日から！アンタの面倒！！私が！！見る！！！！」

「・・・ハアツツ?!?!?」

「もう決めたから！」

「イヤイヤヤツ！こういう風の吹き回しだよ！！」

「鷹木は言ったよね？こういう時だからこそ、下を向いてられないって」

「言っただけでも……」

「ごうも言ったよね？同情するなって！」

「あー………多分」

「だから決めた。同情はしない。その代わりに、下を向かないように、私が手を貸す」

「お、おう？」

「ここぞとばかりに畳み掛ける白福。普段のおっとりした口調が、嘘のように掻き消さ
れている。」

「この前葬式場で鷹木は言った。」

“目先が真っ暗になったって、未来が不透明だからって、過去に現実逃避なんかしないさ”

“今何かしなきゃダメなんだ。こう言う時だからこそ、下を向いてられないんだ”
この言葉は、今まで白福が接してきた人からは、まず聞いたことの無い言葉だった。かなり衝撃だった。

自分は決して同情しようとした訳では無い。が、それを同情と捉えられたことは分かる。

だが、下を向かないように、という言葉が納得行かなかった。

白福は普段、笑顔な時が多い。それは下を向かないようにするためだ。

暗い気分になんかなりたくない。その想いが白福に冒頭での脳内鼻歌を生み出している。

が、周囲の鷹木以外の人間は大なり小なり暗くなる。

白福はその彼らに対して、バブみというか、母性本能をくすぐられる。

だから慰めたり励ますことも多いし、そうすることが普通で好きだった。

しかし、そこに鷹木が現れた。

彼は今まで白福がしてきた事をさせてくれない。

その姿を見た白福はカッコいいと思ひ、凄くとも思った……訳ではなく、目を奪われ、

対抗心が宿った。

拒絶しているくせに、その声色は人肌を求めているようだったし、その上、鷹木は思っ出したくないなどと抜かしたのだ。

あの楽しかった日々を忘れる？ 少なくともそう考えているだと？

巫山戯るな。

白福にとつて、自身の欲求である慰めと、自分との楽しい記憶まで忘れるというのは、到底受け入れられなかった。

この男も慰めたい、慰め倒してやりたい。

そんな不思議な思いが溢れ出してきて、鷹木に構いたいという気持ちが大きくなった。

別にイケメンでもなければ、特別優しいわけでもない。

頭は良いが天才ではないし、運動もバレー部の分強いが、木兔には劣る。

しかし、彼のその考えに自分には無い、特別な何かを感じた。

人は自分ないものを持つ者を羨ましがすが、それは恋にも当てはまる。

少なくとも白福はそうだった。

中2のある日、白福は気付いた。

鷹木ともつと話したいと、もつと一緒に居たいと、強く願っている自分がいることに。

そして自覚した、自分はこの能本鷹木とかいう男が――

――好きなんだと――

「へえ……んじゃあ最初は好意無かったんだ」

「そうそう……でも、なんか、いつからか一緒にいるのが当たり前になって、他の女子と話してるのを見るのが嫌になったんだよね」

対して恥じる素振りもなく、懐かしみながら楽しそうに語った白福。気付けば他の男子共も目がうるうるしている。

木兔の影響なのか、部員のほぼ全員が感情に敏感になった。その賜物であろう。

「喧嘩とかしたことないのか？」

「ん……あ、中3の時に1回だけあつたかな。あの時は鷹木がなんか意味不明に落ち込んでてね。慰めようと思ったんだけど、なんかシャキツとしてない鷹木を見たくな

かったから……吹っ飛ばしちやっただろ」

ぶっ飛ばした時はスカツとしたなあと、楽しそうに述べる白福を見ながら、姉御は確信した。

(鷹木は尻に敷かれるな)

「——ひっキシヨい……ひっキシヨい！」

「いや、どんなクシヤマだよ」

「はっ鷹木らしいな」

「お前ら、試合始めるぞ」

「「オス!!」」

—————

崖つぶちに立たされて食らい付かんとする梟谷と、ここで決めてしまおうと勢いづくイタチ。

始まってまず展開されたのは両チームの主砲による撃ち合い。互いに3球目をえぐい効果音と共に振り抜く。

時間を取ったことで落ち着けたのか、梶谷チームの動きが噛み合いだしている。

それぞれがそれぞれの成すべきことをなし、チーム内に好循環が生み出されている。しかし、相手もさるもので、飯綱掌を中心にギアが数段上がってきている。

最初と比べると数センチ高くセットアップしてのアタックは、猿代というテナガザルがいなければ、今頃差がついていた事だろう。

試合はカウントを見れば梶谷5―5イタチ。

序盤から飛ばし合う両チームの熱気は、会場の外にまで届きそうな程である。

そうして激突してる中、梶谷の監督がカードを切り始める。

ここに来て先輩方だけで試合が行われ始めたのだ。

ブロックで開眼しつつある猿代と小見を残し、その他の1年生は全て交代させたのである。

本来ならまだまだ木葉を見ていたかった監督だが、流石に「飯綱掌」という怪物と、それに匹敵する怪物集団「井闔山学園」の攻勢を見て、木葉を抜くのが最適解だと判断した。

(まさかあそこまで綺麗なセットアップをどこからでもしてくるとは……うちの1年生
といい、今年は飛んでもない子が多いな)

木兎ともまた「しよぼくと」になったが為に交代していて、戻ってきた先輩リベロに
平謝りしている。

そしてカウント梶谷10―10イタチの場面になった時、ついに我らが主人公・能本
鷹木が満を持して投入された。

「おっし……やるだけやるぜい！」

気合十分で入った鷹木に対して、煽るは疲れ果てて交代する小見。

「足引っ張るなよー」

「お前は足滑らすなよ？」

つまりリベロ(交代が)である。

そう、リベロ(ポジションが)なのである。

試合が再開されて鷹木は思った、

「取るだけって楽しい!!」と。

そこからはまさに鷹木劇場であった。

相手の放った強烈なスパイクを先輩がなんとかあげる。

が、取り切れなかったボールは高く後ろへと飛んで行く。

ボールの威力・軌道・レシーブから、鷹木がどこに飛びそうかを判断して全速力で駆け出す。

中学時代に身につけた、立ち位置やボールの威力で取れるかどうかを判別できる技法。

当時は頑張れば取れるボールを取らないように身に付けたものだが、今では体力をこつそり持つてかれる代わりに、どれがアウトで、どれがインかも大体分かる。

5割もいけばいいほうだが。

13話

先輩があげ損ねたボールはフェンス近くにまで飛んでいき、それを鷹木がすんでのところで蹴り飛ばす。

その後フェンスに突っ込んだのはご愛嬌だ。

ネット近くに飛んできたボールを猿代がアタックする。

しかしそれは容易く拾われてしまう。再び相手が強烈なスパイクを放ってきて、それを壁3枚でブロックする。

ブロックしたボールはユラユラと落ちていき、コートに着く前に鷹木が今度は拳でかち上げる。

何故かフェンスに転がっていく鷹木を尻目に、猿代がアンダーレシーブで相手コート
のセッター飯綱掌に取らせた。

対する相手は、飯綱掌が渾身のスパイクを放ってきた。誰もいないそこに、フェンスから飛び出した鷹木が、ラインギリギリのボールを左前に弾く。

そのボールは普通に先輩方がアタックして返した。ところが次のスパイクが猿代の顔面にストライクでめり込んでしまおう。

弾かれたボールは後ろでびっくりしていた鷹木の所へ。

驚いた鷹木はびっくりして手で弾き、たまたま手のひらの硬い部分で捉えたことにより、ボールは相手コートギリギリ「外」に落ちた。

『……いぞいぞイタチ！いぞいぞイタチ!!』

ワンプレー中に2度もフェンスに突っ込むという離れ業？をかました鷹木だったが、最終的には点を取られてしまった。

その事に残念がるギャラリーだが、その中で1人だけ、鷹木のフェンスへのダイブに恐怖を感じている者がいた。

誰であろう、天童覚である。

「うつひえー！よくあんなこと出来るネー！」

そしてもう1人、鷹木がフェンスに飛び込むだけでなく、フライングする時にさえ怯える者がいた。

誰であろう、白福雪絵である。

「ん〜んと、だ、大丈夫かなあ〜……」

しかしそんな2人をそれぞれ励ます存在がいた。方や淡々と、もう片方は暑く語る。「中学時代もしていたな」

※鷹木は試合に出たくないがために、ワザと飛び込む事が多々ありました。

「まあ鷹木だし、大丈夫だよ！」

そんなこんなで実はカウント梟谷15—10イタチ。

マジかよと思わずにはいられない得点差。

うち一つ一つのプレーで鷹木が随所にスーパープレイをかましている。

彼は体を酷使する度に思う。なんで俺はこんなに頑張っているのだろうか、と。

それは久々のリベロ（と交代するポジション）だからである。

それ以上でもそれ以下でもない。

たったそれだけの事実が、鷹木に自身の実力の限界以上のプレーを体現させていた。

たとえリベロになれなくても、その位置に立つことだけで気分が反り返るようになら

りに上がる。

そうして戦い始めて少し、試合を決定づける瞬間がやって来た。

カウント梶谷18—16イタチ

鷹木はこの時自分の調子がかかなり良いと思っていた。事実たしかにここまでは良かった。

ところがイタチが差をじわじわと詰めてきている。

それは飯綱掌がここに来てギアを数段上げてきたからだ。

知り合いで、それなりに付き合いのある能本鷹木が、目の前でコートを縦横無尽に動き回っている。

そんな姿を見て負けてられないという気持ちが大きくなった。

そこは流石は原作キャラと言うべきか、あつという間に成長した。種々の動作が洗練され、トスの高さは明確に高くなった。

スパイクを打つ人のギリギリ限界まで上げること、チーム全体の実力を引き上げる。

こうしてイタチが梶谷の背中に次第に迫いついてきた。

その事に梶谷は焦る。ここまでリードは最大で5点差まで広げていたのだ。それが

今やあと少しまで来ている。

このままでは追いつき、追い抜かれる。その事が梟谷メンバーの動きを固くした。

つまり、ギアが数段階上がった飯綱掌の完璧なセットアップの前にずらされてしまったのである。

それでも鷹木は止まらない。自分の好調が木兔ではないが伝播している事を実感しているから。

点差をつけたし、自分の調子がかなり良いと思っていたから、思い込んでいたから。だから食らい付かんと人一倍以上に体を無我夢中で動かしていた。

そもそも今この時点で止まることなど許されない。その事を本能的に理解して、必死に喰らい付かんとしてさえた。

その結果、「好調」が「焦り」となったのだ。

そして現実是非情だ。

再び飯綱掌が高くセットアップする。それにいち早く反応した鷹木が相手スパイカーの利き腕側に立ち、変わらずリードブロックをする。

今度は両足・両腕を伸ばしてではなく、右手だけを伸ばしてブロックを試みる。足りない高さを少しでも補う。当たらなくても良い。後ろには信頼できるリベロがいる。

そう考えて鷹木は動いていた。……本人の中では。

この時の鷹木は間違はなく焦っていた。普段ならこんなことは絶対にしない。そもそも試合中に鷹木はここまで思考しながら動かないし、動けない。

中学の頃の一件からなんでも理解しようとするのをやめた。考えてから動くのではなく、考えながら少しの思考をする。それが今の鷹木のプレースタイルだ。

しかしそれでも相手のスパイクを止めることは出来ず、鷹木の指の上から叩きつけられたボールは「バチイツツ!!」と鈍い音がして後方へ。

この時一人だけ異変に気付いていた者がいた。

「ダメ!!」

思わず身を乗り出そうとしたところを姉御に止められる。それはそうだ、ここは二階席。飛び降りる事は出来ても、試合中にプレーの邪魔をしてはならない。

それでも、どうしても今すぐに彼女は鷹木の元に行きたかった。強く握られた手摺は悲鳴を上げるほどに力が入っている。しかしその思いは叶わない。

後方へ飛んでいったボールはキャプテンがしっかりと時間を取る為に、明らかに焦っているチーム全体を落ち着かせる為に、彼にしては珍しく高く、高く上げた。

普段よりも明らかに高く上げた時のキャプテンと目があつた鷹木は、その意味を不思議と一瞬で汲み取ることができた。

それが何故なのかは分からない。ただ、焦りが消えて思考が、視界がクリアになるような予感がした。

するとコートメンバーが、それぞれの自身の場所、仲間の立ち位置、相手の位置、ボールの位置を見ずに見えた気がした。

迫るイタチによつて目先の一点と、相手の勢いに吞まれていたチームが、にわかには活気付く。

そこから鷹木は、メンバーはただ無心に体をなんとなくで、こうしたら良さそう、という感じで動かした。

不思議とそれぞれの考えが伝わり、理解される。

この時、今、一番良いのが打てるのが誰かも雰囲気で行わる。それを受けて鷹木は自分の助走路を導き出し、ボールを呼び、セットアップに最適な位置と確実に点が取れるであろうコースを見つける。

打ち込むべきコースへ打つ為に、相手のブロックを避ける為に、少し斜めに高く跳躍する。体をピンと張り、グツと力を込める。

(完・壁!!!)

今まで練習で一度も出来なかった、斜め飛びでの全力スパイク。

練習では一度も成功してない打ち方。そもそも普通のスパイクでさえ、確率は低い。それなのに、疲労も痛みも雑念も無い、全てがクリアな状態で打ち込まれたそのボールは狙った所に一寸のズレもなく決まった。

地面に降り立つと同時に湧き上がる歓声。駆け寄ってくる仲間。盛り上がるベンチ。その中で唯一一人だけ、白福だけが違う表情をしていた。

その表情と視線に気付いた鷹木は一度は疑問符を浮かべる。しかしその視線の先を見ると、突如、鷹木に激痛が走った。その強烈な痛み鷹木は呻き声を上げながら倒れ込む。

歓声が無くなり、寄って来る仲間たちの顔からも笑顔が消え、ベンチもまた不安げになる。

「…爪が……!!」

相手のスパイクを無理してブロックしようと右手を伸ばした時に響いたあの鈍い音。アドレナリンのせいで気づかなかったが、あの時ももうすでに鷹木の爪は剥がれていた。

辺りを見渡せば血がまばらに落ちてる。極限まで集中力が高まっていたからか、あの瞬間に誰も気づかなかったのだ。

ワンタッチの時に鷹木は下から、ボールは斜め上から、それぞれぶつかりあった。その結果がこれである。

いつの間にか下をやつてきた白福と雀田が鷹木を治療室へと連れていく。

よりにもよつて試合終盤のこの時に、流れを掴み取つた男が、絶好調でチームを引っ張つていた鷹木が、このタイミングで離脱。

その影響力は言うまでもない。ただでさえ流れを持つてかれ始めていただけに、ちようど今取り返しただけに、流れを取り戻すのはほぼ不可能だ。

そう、あくまで「ほぼ」である。

何せこういう時に力を発揮するのが、発揮するものこそが、主要キャラであり、木兎なのである。

しかし、それはまだ先の話だった。

その後、木兔と先輩方だけで試合が行われ、食い下がらんとしたが及ばず。

最終ゲームカウント	梶谷	19	—	25	イタチ
第1セット	梶谷	2	6	—	2
第2セット	梶谷	2	5	—	2
第3セット	梶谷	1	9	—	2
第4セット	梶谷	1	9	—	2
東京都	大会	優勝	井	園	山学園

「いや〜〜いい戦いだつたネエ〜…わざわざ来た甲斐があつたよ。さ、ウシワカ君
 神奈川に戻ろうよ。東京入りは十分でシヨ?」

「……………そうだな」

彼らは後日神奈川県で行われる全国大会に出る為にやってきたのだ。つまり、本来な
 ら東京は通過する場所である。

寄り道をして激闘を見届けた者達は1人…また1人と、帰って行く。これから彼ら
 は全国からやって来る強豪達と練習試合をすることになっている。

先にやって2人で来た為、明日にならないとチーム全体が集まらないから、今日は自主トレがメイン。

「……どこかに入れてもらおうとしよう」

「……え？」

だがそれで満足なぞ出来るわけがない。あの試合を見せられたら、バレー馬鹿のこの者が我慢なぞ不可能な話だった。

彼ら以外にも見て刺激を受けた者達が自然と一つの場所に集まり、バレーを夜通しするの、また別の話。

—————

表彰式が行われている体育館の外、廊下にて鷹木は白福の手当を受けていた。

「あいつた!!——爪と骨が殺られちまったなあ……カルシウムに嫌われたみたいだなってか？」

「……以外に元気なんだね」

「まあね。試合はまだ終わってないし、ガチガチに固めれば何とかn「ならないよ」……え？」

「片付けの音が聞こえないの？それこれ相当酷い怪我だよ……ホントに……酷い

…怪我」

耳をすませば聞こえてくる片付けの音。それはつまり、梶谷が敗北した事を意味する。

「し、白福？ま、負けたって言うのか？——んな馬鹿な」

「……まさか、間に合うなら出ようとか、思っただけよ？」

「そりゃ出るに「やめてッ」——し、白福雪絵さんっ!？」

目の前の男に、自ら傷つけられに行く男に、いつまでも気づきそうにない男に、白福は限界だった。

「……離さないから」

「へっ?」

「鷹木が言うまで話さないから」

“抱きしめて” 離さないではなく、 “話さない”。そう言っ指を触れないように避けて抱きつく白福。

「…えと、試合に治るまで出ませんか？」

「……………それと?」

「ここまでして分からないの?じゃあキスとかもつと先のことすれば……………分かるの?」

「ホアツ?!?!」

顔真つ赤に染めながら呟いた言葉。それが意味するのはたった一つ。その意味が分かった鷹木は軽く思考が止まった。

「もう嫌なの。後ろで助けるぐらいじゃ。私は……あなたの隣に立ちたい……!!」

鷹木とて、鈍感なだけで馬鹿ではない。白福から告げられた言葉を正確に読み取った。

故に……

「か、考えさせてください……」

チキツた。

後日、2人が仲良く同棲を始めるのは別の話。

(ヤツベエエエツツ!!)

こんな展開聞いてない。最近は何活に勉強に彼女にと、青春を謳歌している鷹木。幸せの絶頂に辿り着いたとも取れる今の鷹木に、真反対の内容と雰囲気を持つ木葉。そこで鷹木はとりあえず、なんかそれっぽい事を言ってみる事にした。

木兔には言えなかったが、今なら、今この時なら灰色の脳みそが役に立ちそうだと。「何か一つ秀でてなきやだめって……誰が決めたんだ?というか、なんでそんな事分かったんだ?これが分かるって、木葉には観察眼があるって事になるんじゃないの?」

「観察眼?」

部員の特技なんぞ、全部把握出来るわけじゃない。

鷲尾や猿代なんかはサーブとブロックで割りとわかりやすい。

が、まして鷹木の特技は普通分かるものじゃない……中学の後輩にはバレていたかもしれないが。

「そうそう木葉はさ、周りの誰も気付いてない事に気づいたわけだし、突然の起用にも答えられてじゃん。あんな風に連携を先輩方と取れるって、俺には無理だよ」

「……………そうか?」

落ち込む人間ってのは大なり小なり、周りと比べる事で発生するものだ。

そう言う時は「自分は自分」と線引きする事が大事………な気がした鷹木。あとは自分らしく感情を表にだすとか。

と言うわけで、鷹木はただひたすらに木葉を褒めちぎった。もうひたすら褒めまくった。

「木葉は潤滑油なんだよ！ないと困るくらい大事な！」

「木葉がいると楽しいんだよ！ないと困るくらい大事な！」

「木葉はイケメンだし、カッコいいし！バレー部の花なんだよ！」

「木葉にはすごい観察眼があるんだ！それはホントに素晴らしいものが！」

「木葉にしか頼めないんだよ！木兔とか、いじりとか、お笑いとか、残念イケメンとかは！」

「お前馬鹿にしてんだろ!？」

「お、元気になった？」

無理だった。相手が木葉である以上、鷹木はどうしてもいじり体質へと変貌してしまいうらしい。

「なったと言うかヨオー……なんかアホらしくなってきたわ。まあ、俺は俺らしくやる

「しかないか？」

「おう！是非これからも我らのお笑い担当でいてくれ！」

「いるかあ!!」

こうしてアツサリと木葉は退部を撤回した。

これが俗に言うチヨロインである。

高校3年生（原作開始）

14話

キュツキュツ！と、室内競技特有の音が響く体育館。寒い外とは異なり室内というだけ暖かい中で、中学生たちがアップをしている。

初めてレギュラーにやった子や、再び体育館に来た子、勝ちを疑わない子、緊張しまくっている子など……それ以外にも様々な様相の「子」がいる。

そう、「者」ではなく「子」である。

そんなまだまだ小さく実力が付きつつある、「子」を謂わば発展途上の彼等を、値踏みするかのよう、または楽しみに見ている「者」達が観客席にいた。

「……………」

「……………」

「……………」

「——息止めてるの〜?」

1人はバレー界1の仏頂面と名高い男・牛島若利。

「……常に話さなくてはならないのか?」

「いや〜そういう事じゃなくてさ〜……鷹木い〜何とか言つてくれない〜?」

「……コイツが話さないのが悪い」

もう1人は梟谷の元操縦士 兼 現謎の異名を持つ男・能本鷹木。

全国大会で幾度となく激闘を繰り広げている、白鳥沢と梟谷の要の2人である。

方や全国三本指に数えられるスパイカーと、方や全国何本の指にも数えられないミドルブロッカーである。

攻撃の花形……………競技の花形であるスパイクを打つ彼は全国にその名を轟かせてるのに対して、もう1人は彼の本拠地東京でも知らない者がいる。

そんな彼らが何故一緒に居るのか、そして何故彼女まで引き連れて居るのか。

それは前述のに関して「牛島若利」という男だからである。

牛島若利、彼は己の実力に絶対的自信とプライドを持っており、弱者等に代表される「興味の無い」モノに関しては、ガチで興味を持た無い男だ。

ストイックな性格で、どんな時も大好きなバレエをやる事を考え、時間を見つけてはバレエをやる、バレエ馬鹿である。

その一方で相手の皮肉を真に受けたり、真面目過ぎて冗談が通じないといった、天然の権化？ 手本？ のような面がある。

また、チーム1のくせ者・天童の適当な発言にも逐一反応するなど、呆れるほどに律儀である。

強者には彼なりに敬意を払っているそうだが、話し方がどこか「上から目線」で対等な存在としては見ていない、と良く思われる。

もつとも、本人は完全に無自覚なのだが。実力を認めている強選手に対しても、あくまで「優秀な選手」として評価しており、ライバルとは考えていない。

これは木兎光太郎に対してもそうであり、負ける事や実力が抜かれる事など、微塵も考えていない。

しかし、そんな牛島若利が中学生の時、彼は自身のスパイクを尽く拾った「能本鷹木」

に出会う。

今まで何度も敵を力で「正面」から振じ伏せてきた牛島若利にとって、能本鷹木の存在は彼に少なくない衝撃を与えた。

取れそうにないコースに打っていけば、鷹木は取らなかった事だろう。しかし、牛島は鷹木のド正面から振じ伏せようとした。

その結果、取らなきやおかしいレベルのコースで、取れたらおかしいレベルの威力で、スパイクやサーブが鷹木を狙い撃ちにした。

全力の一振を上げられ「間違えた」と、「何故俺ばかり」と、冷や汗かきまくっていた鷹木を、獲物を見つけたかのように彼は喜んだ。

その後の試合でも対戦する時は徹底的に狙い続け、知らず知らずのうちに鷹木を鬼強化していたのである。

そのせい（おかげ）で、鷹木は鷲尾のサーブを取りまくるようになったのだが、それはまた別の話。

牛島は強い鷹木がポジションが違うこともあつてか、鷹木の事を気に入り次対戦した時に勧誘しようとする思っていた。

が、次対戦した時に鷹木が参戦してこなかった為、鷹木は彼の「優秀な選手」枠から外れたので、それは実現しなかった。

ところが高一のとある大会で彼は復活どころか、1歩も2歩も成長したかのような、そんな活躍をして見せた。

そうして知らないうちに再び彼の「優秀な選手」枠に入った鷹木に、彼は言った。

「何故ここ（白鳥沢）に来ない」と。

言われた鷹木は正に「鳩に豆鉄砲」のような顔をしていたそうなの。

そんなわけで高一のある大会以来、彼等は良く連絡を取り合うようになった。頻度で言えば、牛島に鷹木の妻が嫉妬するくらいである。

「むう~~~~~」

「——でさあ…木兔の奴と来たら——」

「むう~~~~~!」

「——今度そつちの練習に行こうと思つててさ~~~~」

「むう~~~~~!!!」

「——ん？雪絵？ど、どうし——!!!
ツーツーツーツ……」

この日以来鷹木は電話を10分以内と決められた。

そして何故彼女まで引き連れて居るのか。

それは梶谷の不思議な制度の存在である。

「木兎く、俺 辞めるわ」

授業が終わり木兎・木葉・鷹木らで揃って部室向かっていた時。

学校という名の牢獄から解放される、放課後の時間になって、校内が俄に活気付いている時に。

ちようにど近道になる、下級生の教室を通って向かっているその時に。

喧騒に消えるような静かな声で、主人公・能本鷹木は突如発した。

「…ハイイイツツ?!?!」

「オイオイオイオイオイオイ」 「オイオイうるさいぞ木葉」 「オイオイ…!!!」

途端に騒ぎ出す元気印の二人組。

常人どころか、聖徳太子でも不可能なぐらいわちゃわちゃ叫ぶ元氣印の二人組。

赤葦も正直言って何をいってるかは、さっぱり分からない。

が、2人が騒いでるのに対して、鷹木は落ち着き払っている。

そこから察するに、鷹木が言った事が原因であろう。

そして、ここまで騒ぐという事は、それだけ衝撃的な事だということ。

そこまで考えて赤葦は推測を元に発言する。

「もしかして、鷹木さんが辞めるって言ったんですか？」

「そうなんだよ!!!」

そしてそれは見事に正解であったが、その瞬間に元氣印の二人組に耳元で叫ばれる。

赤葦は梟谷に来てからというもの、耳を毎日「キーン」とされ、毎日のように叫ばれながら推測をしている。

お陰でだいぶ当てられるようになったし、セッターとしての技量も上がった気がする。

バレーにおいて、司令塔であるセッターには高い思考力が求められる。それも正確なだけでなく、高速でなければならぬ。

その世界中のセッターの誰もが羨むような教育環境にいる赤葦は、このポジションを

変えたいと思わなくなっていたりする。

とはいえ、高速で思考するのは疲れると思いつながら、この環境がバレー中に役立っている事に半ば諦めながら、赤葦は鷹木に聞こうとして――

「自主練を辞めるって事か!？」

「違う」

いつもなんだかんだ鷹木は付き合っていてあげてます。

「こ、この後の練習に出るのを辞めるって事だよな!？」

「違う」

サボることも有りません。

「手を抜くのを辞めるって事か!？」

「違う」

手を抜くのがもはや生き甲斐です。

「ばー! ポジションだ! ポジションを変えたいって事だよな!？」

「違う」

もう彼はリベロに成れない事を諦めています。

「俺らの面倒を見るのを辞めるって事か!？」

「そうかも？」

「——見捨てるってのか!? 嘘だよなあ?!?!」

「うーん……」

「マネチャンネルズ・ファンクラブを抜ける気か!？」

「それはない」

梶谷グループのマネージャーの親衛隊のことで、鷹木の会員番号は1、つまり創設者である。

因みに0は何故か白福雪絵である。

「ま、まさか……学校を辞めるのか!? 学費が無いのか!? 出すぞ!!!」

「違う」

流石にそろそろ騒ぐのを辞めさせないと、周りからの視線に耐えられなくなった赤葦が言った一言。

「先輩方、別に鷹木さんは部活を辞めるなんて、一言も——」

それが答えだった。

「あ、それ」

その瞬間、周囲を静寂が包んだ。

「どーいう事だ?!? 鷹木イイイイ!!!」

抱きついて説明を求めてくる二人組。重いし、何より制服が伸びる。

そう判断して赤葦がマスコット化してる2人の首を掴んでヒョイと持ち上げる。

「そういうわけだから、白福と一緒に北陸観光してくるわ。先生方には許可もらってるから安心しといて」

「出来るかあ!!ーーーそ、そうだ!学校出ないとソツギョー出来ないんだぞ!」

「そ、そうだそうだ!学校を長期間休んだら、シュツセキニツスーが……う!ウンタラカ
ンタラなんだぞ!!!」

いまだにマスコット化している2人を吊し上げながら、赤葦も気になったので聞いてみる。

「……その辺は大丈夫なんですか?」

「大丈夫だぞ。俺、成績優秀者だから。知らないか?学費全額免除制度つてやつ」

「確か、部活か勉強で凄い成績をした人がなれるやつでしたっけ?」

「そうそれ。俺は全国常連のレギュラーで、かつ、勉強でも全国模試5回連続トップ50

入りしてんのよ」

そう、入学式で説明されたあの学費全額免除制度。

あれはもう片方だけ、つまり部活か勉強を達成した時の褒賞なんだと。

で、両方達成すると学校への登校が自由になる。

行かなくなるなら学費を払う理由もないだろ、との事。

だから、年中休みになるってわけである。

これで成績が下がったら、目も当てられないが。

因みに、白福は先生方を論破したとか、してないとか、知らず知らずのうちに一緒に行くことになっていたらしい。

北に行くと言った翌日に先生方を仕留めたとか、ナントカカントカ。

どうやったのかは明かされてないが、愛の力とだけ言っておこう。

そこまで説明すると赤葦は理解できたようで、うるさい二人組の事を任せて下さいと、頼もしい事を言う。

赤葦京治。彼は能本鷹木が大好きなのである。

そう言うわけで、鷹木は白福とだいぶ早い新婚旅行に向かった。

「そく言えばあゝ。なんで白鳥沢に行くの？折角なら海外とか選択肢に無かったの？」

「それも考えたんだけどねえ…。英語習得のためにもそうしよつかなって思ったんだけど、シンプルに海外じゃ通用しない気がしてさ」

「ふん。……じゃあ実力が付いたら行くの？」

「そうだね。卒業したらそうするつもり。勿論、雪絵にも来て「行くよ？」…だよ。だから頑張んなきゃ」

「あ……てか、2週間後授業参観日じゃなかった？木兔大丈夫かなあ？」

「……まあ、先生にわかる人は右手、分からない人は左手を上げさせるように伝えてあるから……大丈夫だと信じたい、な……不安になつてきた」

どんな時も木兔達のフォローを欠かさない、それが能本鷹木の根幹である。

「あ、俺飲み物買いに行くけど、いる？」

「……ハヤシライス」

「カップルジュース〜!」

今の彼は木兎よりも原作だったが。

「学校の名前に乗っかってんじゃねえよ」

「すっすいませーん!!」

先輩に怯えながら駆け抜けていく後輩3人。

怯えさせている元凶の先輩。

同学年だけどびどびりまくってる身も心も小さい子。

そして先輩と思われる者に怯えながら、駆け抜けていく3人組を見て、可哀想に思う鷹木。

原作キャラの中心オブ中心を見れた事に、若干感動しながらも鷹木は平然と飲み物を買う列に並んだ。

「体調管理もできない——」

「あのーすいません。ハヤシライスってここ売ってますかね?」

「え? いやぁー流石にそれは……」

「なんだとお!？」

「そうですか…んじやあカップルジュースとかは有りそうですね」

「有りませんよ!？」

「思い出作り——」

「勝ちに來たに決まってる!!」

「東北だと品揃え結構違うんですなあ」

「いや、東北以外にも同じだと思えますけど…」

「随分簡単に言うじゃねえか」

「結構大変なんですけどね? 目についた自販機は写真撮ってるんですよ。………ほら」

「うおっ!? 凄い…東京ってこんな羽が生えるやつがあるんですか!?! いーなー俺も飛んでみたいです」

「俺は飛べる!」

「いっぱい試合するんだ! 俺達は!!」

「あ! このほうじ茶とか、ここのオススメですよ。なんか配合が凄いらしくて、いっぱいどうです?」

「おー! ありがとうございます! ……ふうふう…なんか、旅行先の旅館みたいな味ですねえ。リラックス出来ますよ、これ」

「…勝つてコートに立つのはこの俺だ…!」

盛り上がってちつとも見聞き出来なかったようだが。

邂逅に失敗した事に残念がりながら、買った飲み物を持って鷹木は戻って行った。

戻って渡されたものを見て眉毛をピクリと動かした牛島と、ありがと〜と言つて受け取る白福。

面白そうな子はいたかと聞いた鷹木だったが、彼らの眼鏡にかなう者は居なかったよ
うだ。

「……………特に見当たらないな」

「可愛い子ならいたぞ?」……………痛たたたた!!」

「ヨ〜シヨ〜シ〜…痛かったね〜」

「グスン。痛かったです」

「……………仲良しだな」

「……………違うよ?」

「?」

「夫婦だよ」

「……………」

そんなフワフワした空気感だったが、眼下で試合を行なっているある一人の人物の覇気で、その空気が一変する。

「まだ、負けてないよ?」

「!!」

その声の主は小さなオレンジの髪の子であった。鋭くそして大きく見開かれた眼光は、恐ろしさを滲ませるものだった。

その後、その子はセッターのトスミスをかバーするかのようになり、反対側へ高速で駆け抜けていき、見事な「ブロード」をしてみせた。

アウトとなり負けた彼らだが、その子の身体能力と勝利への執着という、強烈な印象を残した。

「……………いたじゃん。面白そうなの」

「……………敗者に興味はない」

「可愛いのにギャップあるねえ」

「お、おれは!?俺はギャップ無いのか!?雪絵!!」

「う〜くん？鷹木はそんなのなくてもちょ〜カッコいいよ〜？」

「聞いたか若利！雪絵がカッコいいって！」

「……………いつも言っているな」

「お前にか!？」

「なわけないじゃ〜くん」

「……………そろそろバレーしをしに行くぞ」

「はーい」

折角バレーの試合を見に来たのだが、最後まで観るつもりはなく、白鳥沢の体育館で普段通り練習をしに向かった。

そんなこんなで色々な試合を見ていた3人組を、知ってか知らずか、見えるような場所から試合を見ている黒ジャージの者達がいた。

「コート上の王様か」

「高校に上がってきたら厄介な敵になりそうだな」

「あのチビも楽しみつすね」

彼らもまたそれぞれの思いを胸に抱きながら、体育館を去って行った。

遂に、原作が動き出した瞬間だった。

15話

久々に感じる都会の空気を吸いながら、1ヶ月と少しの新婚旅行から鷹木と白福は帰ってきた。

本当はもつと居ても良かったのだが、バレエはあくまでチーム戦。個人の技術だけを伸ばし続けても、連携が出来ないと本当に強くなつたとは言えない。

白鳥沢の監督はそれこそ個人技を重要視しているが、鷹木としてはやはり個人技よりも連携技の方が大事であつた。

もつとも、このままだと伸び続ける木兔の実力には匹敵出来ないから、個人技を鍛えるために白鳥沢に行ったのだ。

「——決して（原作を）見たかつたからだけでは無い。うん」

「なんか言つた〜?」

俺が1人頷いていると、不審に思った女性が覗いてくる。俺の隣を歩くのは、当然のように白福である。にしても、アニメで見た時もそうだったが、リアルになるととんで

もない美人だよな。

健康的な肌色に、スラットした手足で、出るところは出ているプロポーション。制服を着ている今はハッキリ分らないが、ラフな格好になると破壊力は凄まじいの一言に尽きる。

唯一の欠点としては、暴飲暴食つてところだろうか。だが、彼女の場合はそれすらも魅力に見える。

部活をゴリゴリにしている人間は、自然と食べる量が増える。この時彼氏だけしか沢山食べないとなるよりも、彼女も一緒になって沢山食べてくれた方が精神的に食べやすい。

見られながら食べるよりも、一緒に食べる方が何かと楽しいしな。

あの細身のどこにあれだけの量が入っていくのかは、分からないが特に問題では無いのだろう。もしかしたら、どこぞのガールズバンドのようにカロリーとかを送ってるのかもしれない。

(相変わらずカツコイイねえ…)

横目で盗み見ながら私はそう心の中で呟く。隣の男は私の唯一無二の彼氏・能本鷹木。体の大きさに合う、イケメンではないが小さく整った顔と、白鳥沢に行ったことで付いた（強制）、逞しい筋肉。

スポーツ選手にしてはやや細身な彼だが、その実、体の中にはぎっしりと筋肉が詰まっている。なんせこの前聞いた時、体脂肪率が1桁だったのだ。

色々とおかしい。いや、スポーツ選手としては普通なのかもしれないけど……。元々ここまで体脂肪率が低かった訳では無いのだ。良くも悪くも技術でカバーする鷹木は、体脂肪率や筋肉量に関してズボラで、適当だった。

それが白鳥沢に行つてから、練習の合間に筋トレするようになったのだ。なんでも「力をパワーに」とかなんとか。私としてはマッスルよりかは、細マッスルが好きなんだけど……。これはこれでアリなんだね。筋トレを勧めた牛若に感謝しなきゃ。

いい彼女（彼氏）を持ったなあ、と考えながら、彼らは本拠地・梟谷へ向かった。

—————

「ただいま戻りましたア〜」

「おえーいーい！」「おかえりーい！」「いよ！ご両人！」「……待つてたぞ」「タアカアキィー

!!「神だ……」「助かった……」「ツツツツイイイイイヨツシャアアアアアアア
!!!」「コンニャク根性!」

ゾ。……なんだ最後の。
俺らが体育館に入ると出るわ出るわ歓迎の言葉。皆笑顔で寄ってきてくれて嬉しい

なんか1つおかしいのが聞こえたが、皆気にしてないしきつと空耳なんだろう。そう
思いながら俺が手荒い祝福をされると、涙をほろりしている赤葦が。

……うん?——木兔だな。あとは任せとけ。

背中をバシバシと叩かれて、今だに痛いと思いつながら練習が始まった。今日帰つてき
た事もあって、監督達からは少し休めと言われたが、久々に皆とやるのもあってか、不
思議と身体が軽い。

長距離移動したし、筋トレもかなりしてきたから、嬉しい誤算だ。白鳥沢に行つて、原作を追体験？みたいな事をしてたある日、牛若に言われたのだ。

「ただのスポンジよりも、鍛えられた盾の方が強い」と。

そんなわけで筋肉を付けたのだが、重くなるどころか非常に動きやすい。加えてレシーブで後ろに転びながら取ることが中心の俺が、そうせずとも牛若のスパイクを取れるようになったのだ。

元々派手に動くための受け身で、体力の燃費も良かったやり方なんだが、素早い攻撃をするかどうかは関係なく、レシーブした後ですぐ動けた方が良いのは間違いないかな。

牛若に感謝しなくては。

まあ、向こうもレシーブが急激に成長したけどナ。おかしいな〜アイツ、レシーブは下手なイメージがあったのになあ〜。原作でレシーブほぼしてなかったと思うんだけど……オカシイナア。

てか、レシーブしまくったせいで牛若のスパイクを鬼強化してしまった……。俺もかなりレシーブ上手くなったけどさ、俺の成長幅がノミのように感じられてしまう。

ウチには木兔がいるし？なんとかなる。うん。それにウチは木兔を引っ張るチームだ。素の力で勝てなくても、連携で勝てば良い。

勝てるかな……。

「——いやあー久々だなあ。鷹木がここに居るのつて」

「だな。で、有意義に過ごせたのか？コチトラさらにユーティリティに溢れてるぞ」

そうして時間が進んで練習終わりの片付け中。各々素早く片付けている中、掃除道具を持ちながら猿杵大和と木葉秋紀がやってきた。

ちなみに、猿杵の最近の悩みは、笑っていないのに「笑うな」と言われる事だとか。まあ、黒髪の猫っ毛で常に口角が上がってるし、しようがないんだらうけど。だから驚尾が教わろうとしたわけで。

そしてもう一人は我らが「からかわれ役」にして、いじられ界の頂点に座る者であり、その座に甘んじて決して動こうとしない軟弱者、木葉秋紀である。

どうでもいいな、これ。

「……黙って聞いてりゃあ好き勝手いいやがって」

「ツ?!あの木葉が冷静だと!?!」

「鷹木はともかくなんでサルまで驚く」

「そりゃあ……お前だから」

「そんな場合じゃないだろう?——アレ、なんとかしないと不味いだろうが」

珍しくツツコミをしてこない木葉が、持ち前の広い視野で気付いて俺らに告げたのは、暗がりに座り込む謎のミミズクだった。

全く掃除時間だと言うのに掃除しないとは。それでも3年生か?お?

それともあれか?今日の練習終わっちゃってサミシーとかか?

はたまた自分で言うのはあれだが、鷹木と練習出来なかったあーとかか?

そういう練習の時にしつこく誘って来てたな。帰って来ていきなりガソリントankを限界まで積んでる男と練習なんざするわけないだろうが。

しつこく粘つこく食い下がるから最終的には赤葦に丸投げしたけどな。いやホント赤葦様々だわ。

今日も迷惑かけてごめんな。後でアイスでも奢るよ。

え？ いらない？

菜の花のからし和えが良い？ なにそれ。

心の中で何言ってるんだ俺。

で、そのミミズクはその体軀に見合わないほど縮んでおり、その後ろ姿は親に置いてかれた小学生のそれ。

なんてことは無い。ただの「しよぼくと」だ。

先程まで、それもホントについさっきまでの練習では、元氣一杯、猪突猛進、という感じだった為に、俺と猿杓は首を傾げる。

「なんで木兎がしよぼくれてんだ？」

「さあ？」

「鷹木が強くなりすぎてた、とかじゃね？」

「マジで？俺そんなに強くなっちゃった？いやあーごめんなあ——なわけねえだろ」
「つまんな」

うっさい！……にしても、本気でなんだ？アイツが落ち込むようなことが練習中にあつたか？いや、もしかして俺がいない間のやつがぶり返したか？

木兔の現操縦係は赤葦だから聞いてみようとして探すと、何やら監督とかマネージャー達とスコアを見ながら話してる。少しは休め。木兔の操縦で疲れてるだろうに………俺だけか？

「そーいや、なんで木兔は鷹木が大好きなんだろうな」

掃除道具を片して赤葦の所に向かう。話しながら歩いてたら、猿杓が俺にとつても謎な言葉を発した。

「そらあー………なんでだ？」

「なんで本人がわかんないかねえ」

「聞いたことないしな」

だってアイツに対して、俺がなにか特別な事をした覚えはないぞ？初対面の時にミミ

ズクの部分を触ったぐらいで、特に何かをした訳じゃないしな。

「ずーっと一緒にいるから、自然と仲が深まったとかじゃね？」

「ふーん……考えられるとしたら、同じくらい強いから、とかじゃね？」

「それは無い無い。俺とアイツが同等ってお前の目は節穴かよ」

「いや、木葉の言う通りかもしれないぞ？——ほら」

「……小見……何この雑誌。……ええと『梟谷が誇る天の矛・木兎光太郎！』って書いてあるけど？」

俺らの前にやって来たのは、別のところの掃除をしてたはずの小見。部室によつてきたのか、手にはいくつかの雑誌が握られている。時期はバラバラで、だいたい読み込まれたのかヨレヨレだ。

「そこじゃねえよ『梟谷を支える地の盾・能本鷹木！』って書いてあるじゃん」

「ああー！その記事かあ！この記者さん煽り文句上手いよな。まるで『別の世界の人』みたいな感覚持つてるよな」

「……にしてもこれ、大分ボロボロじゃねえか。——て、これ木兎が汗だつくだけのま、興奮しながら読んでたやつか」

ヨレヨレではなく、ボロボロでもなく、ヌレヌレかよ。後で木兎は部室の使い方を教えないとな。部室に入る前にシャワー行くように順路とか作つとかないと。

アイツは基本イノシシだが、指示があればチャントそれに従うのよな。赤葦に伝えたら、泣きながら抱きつかれたの今でも覚えてるぞ。最初のあの頃は、振り回されっぱなしだったからなあ……

で、そこには何やら見た事のあるフレーズが書かれていた。木兔のもつ異名『天の矛』と、俺が持つ『地の盾』である。

マツツツジでこの言葉を聞いた時本気でビビったからな！

「……俺は認めない。認めないからな！（つていか！大和怖えよ！なんだよ別の世界の人みたいって！——まさかこの記者も転生を？……いや、そんな馬鹿なはずが——）」
「なんでだよ。にしても別の世界の人みたい……ね。確かに、この人あれだろ？一日で日本縦断したって噂だもんな」

（——殺せ○せーやないかい）

「それマジなのか？飛行機で北海道から沖縄に移動したんじゃないの？」

「それがだな、この記者 日本の名所をすっかり写真に収めながら横断したんだよなあ。それにお菓子は買い占めてった聞かし」

「——殺せ○せーやないかい！」

「うーん……となると……ますます謎だなあ。……ああでもよ。この人極度の巨乳嫌いだったよな」

「——違うんかい!!」

「?」

「いや、なんでもない」

危ない危ない……なんか前世で好きだった漫才が出てしまった。あの人の俺好きなのよ。初めてテレビで見た時、腹抱えて笑ったなあ…。

お陰で翌年のその番組がつまらなく感じたよ。何でだろうね。

「おう………にしてもこの人異常だよなあ。なんでも手がものすんごい数あるんだろ？」

「——殺せ○せーやないかい」

「うん? そうだっけ? 俺は確か全身金というか、やや光沢のある黄色だつて事は聞いてるけども……」

「——だから殺せ○せーやないかい!!」

「なに言ってますか、先輩方。それ千手観音の写真の時に尾ひれが付いただけですよ」

「——ほな違うか〜……じゃないわい!!」

「さつきからどうかしたんで？」

「いや……なんでもない」

いつの間にか赤葦の所に来てたようで、監督やマネちやんずが不思議そうな顔をして俺の顔を見ている。そんなに注目しなくても、俺はここにいますよ？

君たち俺の事が好きなのは分かったからさ、そんなに俺を見つめないの。そこの君なんか、若干うるうるしてるし……

そんな憐れむような、悲しそうな目で見ないでください。

「鷹木は白鳥沢で何かあったのか？ ストレスとか」

「う〜ん〜ん……特には？」

「ありません。まだ旅行のテンションなだけですので、お気になさらず」

いやホントに。頼むから忘れてくれ。段々惨めになるから。あ、もうなってるな。

「——で、皆さんどうしましたか？」

「いやあ、あそこで、こじんまりした奴が気になったんだよ。何か知らない？」

割と付き合い合いの長い俺たち3年生が分からなくて、まだそこまで長い関係じゃない2年の赤葦に頼む我ら。

なんか情けない。

「多分ですけど、鷹木さんを牛若に取られたとか思ってるんじゃないですかね？ほら、鷹木さん行く前よりも明らかにガツシリして、強くなった感じしますし。木兎さんはそういう野生の勘が鋭いですから」

そして完璧な答えをくれたよ。

ホントに君2年生？

年齢詐称とかしてない？

頼りになるし、安心感もあるけど……その哀愁漂う瞳はなに？やっぱり詐称してない？

え？これは疲労とか諦め？

それは大変だな（すつとぼけ）

「じゃあどうやったら治る？」

少しは考えろ器用貧乏。

「鷹木が木兎に大好きーとか言えば解決するでしょ」

頭沸いてんのか猿顔。

「バレーに誘えばよくね？」

今片付けしてたろうが。

「つたく、お前ら揃いも揃ってそれでも3年か？赤葦赤葦って頼りすぎだろ？もつと俺らで解決しないと」

「そういうなら鷹木はなんか案があるのか？」

さて、帰るとするか。

「「させるか!!」」

おいコラ話せ無 脳or能 共！ここで立ち止まってないで、今すぐ木兎を何とかしてこい！もう少しで夏のインハイが来るんだぞ！？巫山戯てる場合じゃねえぞ！？

「お前が言うな！」

「大体鷹木が一番仲良いだろうが！」

「ほら！行つてこい！しょぼくと がお呼びたぞ！」

ヤダヤダヤダヤダ!!練習終わりで、旅行帰りで、慣れない体に苦勞してるんだもん！
めっちゃ疲れてんだもん！

「いつもこの後家で練習してるじゃねえか！」

「監督に言われても進んで練習してたろうが！」

「お前身体が軽いとか言つてたじゃねえか！」

それはあれだよ！言葉の綾なんだよ！だからその肩を掴む手を話せ！俺は白福と帰るんだ！今日はもう終業してるの！シャツター下ろしてんの！

「……あのおくくく」

「「なんだ!」「」」

「そのまま言い合つてるとく体育館閉めれないしくく電車無くなるかもしれないよく
?」

「「「なら泊まればいい!!」「」」

「……もう既に……赤葦が木兔を立ち直らせたみたいだよ……？」
「……え？」

その白福の一言で俺らは軍隊もびつくりなシンクロを見せた。ギギツとなる首をゆつくり回しながら見ると、そこには元気に飛び跳ねている木兔と、苦笑いを隠しきれない赤葦が。

ポーカーフェイスの赤葦が苦笑いなんて。

こんな珍しい日が来るとは……今夜は赤飯だな。

じゃなくて、ホントに迷惑かけて申し訳ない。これからも頼むわ（）

「影山　なんか凄くなつてたよな」

「うん。空回ってた天才が才能の行き場を見つけちゃったんだから、もう凡人は敵わな

「いんじゃない?」

「へえ お前でも敵わないのかよ」

「トスは……ね。トス回しで飛雄に敵う奴、県内にはいないんじゃない?——まあ、サブもブロックもスパイクも負けないけどね」

「ただでさえアイツにレシーブ完敗なんだから、「トスも負けない」って言えばクソ及川!・テメエセッターだろうが!」

「痛アツ!……だつてホントの事だもん。——それにアイツを出すのは卑怯デシヨ。俺とアイツのレシーブなんて比べるのが烏滸がましい。だから他のところで崩すんデシヨ。どんなに優れてたつてそこまで、そこから、繋がらなかつたら意味ないんだから」

「レシーブめっちゃくちやに乱してマトモにトス回しする機会なんか与えずに、「1人だけ上手くたつて勝てないんだよドンマイ」って言いたい!! 言いたいくくつ!!!」

「……引くわ」

「?エ何?だつて天才とかムカつくじゃん」

「俺は女にキヤーキヤー言われてる方がムカつくつ」

「痛アツ! 僻みはみつともないぞ岩ちゃん!それに彼女ならアイツもめっちゃ可愛い子だったじゃん!……痛っ痛アツ!!」

「あのヒゲちよこ……1年生が怖がつてんじやねーか……！」

「あー……こつから見ると親子みたいに見えますねえ」

「俺には誘拐犯に見えます」

「……」

「あの」

「……」

「……スゲー見られてんすけど」

「スンマセン……目 合わせない様にしてもらえれば、大丈夫だと思っ——」「3番さんレ
シーブ凄かったっす。うちのエースのスパイクあんなにちゃんと拾える人初めて見ま
した。あんだだけ全員レシーブのレベルが高いチームでリベロにいる実力。やっぱス
ゲーと思いました。」……

「俺も負けないっす！失礼します！」

「あつコラ！そんな一方的に……」

「……」

「な……なんかスミマセ……「ヤバいッスね」……え？」

「彼だって相当レベルの高いリベロなのに、慢心するどころかひたすら上だけを見てる

…恐いッスねエ。——俺も彼みたいになだけ見ていかないと……「アイツ」を越えられるように」

—————

どこかとは異なり、学校数がアホみたいに多いここ東京で行われる種々の大会は、どうしたって終わるまで時間がかかる。

そのため、地方なら3日間で終わる大会出会っても、東京となると3週間かかる。市大会や県大会を通ってやっと……という所と、いきなり本戦に出れるところでは、どうしたって実力差も生まれる。

加えて今年はインハイが始まるのが若干遅く、梶谷のメンバーはもとより、時間にもだ余裕のあるところでは、少しでも得点を取るために、少しでも強くなるために、練習試合も盛んに行われていた。

そうして迎えた夏のインハイ予選。

今回もぶつかり合うのは梶谷と井闔山学園。

ここまです度も戦っている、東京の二頭（ツートップ）。

たとえ梶谷がずーっと負けているからと言って、その試合を見れば「どうせまた梶谷が負ける」等という言葉は出なくなる。

「……………負けた…か」

案の定、何度目かの敗北を味わう我ら梟谷。

ホントなんでイタチに勝てないのやら。

まあ、全国でアイツらよりも上に行けばいいだけだ。

「……………負けた」

はいどうも。強化された牛若達にボコられました梟谷です。

いや、アイツら強いなのって。

頑張ったんだよ。頑張ったんだけど、最後突き放された。

スコアとかもさ最後以外デユースにもつれ込んだんだよ。

でも、牛若を最後まで乗せ続けることになっちゃったんだよね。

俺がいくらでも拾ってやるって感じでやってたら、何度でも叩き潰すって目で返されたよ。ハハ…怖すぎ。

レシーブ教えただけで、なんでスパイクも進化してるんですかねえ……そもそもアイツは試合でレシーブしないから教えたってのに。

これじゃ鬼に金棒やんけ……

折角俺が飛ばない鷹から、空飛ぶ鷹になったのに、盾で持つて殴りまくったのに、負けちまった。

うーん。木兔含め、皆良かったんだけどなあ〜。

まあいいさ。次ので最後なんだ。次こそは、最後の春こそは、俺らが上に立つてみせる。

覚悟しとけよ？牛若。

お前が強くなっても、俺らがそれを上回ってやる。

あ、主人公達来れるかな？

16話

7月

それは汗と涙の季節。

新学期が始まって、高校デビューを決めた者や、決められなかった者関係なく、一夏に想いを馳せて漫画のような展開を求めて行動を起こす季節。

起こした結果が吉と出るか凶と出るかは分からないが、夏のインターハイを終えた北のとおあるバレー部員達は、春のインターハイに向けて東京の地を踏む。

その少し前に、暑さを受けて体感温度1.0倍くらいの熱量を誇る男・木兎光太郎は意気揚々と過去を語る。

「鷹木と会った時の話？なんでそんなこと聞くんだけ？」

「……ええと」

「俺と鷹木は親友だからならぬ！会った時から大親友だ！」

「なんで初対面から下がってんだよ……ああすいません記者さん。コイツいつもこんなんで、お気になさらず」

「あは、あはは……で、では能本鷹木選手！今回の日本ユースの打診を受けた時、どのような気持ちになりましたか？」

「そうですね、中学時代から戦っている白鳥沢の牛島若利君と同じユニホームを着るのが楽しみです。隣にいる木兎光太郎もエースは渡さない、と、打診を受けた日からずっと気を吐いてます」

「——鷹木と会った時は……そう！その場にいた他の奴らの誰よりもバレーが上手そうで！今度2人でやろうって言ったら、律儀に来てくれたんだ！それから呼んだら必ず律儀に来てくれたんだ！今までのヤツはすーぐに来なくなっちゃったけど——鷹木は——律儀で——それで——」

「覚えてたばっかの難しい言葉使いすぎるな……頭悪く見えるだろうが……」

「……仲が良いんですね！」

場所は合宿が行われる梟谷の学校の教室。原作でもそうだったかはハッキリ覚えていないが、今年1回目の合宿はウチ、梟谷で行われる。

期間は土日の2日だけだか、この後の1週間やるし、その後にも2日だけやる予定だから非常に楽しみだ。

梶谷の部長として真っ先に主人公達に会えるし、原作読者側の人達にはここで初登場なわけだから、しつかりインパクトを残さなきゃな。

「……では、ユースでも是非活躍してきて頂きたいんですが、ズバリ、代表としての目標を教えてください」

「優勝です（だ!）」

打ち合わせなんか一切していないなか、完璧にハマった俺と木兔の声。少しだけ、時間が止まったような不思議な感覚に包まれた中、目の隅に得意げな顔をしている木兔が見えて現実に引き戻された。

少し驚いてる俺をよそ目に、「俺と鷹木は親友で——」とまた話し始めた木兔と、今まで見た中でいちばん微笑ましい顔をしている記者の人。

楽しそうに話す木兔とは裏腹に、俺は若干の気恥しい思いをしながら、その後軽く木兔をしめることにした。

「鷹木〜? タ・カ・キ〜? ……ターカーキー? ……サーターアンダギー?」

「誰が穴なしドーナツだ……あれ、2人は？」

サーターアンダギーとは、沖縄県の伝統的な揚げ菓子。

※サーターアンダギー……名前の由来は首里方言からきていて、「サーター」は砂糖、「アンダ」は油、「アギ」は揚げるという意味。要するに穴なしドーナツ。

「取材の人はもう退出してるし、木兔は廊下を駆け抜けようとして先生に怒られてるよ？」

言われて当たりを見渡せば、もう既に俺以外の2人はいなくなっている。一体いつの間に……。

ところで、目の前の雪絵は大量の荷物を持つてるのは何で？もしかして昨日の続き？

まあ、いいか。

「雪絵」

「ん〜？」

「これからも宜しくな」

「？………フフツ………変なドーナツ〜」

だから俺はサーターアンダギーじゃねえよ。

赤葦といい、コイツら物語の登場人物つてのは不思議な奴らだ………。

普通の人達じゃあ「物語」と呼べるような人生では無いだろうし、前世の俺しかり、ね。

いや、色んな変人がいるから物語が「面白く」なるんだ。

じゃなきゃ、前世の俺を完全に否定することになるしな。

場所はとある学校。その中でも日頃から多くの室内競技が行われている体育館に、多くのバレー選手が集合していた。各校が数十人引き連れて来ており、広い体育館ではあるが、人数のせいで少し狭く感じられた。

「ここが…お台場？」

「さすがノヤっさん！」

「違うだろうが！」

その建物の門の外から外観を見て、海が近いお台場と勘違いした男はローリンググサン

ダーの西谷夕。

ちっちゃい背中につっかい守備の要としての責任を負う、レベルの高いリベロである。

そんな彼を尊敬する男、田中龍之介。平凡ではあるが能力は高く纏まっていて、烏野に不可欠な攻撃的選手である。変な奴でもある。

そして問題児を纏める、烏野の排球部の部長・澤村大地。1年の問題児がいなくてもこの2人のせいでいつも気苦労が絶えなさそうに見える男である。もしかしたら作中ナンバーワンの苦労人かもしれない。

「まあまあ、大地、初めての東京なんだ、緊張するより賑やかな方が良いだろう？」

「……そうだな、だが、デカくて髭が濃いアイツが周りをビビらしまくってるんだが？」
そんな苦労人に声をかけたのは、なんか結構女性人気がありそうな男、菅原孝支。優しい優しいイケメンである。

その後ろでウロウロソワソワしてる男、東峰旭。人とチラホラとすれ違う度に、恐怖を植え付けている。なお、めっちゃくちや気が弱い。

「あれはッあれはもしや——スカイツリー?!?!」

「いや、あれは普通の鉄塔だね」

そんな彼らを見て爆笑してるのが、音駒のキャプテン・黒尾鉄朗。加えて副将である、

海信行。道案内のためにわざわざ来たのである。

「なんか人足んなくねーか」

「実は——」

そんな会話をしながら進んでいき、目当ての高校の門を彼らがぐぐった時、待ち構えている者がいた。

「?あなたは?」

炎天下の中両手にクーラーボックスを2つずつ持ち、上半身は裸で下半身は黒のショートパンツ。頭にはテンガロンハットにキャピキャピしたグラサン。よく見ると背中にも大きな荷物を背負っていた。

「おれか…暑いし、簡単に自己紹介しようか。——俺だ、よろしく」

「みじか!?だから誰!」

「俺が誰か?そんなことはどうでもいい、暑いからな」

「ええ…?」

「さあついてこい。ここは俺の庭みたいなものだ」

(梟谷の人、なのか…?)

「……なんか変なやつだな」

「シテイボーイにとつちや、田舎モンには名乗る名前すらねえつてのかわア!」

「落ち着け田中……黒尾、今のは？」

「ああ……ククク……ククク……ブフオツ……アハハハハハ!!!……ふう、アイツな、アイツはな……梶谷の部長だよ」

「!?」

「能本鷹木、雑誌でも紹介されそうで、されない。そんな地味だけどヤバい強さの奴だよ」

ズツシリズツシリというような効果音が聞こえてきそうな重装備で軽やかに歩いていく前の男、彼こそが能本鷹木である。

何故彼がこんな格好をしているのか、それは合宿の前日に遡る。

「バストが大きくて嫌なことはくまず肩こり。次に、大きなバストのせいで、若くても中年太りに見えちゃうしく。似合う服ないんだよね。合うブラジャーもないしく若い頃からオバサンブラとかやだよねえ。胸元をチラチラ見てるのも不快だし。テレビで巨乳アイドルを見かけると、若い今は仕事で武器にできるけど、将来垂れるって分かるから同情しちゃうなあ」

「……………そ、そのう…………」

場所は鷹木の家のリビング。テレビには巨乳グラビアモデルさんが映り、男として鷹

木は目をかっぴらいて見入っていた。

簡単に言うのと、そんなだらしなない彼氏を見た、彼女白福雪絵による報復措置である。

「あせもが大変でねえ、毎年夏になると、胸の谷間やアンダーバストに汗がたまつてかゆくなる。いつでも汗を拭きとれる場所ではないしね」

「あの」

「胸が大きすぎて、胸の下や足元が見えない人もいるんだよ？歩いている時に転ぶ、食事中にお腹のあたりにソースが飛んでも、見えないので服にシミができたなどという例も珍しくないんだって」

「ホントにすいませんでした」

思いついた事を言い切ると、テレビに齧り付くかのように見入っていた鷹木が、白福の足元で土下座をしていた。

今まででいちばん綺麗なThe・土下座である。

心做しか普段より一回りも二回りも小さく見える。

これがあの全国大会常連の強豪校、梶谷の部長だといふのだから驚きだ。情けない姿だが、これでも立派に部員を纏めている男なのだ。

ゲームキャプテンを任されてる木兔と、副部長の赤葦、そして部長の能本鷹木。

この3人が梶谷のリーダー達であり、他校からも恐れられている強力な3人組であ

る。

その1人が目の前で敗北宣言。普段と違う上下関係。足を乗つけやすい大きな背中。白福が無言の間一切動かないことから見える忠誠心。

それらを加味して、白福雪絵は目覚めてしまった。

そう。

「あの格好はな、彼女を怒らせたからなんだと」

「怒らせた？」

「彼女だと!？」

「田中、ステイステイ」

「私をご主人様つてどう〜？」

「……………え？」

その日のことを、後に鷹木はこう語る。

「なんかよかつた」と。

場所が変わって時も進んで練習が始まった。

「お願いしあす！」

「しアース！」

「ウエーイ！」

「オエーイ！」

体育館の至る所で掛け声が出始め、ボールの弾む音が練習の始まりを待ってたかのよう
うに木霊する。

生川、森然、梶谷……。

関東に拠点を置くバレーの強豪校達が少し遅れて入ってきた烏野に視線を送る。

その視線は一見、歓迎していないように見えて、その実どれ程の強さなのかを立ち振
る舞いから見定めるかのようだった。

「プフー!!鷹木どうしたその格好!さっきまでピシッと決めて『記者さんと話してくる
ぜツ!』とかイケボで言ってたのによー!」

「どーさまた白福に怒られたんだろう?まーったく、学習しねえよなあ鷹木は」

「勉強ができる頭の良さと、私生活での頭の良さは比例しないな」

「……………プツ」

そして烏野を引き連れた男、能本鷹木は仲間からも他校からもめちやくちや面白がられていた。

「だー！うっせえ！お前ら全員試合で地獄見せてやるからな!!」

「おー！やってみるお！」

「返り討ちにしてやらあ！」

血気盛んな若者達。そのうるささときたら、夏の鬱陶しいセミの声をかき消して騒音被害となるほど。

烏野のキャプテン・澤村に練習の説明を終えた黒尾までもがその喧騒に加わっている。

そんな男子達の姿を見て「ガキだなあ」と呆れながら微笑むマネージャー達。東京合宿の始まりである。

「西谷ナイスレシーブ！」

「レフトレフト！」

「クッソ！」

練習試合が始まってしばらく、負け続けている烏野の姿があった。特に梶谷は圧倒的

に強く、スコアは9―25である。(※原作は16―25)

「じゃあフライング1周……!」

負けた側の罰を淡々とこなしていく烏野の、どこか威厳があるフライングの掛け声を聞きながら他の高校の選手たちは話していた。

「あいつら何敗目?」

「平凡……だよな」

「音駒が苦戦したヤバい1年でどれのことだよ」

そんな烏野の実力に対し期待はずれな雰囲気を出し始めた時、

「おつままだやってんじゃん、間に合ったね。上出来」

「主役は遅れて登場ってわけか?ハラ立つわー」

日向と影山が到着した。

2日目の合宿にて、烏野の排球部の顧問とコーチはマネージャー達と各校を見ていた。

生川高校…『サーブこそが、究極の攻め』

森然高校…コンビネーションの匠

「そして……」

「こら研磨！逃げんな！」

「腕もげる……」

「もげない！」

強力なスパイクは当たれば腕が消し飛ばされるのでは無いかと、そう思っても仕方がないほどの重低音を奏でる。

「さすが……ウシワカ同様、全国5本の指に入るエースか……」

「本当にありがたいです……」

“全国優勝を狙う”大エース擁するチーム・梟谷学園。

その圧倒的な攻撃力をどのチームも1番に警戒する。

強いチームはその次の強力なサーブと高いブロックにも警戒する。

全国レベルとなると潤滑油にリベロ2人組に立ち向かう。

優勝を狙う超強豪校は矛と盾と真つ向勝負を挑む。

そんな梟谷の部長が烏野の会話を盗み聞きしていた。

「空中での最後の一瞬まで自分で戦いたい」

「あの速攻にお前の意思は必要ない」

「うんうん……」

「あの速攻は十分凄い。あれを軸に他の攻撃を磨いていくのがベストだと思う」

「あの一瞬を空中でどうこうしようってのも、正直難しい話だと思うぜ」

「うんうん……！」

「〃向こう側が見えました〃 頂からの景色が見えました」

（神業的セツトアップから繰り出される速攻……それを空中で日向が自分の意思で捌くことが出来れば………いやいや出来るかそんなもん——）

「いやいや出来るさそんなこと」

「!?!」

声が出た方を見ると、扉の前に腕を組んで両足に拘束具を付けている変人がいた。

「机上の空論、大いに結構！ウチには机上どころか考える事を放棄しかけてる奴がいるからね！」

ニカツと歯を見せて笑うその男は、身長と段差の上に立ってることあつて、より異様さと存在感を発していた。

「さっきの変な人！」

「コラ！日向！」

「梶谷の部長だよな」

彼は思わず彼を指さした日向に微笑み、怒ることは一切なく彼らと同じところに降りてきた。

「その通り、君たち烏野のことは青城と白鳥沢の知り合いから聞いているよ。改めて——」
彼はそう言って大きな手を日向に差し向けた。

「俺の名前は能本鷹木。梶谷の部長をやってる者だ」

「ちなみに足のコレは、俺の趣味じゃない」

そう弁明する鷹木だったが、初対面のインパクトを消すことは出来なかった。